

其日の來るを指折り數へぬ、

漆墨くろくくと艶を含んで旭日に輝く白き陶器の表札、次第に多く聯りて宵闇の無提灯にも門違ひなき此ごろの根岸ながら、なほこゝに白晝さへ踏み迷ふべき片蔭の細道ありて、夜は一入さらに淋しく梟の啼きやせむかと思はるゝ榎の大木もの凄く繁れる下より根深き小笹の垣を結び廻らしつゝ、やうく織木の柱に傾く廂を支へし古き小門のうち、これぞ倉橋幸藏が今の住居なりける、

されど家は流石に其道の功者が形見に残せし數寄屋形にて、根は淺く骨は細けれど幾年の風雨どこの寸隙に吹き入りし痕もなく、むかしの主人を語り顔なる庭の松が枝に秋の夕日を遮りて、窻近き武者立の樹間より馴れし小鳥の飛び交ふ風情、何とやら苔の匂ひ濕かに人を襲

うて浮世の塵に遠ざかりし心地、これが半歳も空家のまゝ取残されて住むものなく住めば家主も案外の俗物、これを月に六圓の家賃とは何たることぞ、さても今の世は萬事を極彩色の祭禮騒動、かゝる家を本宅として銀座街頭に別荘を持つほどの洒落者はないかと、倉橋幸藏たゞ獨り鼻を蠢かして飯炊の婆を顧みつゝ、『ねエ婆や、世の中は暮しやう次第で人は氣の持ちやう一事といふが眞實だね、乃公も過日まで大切な自分の體軀を目の仇敵のやうに追ひ使つてさ、朝ぬツと起きるや否、すぐ車に乗って役所へ出かける、役所で一日さんざ勞れて來ると、またすぐ人が逢ひに來るといふ騒ぎで、毎日々々朝から晩まで何をして居つたのか、まさか裸體でも歩けないといふので洋服を着た機關人形が車で持ち運ばれるやうなものさね、ところが斯うして自分の體軀を自分の物にして見ると、急に氣が清々として籠の鳥が放されたやうだ、實に今更いふでもないが、およそ官吏ほど馬鹿らしいものはないぜ、ハ、ハ、ハ、

第一この家なンざア案外の拾ひもので、なぜ今まで人が住まなかつたらう、この様子ぢやア脚下にさへ氣を付けて歩くと、まだく何落ちてあるか知れない世の中だぜ、しかし婆や和女は淋しからうね』『なアに貴方、もう人間の通り相場を七歳も越して今年五十七の婆で御坐いますもの、今に墓を住居に致しまする身で淋しいの何のといふ事は御坐いませんが、旦那様こそ、まだお若いに奥様もなし、萬事に就いて嘸、御不自由で在らッしやるだらうと存じます』『いや妻子があツちやア、かう俄に氣樂な身にもなれないよ、こゝが足手纏綿のない獨身者の面白さで、役人が嫌になれば、すぐ其日に廢められるし、不便でも淋しくツても自分の氣にさへ叶やア、すぐ其日から斯んな風流な家にも住めるのさ、まづこゝ一年ばかりは此ま、ねエ婆や、乃公と和女が母子のやうにして暮さうぢやアないか、官吏を止めて月々取る金が無くなつても三年半の間に少しの用意がしてあるから結局、家のうちに人が減ツて

萬事の雜用が省けて無駄な交際がなくなつて、差引勘定、今までより二人の喰ふものぐらゐ少々奢ツても別に苦しくないのだ、まして世間かまはず我ま、勝手の氣樂に住むだけが第一の徳だよ、ハ、ハ、ハ、まア乃公を子のやうに思ツて世話してくれ、その代り不幸な和女が外に依頼のないといふ身の末を乃公が面倒みるからね、安心して居るが宜い、ハ、ハ、ハ、俗にいやア何かの因縁だらうよ』『ありがたう御坐います、先達も申し上げました通り、どこへ今更ら身の振方もない厄介婆、どうか末長く、ホ、ホ、ホ、いくら慾張ツて末長くと申したところで、いつまで御奉公の出来る年齢でも御坐いませんが、まづ動けます間は』『なアに婆や、和女は年齢の割に人並すぐれて元氣だから、まだ確固なもんだ、なか／＼前途が長いよ』『いえ旦那様、もう貴方、いけません、かうして御慈悲に使ツていたゞけばこそで御坐いますが若くツて氣が利いて萬事が當世風に立働く女中を上下二人までお暇になつた中で御坐います



根岸の里といひしは昔、今は根岸の町ながら、なほ片隅に取残されたる風流の形見とて、萱の屋根に餌を争うて啼く鳥の聲々は聞ゆれども、門前さらに車馬の音響もなく、庭に武者立の梢を漏れて土廂の軒をかすめつゝ、讀書の窓に射し入る旭日の影に溢茶一碗の心地、ながく人間を脱却して歸るに途なき山の奥に入らずとも、暫く人事を避けて垣一重の外に浮世を見るの便利ありと、たれ憚らぬ褻衣のまゝの身を悠々と床の柱に凭せて、あはれ今ごろは洋服姿の忙しく月給の絲に曳かる、機關人形が車を飛ばして駆け出す時刻ごと、きのふの我を嘲りて人しれぬ微笑を浮べし折しも、寂寞たる門内に小兒の啼く聲きこえぬ、たま／＼飯炊の婆は今日の買物に出で、我たゞ獨居、眉を擧めながら立出で、そつと此方より窓越しに差覗けば、例の上田力が五尺八寸二十貫目の大兵に今年やう／＼二歳の我兒を背負うて、宛ら大木に啼く蟬の宿りしが如く、突き出したる鳩胸に兵兒帯の洗ひ曝せし十文

字、大道白に似たる腰の邊りへ用意の襦袢を風呂敷に包んで吊り提げ、踏み顛んで怪我過誤させじとや冷飯草履を穿ち、帽子も被らぬ五分刈の頭に古手拭の鉢巻しながら途中を慰めし玩器の風車を挿み、をりしも秋の暮に散り敷く門内の木葉を靜に踏んで彼方此方へ身を揺り動かして、歩む體、しかも啼く兒に氣を取られて猶そのまゝ案内も得えはず、こゝに我ありとも知らず達磨に等しき大目玉を細めて、ねん／＼ころりと小聲に唄ふ風情は正に是れ詩人の泣くべきところ、無残や浮世は斯る男に何として子を持たせしぞ、せめて妻のみならばと流石の倉橋幸藏おもはず涙を浮べて俄に聲も得かけず、暫時そのまゝの無言に打守りぬ、されど背に啼く小兒の聲いよく高ければ、あはれ今は持て餘したる體、やう／＼胸邊の十文字を解いて脇の下より子を取卸しつゝ、玉を抱くが如く前に抱き直して自己が腹に暖めし牛乳の護謨口を與へながら、また暫し其まゝに身を揺り動かせしが、やがて啼き止みしころ

始めて聲をかけぬ、『たのむ、たのむ、誰か取次は居らんか』  
待ち設けたりし倉橋幸藏、聲に應じて立出でながら、『やア上田か、よく来てくれた、しかも  
遠路わざわざ愛兒を背負つて、さア此方へ、生憎、飯炊の婆が居ないから子を取つて何うす  
る事も出来ないが、まづ兎も角、ハ、ハ、ハ、ハ、馴れない僕の手ぢやア却つて啼くだらうね』  
「いや元來さう、びい〜と啼く奴でもないがね、今日は少々途中が遠くつて時間が取れたから  
さ、しかし、もう大丈夫だ、かうして抱いてる間に寝て仕舞ふだらう、ちやうど朝の一時で  
寝る時分だから、ハ、ハ、ハ、ハ、憐れむべし上田力も竟に身を捨つる籤はありとも子に乗すべき  
里はなしといふ一個の浮世男となりにけりだ、ねエ倉橋、何故こんな子が出来たんだらう』  
「ハ、ハ、ハ、今更ら妙な事をいふぢやアないか、僕アまた君にして何故そんな子供を出来した  
んだらうと問ひたいね、しかし、まア奥へ來給へ、今に婆が歸つて來たら暫く小兒の守護を

さすから』

晝の書齋と夜の寢室とを兼ねて、もし今の身に客あれば客室にも用ゐるべき奥の八疊へ伴ひ  
つゝ、あつき心の溢茶一碗まづ汲んで差出せば、半ば睡れる我子を膝上に抱きしまゝ、太き首  
骨を捻ぢ曲けて片手に呑み乾しながら、折しも開け放ちたる縁の柱に身を凭せて庭前を打眺  
めつゝ、『こいつア妙だ、古色蒼然、なか〜寂びた庭だ、狭くつて低い家が今時の白ッ  
ほい見てくれの俄普請と違つて、この土廂の深く垂れたる工合、第一が萱葺の古風に田舎ら  
しいところ、もしこれを文章めいては、騷がしき浮世も知らずがほに住み果て、雨そぼ  
降る夜の音しと〜と枕に通ふ心地、ハ、ハ、ハ、ハ、得も言はれまいね、僕は元來の木強漢で所  
謂風流韻致といふことを解さないが、願はくば此兒をして斯る閑靜の地に育て、みたいよ、し  
かし不幸、僕の如き父を持つて生れた子は生涯その親の愚に伴うて人間死活の中有に迷ひつ

つ大きくなるんだから、つまり當世の務を談じて大廈高樓の上にも養ひ得ず、また當世の務を斷つて閑雅幽靜の境にも育て得ず、わづかに九尺二間の裏住居か乃至また棟割長屋の壁と壁との間を天地として市井蒼閭の俗塵に没了するのさ、實に憐れむべき極だね、しかし子に於ける愛に至っては世の中に凡そ僕ほどの父はあるまい、せめてこれが子に對する申譯また諺にいふ親馬鹿の隊長だ、ハ、ハ、ハ、『いや決して君ばかりぢやアない、およそ子に對する親の慈悲として人間これで宜いといふ境遇はなからう、またその愛情の點を見れば天下いづれか親馬鹿ならざるだ、しかし汐入村に年中の空腹を抱へて膝小僧抱き寐の嚙昔を回顧すれば上田力その人をして今日こゝに父たらしめ子あらしむる浮世の事情また人事の變遷、殆ど今昔の感に堪へんね、出で、は頭に蓮の葉の帽子をいたゞき手に薪雜棒のステッキを振り廻し都下百萬の俗物を睥睨して山の如き兩肩に横行闊歩し、入ッては荒土の喰み出でし天井

を睨みあげ波浪に似たる破れ疊を叩いて氣焔萬丈さらに火焔を吐くが如き當年の鐵腸漢が、古手拭の鉢巻に玩器の風車を挿し腰邊に掛替の襪襪を携へ懷中に用意の牛乳を忍ばせて低聲幾番、ねん／＼ころりの子守唄を唄ふに至ッては、人生一種の感に打たれて只これ涙あるのみだ、願はくば斯の子いよく健全に長じ前途ます／＼幸ひ多き運命に向うて父を慰めよ、あはれ我友をして俗諺いはゆる三界の首枷に泣かしむる勿れ、やア無心に笑ッてるぜ、目を半眼に見開いて花に置く自然の露ともいふべき微笑を浮べし體、眞に神だね、さらに人間業でないね、しかも天生の容貌なか／＼凛々しくッて逞しくッて顔の道具の大粒に揃ッた色白の工合、失敬ながら、まさか細君に似たともいはれまいし、なほさら君に、ハ、ハ、ハ、いや君に、どッか君に肖たところもあるがね、こりやア成長の後、頗る立派な美丈夫になるぜ、妻を娶らば花の如しともゆかなかつたが、子を産んで正に玉の如く出來たよ』ハ、ハ、ハ、しか

し四十いまだ家をなさずといふ丈夫四方の宿志に反いて、徒らに二間まぐちの借家住居を俗界の巷間に構へたから無効だ、しかも其家さへ浮世といふ敵に圍まれ四面楚歌の聲で將に落城せむとしたところを、やうく妻の活動に依って一方の血路いや活路を求め、受賣の安煙草その他あらゆる日用の小間物店を開いて僅に露命を繋ぐ僕の境涯、まるで男一疋としての價値は零だね、今は只たこゝに大男あはれ總身に智慧が廻りかねたる一個の子守を見るのみ、しかも元來の無器用しぼく細君に叱られ啼く子に驚かされて狼狽する體、をりく我ながら氣の毒に思ふ時があるよ、ハ、ハ、ハ、しかし自分勝手な事ばかり饒舌して濟まなかつた、實は今日、川上が来る筈であつたがね、四五日以前から感冒で寐て居るから、また黒田奴は病餘いまだ舊に復せざるのみか、例に依って例の如き彼奴ちやア少々いけなといふんで、ともかく僕が總代に遣つて來たのさ、つまるところ君が突然、官を抛つて舊の一書生に

なつたといふ通知に對し、また三月の後でなきやア斷じて逢はないといふ何か意味ありけな言に對し、いは今更ら濟んだ後の祭禮だが、むさうかと他人の進退を新聞の六號活字で見るとやうな氣にもなれない我々だから、まづその説を伺ひに來たのよ、萬事に周到緻密で猶更ら一身の出處進退には最も慎重の態度を取るべき筈の君が、こゝに穿き古したる冷飯草履を脱ぎ捨つるが如き體には、定めし、何か深い仔細があるだらう、いや過去の仔細よりも寧ろ將來の事に就いて其説を聞けば、我々また大に得るところあるべしといふやうな理由でね、いづれ川上も更めて來るが、僕まづ馳せ參じたのだ』いひつゝ、膝上に睡れる我子を抱き直して、春の浪に揺らるゝ舟の如く身を動かさず、今更に倉橋の面體じつと見詰めたる風情、火口に似たる眉もろとも眞丸の大目玉を翫て獅子ツ鼻の息を含み夜著の袖口に等しき唇端を結んで、誠心誠意に友を思ふの情、しきりに其説を聞かむとする體、啼き損ねたる小田の蛙

が天を仰いで雨を乞ふが如く呵しけれど、倉橋がためには死せし親の涙をもて慰問せらるゝよりも嬉しく有難く、おもはず膝を進めて容を更めながら靜に語り出しぬ、

『三月目の今日、君に問はるゝまでもなく、由來の交情からいへば苟も僕が三年半の席とせし官を辭するの前、まづ君等に事情を打明けて相談の上その進退可否を決すべき筈だがね、つまり民の租税に衣食する官吏は固より倉橋幸藏の本意でないから、いはゞ生涯の前途に向うて歩む旅の腰掛茶屋さ、只これ人生行路の道草を喰つたと同じ理由で、さのみ重きを置いて居らないから、別に彼はいふほどの事でもないと思つて獨斷に遣つて仕舞つたのさ、急に官を抛つて舊の一寒生に立戻つたといやア何だか人物らしく仔細らしく聞えるが、なアに其實僕が如き人間いまだ世に出てゝ身の置き處を得るといふのが抑も間違ひで、やはり猶このまゝの一寒生で汝々として修業するのが當然さ、學なく才なく金なくして徒らに志の小な

らざるものが手をあげ脚をあげて當世に立たむとするには、まだ幾何の苦學難行が必要だ、しかし新聞記者としての一年半、官吏としての三年半、この間に得たる僕が頭腦中の收穫、今は語るにも足りないが他日また何等かの役に立つたらうと竊に自信して居る事もあるさ、ハ、ハ、ハ、まづ今のところ年期小僧が其店の商賣嫌ひで暇を取つたと同じ事だ、別に深い事情も理由もないんだからねエ』『む、なるほど、君の言を聞いて僕は慚愧汗顔の至極だ、いよゝ、我みづから我に恥づべしだ、新聞記者としては忽ち都下の文壇を驚かし官吏としては一躍その前途多望を稱せられたる君が、猶かつ舊の一寒生に立戻つて當然の修業最中となすべき今日、こゝに僕が如き既に妻子あるは何のためだらう、しかし今更ら妻を捨て子を棄てたところで元來の魯鈍癡愚、地に生えた出來損ひの南瓜が梢の林檎にもなれないから、天生かくの如き僕は天生かくの如き僕で骸となり畢んぬとして、さて倉橋、君は將來ますます



奮勵一番、やってくれ、大に遣つてくれ、そもく汐入村に巢を構へし呼子鳥の昔その五人のうち、前途さらに羽を伸すべきものは川上と君と先づ吉田の三人だ、川上は今のところ三年飛ばず啼かすの流で所謂尺獲蟲の屈を學ぶの體、また君は一たび社會に試みた自己の手腕を足らずとし其地位に甘んぜずして更に大に出直さむと欲する勢ひ、吉田の聲もなく香もなく日夜孜孜として一心不亂の讀書生たる是また竟に池中の物でないらしいが、さて残る二人の難物は黒田と僕とだ、元來あの黒田は才氣も度胸も人に勝れて居るが惜しいかな其才氣が横に迸つて危いかな其度胸が斜めに傾いて居ると、曾て川上が評した通りの奴で最初から我黨隨一の横著漢、しかし我々が不在中かの正面の古壁に半紙二枚を張り付けて、落ち著く先は山にあらず川にあらず東京の眞只中しかも紅塵百尺むらくと湧いて煙の如き大俗の中にありと、筆太の走り書べつたり一札の立退狀を残して汐入村を飛び出した時の勢ひは、な

るほど化物の多い世の中、彼奴また如何なる事を仕出來すかと思つたが、つまるところ山嶽震動して二十日鼠一疋も飛び出さぬ結果で、憐れむべし女一人を浮世の涙に葬つた果が自己もまた死に損ひの大病を煩つて、今ちやア僕が二階の片隅に食客的の境涯をりく下へ呼び降されて妻が嚴命の下に澁面を作りながら煙草の店番をさせられ、朝夕に門松を掃かされて一句もない體を見ると、敗軍の將また兵を談ぜずして卒伍の後方に隠るゝと一般、何だか物の哀れを催して可哀さうに思ふ事もあるがね、その實は彼奴まだ何處やらに人を屁とも思はぬ例の横著があつて困るよ、妻が折角あの貧乏世帯の中から骨を折つて夕飯の用意を拵へて置く菜を、べろり晝前に盗んで喰つて仕舞つたり、わづか一個に就いて二厘三厘といふ蠅蟻の涙を積んで我々夫婦の外に現在おのれの露命までも繋いで居る賣溜の錢函から、銅貨幾枚を掴み出して門へ來る乞食に抛けてやるといふ始末、をりく僕は妻の手前、はつと思つて

も本人の彼奴は例に依つて例の如く酒ア酒ア然たりだ、たとひ小言をいッたッて石地藏の頭上を蚊が螫すほどにも思はない人間だから殆ど持て餘すね、しかし、こりやア他人にいふべき事でない、ないのみならず元來が一家の中に於ける些々たる小事、彼また殆ど無聊に堪へざる滑稽的に演ずる事と見れば見るべしで、もしそれ黒田に由來あの失敗歴史を取除いて舊の健次そのまゝの男とすれば、天性さらに人後に甘んじて片々たらざる奴、無論、決して尊敬すべき人物にはなるまいが、將來に向うて心機一轉の曉は寧ろ今日の當世に馳驅して如何なる礎磐を築きあけるかも知れない奴だ、儲さうなると最後の一人こゝにこれ上田力といふ厄介物、逆に吊して絞つたところが人並すぐれて多量の鼻血は出るにしても悲しいかな智慧才覚といふものは一雫もない乾燥無味の愚物、愚は愚を守つて宜しく後方に墮若たるべき筈を、その愚物が徒らに先登第一かゝる子を抱いて覺束なき浮世の掛橋を渡らむとする前途の

無鐵砲、實に夜更け人定まつて後の涙泣然たりだ、おもへば我みづから招いだやうなものだが、人生の悲惨は何の容赦もなく迫り來つて朝に望羊の歎また夕に五里霧中を彷徨ふの體、あゝ君が有爲の資を持つて今日なほ妻を持たず子を産まざるのみか、あらたに一介の書生となつて奮勵一番さらに爲すあらむとするに對しては、いよく今更の慚愧、ますく返らぬ後悔、いや實は寧ろ羨むに堪へたりだ、他日なほ進んで君が宿志を遂ぐるの曉も、その友たる僕は依然たる舊阿蒙、いはゆる驥尾に附して一事の端をなすことも出来ないが、せめて涙の種の我一子、此兒だけは君等に託して父に勝るの人とならしめたいもんだ、ねエ倉橋、今から頼んで置くぜ、ハ、ハ、ハ、まるで自己の愚疑をこほしに來たやうだが、奈何せむ今日の實際これが僕の本音だ、胸裡を割つて一點さらに何物も残さざる眞實のところだ、もし君が一朝こゝに官を辭して忽ち其収入と其境遇に代るの業でも取るといふんなら、愚なりと雖も

上田また更に感じない、單に只その進退移動のみを聞いて川上黒田等に報告するばかりだが、既に肥馬輕車に乘らむとせし當年三十五歳の君が、もとの一寒生となつて再び苦學修養の境を踏み直し、以て最後の凱歌を挙げむとするに至つては今日かの小成小康の輩が夢にも知らざるの快事、また上田力が十餘年來の倉橋幸藏その人に對して感歎敬服を新にすべきところだ』『ハ、ハ、ハ、さう君のやうに徹頭徹尾、譽め拔かれちやア却つて挨拶にも困るがね、實は官を辭して此草庵に蟄するの消息まづ其邊にありだから、川上にも黒田にも吉田にも此意を通じて置いてくれ、また籠城の兵糧は三年半の官吏中、最初より無いものとして月々二十圓づつ、を別に貯へたる結果、まづ千圓内外あるから六圓の家賃を拂つて飯炊婆と僕とが主従二人の氣樂世帯、以て二三年を支ふるに足るし、時に應じて必要の書は既に用を節して藏せる無用の書を賣つて新陳代謝、また以て汐入村の昔ほど不自由も感じまい、衣は五年間の洋服

その他の絹布を木綿に代へて寒暑を防ぐに足るべく、人間自然の疾病災難は天地の風雨雷霆に等しく仕様もないが、おのれの不養と不覺悟とに依つて生ずる醫藥狼狽は力めて平生の運動と慎重の念慮とで防ぐ決心だから、まづこれも宜いとして只この後は一意専心、いはゆる活眼を以て活書を讀むのみだ、もしそれ時々之意を慰め興を取らむと思はゞ、迷惑ながら由來の交情、ハ、ハ、ハ、をりく、君等を襲つて罪も報いもない例の放言壯語で四隣を驚かすべしだ、と此邊の事も萬事安心するやう君から委細を通じて置いてくれ、以上は今日四人の總代として來てくれた君に對しての説明ともいふべきものだ、ところで談話は再び單に君と僕との間に立戻るがね、君は決して自ら其身を歎ずる如き不運不幸のもんでないぜ、僕が今日の境遇に對して恥づるなどの言は猶更ら以て、宵闇の門違ひだ、しかし今こゝで輕々しう俄に其説をなすと自他ともに或は意を誤るの恐れあるから、二三日のうち僕が別に一片の論文

として君の許に郵送しよう』『そりやア有難い、正に師父の言として見るから必ず送ッてくれ  
ついでに君が目より仔細に觀察せる上田力、即ち僕が愚に應じて前途に歩むべき行路の方角  
も指導してくれ、時に今日は此ま、これで歸るとしよう、また小兒が啼き出すと面倒だ』『ど  
こへ廻り路したか、生憎婆の歸宅が遅くッて困る、しかしまた更めて近日ゆるくと來給へ、  
過去を語るは世に用なき老人の業といふが、いたづらに將來を談するばかりが壯者の常でな  
いから、また汐入村の寒帷子で筑波嵐に吹かれながら破れ疊の上を飛び跳ねた昔を笑ッて懐  
舊の澁茶でも飲まうよ、かうして舊の一寒生に立戻つた以上は、新聞記者中の同輩、官吏中  
の同輩、ともに一切すべて暫く交通遮断だ、たゞ如何なる事あるも今昔に變らざるは汐入村  
以來の交情のみだ、否、むしろ眼前の俗務に忙殺せられて寸暇を得ざりしがため心ならずも  
疎遠に傾いた昨日よりは、一入さらに楽しく近く、しげく通ッて語りたのさ、いはゞ急

に他國の空から故郷へ歸ッて來て竹馬の友と語るに萬事また新なる心地で、猶いよく床し  
く懐しいやうなもンさ、ハ、、、わけて上田、別に誰彼の厚薄はないが、玲瓏たる珠玉の  
如き意氣潔白の君を以て僕が隨一の友とすだ、かの黒田の如き、もし君が家で例の横著を還  
しうせば宜しく縛ッて僕のところへ遞送し給へ、彼奴いかに我ま、勝手に働かうとしても無  
効だ、終日讀書の机邊に坐せしめて一撃一笑も交へないから元來陽氣に開きすぎた奴、忽ち  
閉口するに違ひないよ、ハ、、、』『こいつア妙だ、なるほど聲に應じて忽ち容赦なく喝破す  
る川上が侃々諤々たる勢ひと空々寂々さらに應ぜざる君が沈黙主義には彼奴その昔から頗る  
怖れてる様子だ、もし時と場合で全く連れて來ても宜いかね』『宜いとも、何時でも引き受け  
るよ、全體あの黒田奴、本來ならば兎も角どうか斯うか安全に其日を送る川上か、今までの  
僕の家へでも押し掛けて來べき筈を、殊更に君が新世帯へ願け込んで例の横著心を起すたア

けしからん奴だ、しかしまた、そこが所謂彼奴の本領ともいふべきところで、いやしくも自己の興みし易からざる方面、或は自己の屈すること多き方面へは、なか／＼容易に腰を屈めて出入しない男だからねエ、ハ、ハ、ハ、もし彼奴に意地といふものなくば巧言令色の小人で、只これ佞柔、かの猫に似たるが如き奸物となり了るかも知れないが、をかしい妙なところに變な調子があつて、つまり乃公こゝにありと勢ひに乗じて鼻を蠢かす長所短所で持った奴さ、しかし例の横著な腹の底ちやア川上と違つて僕を馬鹿にしてるから、往けといやア來るに相違ない、吝々した官吏根性で三年半もかゝつて溜め込んだ臍くり金を撮み出してやらう、ぐらゐの料簡で、滑稽半分、惡洒落半分に寧ろ進んで來るかも知れないから、是非とも僕のところへ叩き込み給へ、失敬ながら第一が妻子ある君の廚のため、また竟に彼奴本人のためだ、今のうちは何處でも構はない家族のない方を選んで世話になるべき筈の身が、わ

ざ／＼君を煩はすといふ事があるものか、兎も角も倉橋は小千圓も溜め込んで備婆と氣樂な二人暮しだと言つて見給へ、彼奴は必ず得たりかしこしで飛んで來るから、ハ、ハ、ハ、ハ、』なるほど、いよく妙だ、もう彼奴が病氣も癒えて仕舞つて、また將に例の横著心を振り廻さむとする折柄、幸ひ、ちやア近日に連れ込むよ』ハ、ハ、ハ、委細承知、却つて面白いよ、どうせ五人のうちで一人が厄介になるべき時にやア、あとの四人のうちで誰か世話すべき筈だから、別に餘裕もないが境遇上、むしろ今日の僕が黒田を引き受けるのは當然の任さ、ハ、ハ、ハ、』

其二

官にありて時間の制限に縛せられし時よりも、心氣爽快、一入さらに朝は早く飛び起きて臥房を片付け戸を開け放ち庭前を掃き、其まゝ井戸端に赤裸となつて三年以來會て一日も怠ら

ざりし冷水を幾度か頭上より浴びし後、しづかに五體を拭うて褌衣を著替へ書齋に立戻りつ  
つ、やう／＼繁れる垣根の梢を出で、射し入る旭日に對ひながら熱湯の盥茶一碗の心地、美  
味の過食に驚いて忽ち醫學博士を迎ふる奴等が夢にも知らざるところと、日々に新なる頭腦  
をもて日々に新なる新聞三種を讀む間は、正に是れ其日／＼の社會を自己が掌中に握つて批  
評家ともなり裁判官ともなり竟に一個の宣告を下し斷案を施すの快。しかも一日わづかに五  
錢以下をもて得るの快と思へば天下これより廉きものはなし、  
一日の朝、例の如く書齋を掃き清めし後、其日の新聞を手にとって讀みゆくうち三面雜報の  
第一段に失戀の辭職と題せるものあり、何心なく見れば

●失戀の辭職

曾て某新聞の論説家として佛臭きれ號をもて世に知られしが其後同國  
出身の某大臣に知られ一躍忽ち高等官中の利物といはれし倉橋某(三十五歳)が近來突

然辭職せし内幕を探るに實は其大臣の長女綾子(二十一歳)の婚になるべき野心勃々戀と  
慾との兩道に三年以來の浮身を窺して日夜公私の間に忠勤を勵みしが本人の綾子は更に  
何のお氣も付かれず唯父上の御意に叶ひし新參の子分として折々の出會に一通り卸し並  
の挨拶も上氣せ切つたる男の心には我一人に特別の御詮議ありと思ひ込んで内外いよいよ  
よ加才なく立働きし今年の夏期休暇を幸ひ最早大丈夫と高を括つて令嬢の侍婢を味方に  
引き入れ人しれず戀の玉章といふ萬事古風に出掛けしところ此令嬢は豫てより別に意中  
の人ありて加之も其人は倉橋某と今や大臣の寵を爭ふ最中なれば忽ち柳眉を逆立て、其  
艶書を父の大臣に示せし結果、倉橋某は呼び付けられて大目玉を頂戴せしのみか恩を忘  
れて秘藏の珠玉を盗まむとする不埒な奴と其艶書で横面を張られし散々の體に流石千枚  
張の面の皮も破れて今は人に面も合はされず詮方なく／＼免職沙汰を蒙らざるうち辭職

するや否、これまで住みし家も書生も其ま、打捨て、夜遁同然に何處へか姿を隠せしとぞ、それに引き代へ令嬢綾子は却つて大願成就、かゝる蟲氣の付かぬうち一時も早く身を固めさせむと父の催促に近日意中の人と晴れて嬉しき結婚式を擧ぐべき用意とり、もし彼倉橋某が傳へ聞かば怨恨骨髓に徹して無念の悪鬼と化すべきか但しは失意の餘り戀や無常と觀じて浮世を捨つべきか此間の消息は取つて以て一篇の小説材料たるべしとて、わざ／＼倉橋某の隱家を探し廻る好奇心の文士もありとの是沙汰、

讀むや否、平生は寧ろ冷淡に過ぐるとまでいはれし慎重の倉橋幸藏も、はつと流石に思はず眉を動かし拳を握つて憤怒の總身に息を含みつゝ、その新聞を引き裂いて庭前に抛けたるま暫し黙然として兩眼を閉ぢしが、やがてまた靜に拾ひあけて殊更に我みづから我を戒むるが如く誨ふるが如く嘲るが如く、天井を仰いで態と冷かなる微笑を浮べしかど、なほ晴れや

らぬ一點の雲脚、その眉宇の間に滯りて死毒の苦味を舐めたるが如し、

煙のあるところ多少の火の氣あり影のあるところ何等かの形ありといへど、さても／＼無根の捏造、そも／＼何者の仕業ぞ、いはゆる三面記者これを軟派と稱して自ら品位を落す敗徳の徒輩が其日の埋め草にせしか、いはゆる艶種の探訪これを泥鼠と稱して自ら卑屈を甘んずる奴等が事を設けし一場の悪戯か、但しは在官中の我に嫉妬を含みし俗吏輩の投書か、或は再び筆を執つて新聞に關せむかと我鼻頭を折る小人の恐懼か、いづれにしても我は我たる倉橋幸藏、固より彼等が毀譽褒貶に應じて一顰一笑を費さずといへども、奈何せむ盲目千人の世の中、五體に取捨鑑識の意志なくして只これ耳目のために附和雷同する當世の輕薄、もし此まゝに黙過せば何とやら罪に伏せし罪人に等しく、いかに我を信ずればとて汐入村以來の四人に對して面白からず、いかに事實なければとて現在その片相手の大臣父子に對して面

白からず、わけて突然の辭職を疑はれながら今の隠家を人に通ぜざる折柄、近來まで一室に椅子を並べて顔見合はせし同僚の奴等に偕はと見當違ひの小膝を打たしむるも心外なりと、またいつしか腕を組んで頻りに小首を傾けぬ、

されど新聞の正誤文は事實無根といふ四個の常套文字に歸するのみか、むしろ本人が弱音を吐いて讀者に謝するかと思はるゝが如き今日の習慣上、俄に驚き慌て、初めいたる有名無實の愚も學ばれず、なるほど今更ながら始めて恐る、苟も筆を執つて事を誤るものは強盜放火の大罪よりも悪むべし、由來この毒筆にかゝりて名を汚され身を害せられながら暴政時代の土民に等しく無告の涙に泣きしもの哀れ幾何なりしかと、果は我身の憤怒を忘れて世間一般の不幸に同情の念を寄せつゝ、他日もし志を得ば如何なる業を取るとも必ず一の新聞を起して、しかもその新聞たる社會の讀者よりも寧ろ天下の新聞に當るの新聞紙上、快刀亂

麻を斷つの勢ひ疾風電霆の勢ひ秋霜烈日の勢ひ、かの利器を抱いて咆吼する怪物を踏み斃し鬼面みだりに人を嚇す奸毒の膽を破つてくれむぞと、おもはず起つて眼前に敵を逐ふが如く満身の意氣を含み兩肩を峙てつゝ、廣くもあらぬ一室のうちを横行闊歩しぬ、

上田が四人の總代として訪ひ來しより四日目の正午すぎしころ、果して例の黒田健次、あはれ浮世を渡り損ねて尾羽うち枯せし病餘の今の身には只これ褻衣一枚の身代を小脇に抱へたるまゝ、ぶらりと入り來りぬ、

かねて覺悟の倉橋幸藏、さては我黨隨一の横著漢いよく、暫時の巢替に來れりと思へども、わざと何氣なき體に迎へて満面の笑を含みつゝ、十餘年の昔も今も變らず打解けたる互の挨拶、「やア其後は暫く逢はなかつたが、どうだね、病氣は全く癒つたかね、なるほど汐入村



時代の血氣壯に比べて見ると少しやア衰へたやうだが、猶いまだ世間の普通人間より横著な面がまち、なか／＼失敗病餘の落魄生とは思はれないぜ、ハ、ハ、ハ、しかし過日も上田に傳言した通りだ、やう／＼其日の小商賣で新世帯を張ったばかりの内證を苦しめずとも、川上なり、また及ばずながら僕なりが兎も角あるんだもの、まして殆ど太古の民に等しき質朴なる夫婦の間に子もある彼等を煩はすなア酷だぜ、まづ當分は僕の家うちに居るが宜い、あらたに官を辭し境遇を變へて舊の一寒生、たゞ飯炊の婆と二人ぎりだから却って君のためにも氣樂な筈だ、別に美味を供し美衣を獻じて賓客待遇にする事も出来ないが、聊か籠城の用意をしてあるから、まさか乾き切った鍋釜の底を見て泣然たりし汐入村の昔も繰り返さないからねエ、安心して居給へ、しかも病餘の身を養ふには持つて來いの閑靜だ、ハ、ハ、ハ、ハ、「いや一言なし、しかし殊更に上田夫婦の質朴を覘うて我まゝの食客的たらむがため其新世帯を荒し

た理由ぢやアないがね、實は萬事こゝに休して失敗の餘り暫し浮世を忍ぶ隠家かの本所の吉岡町で僕が病み付いた當時、あはれ死んだ妻が古三味線を抱へて思はず途中で上田に逢つて以來の關係から、つい止むを得ざる成行上、今日まで世話になつて居たのさ」「なるほど、その邊の委細は曾て上田から聞いたが、おい黒田、君は随分あの島女に苦勞さしたさうだね、そも／＼君のやうな男に何故また、あんな貞女が、しかも聞説、才色兩全ともいふべき女が惚れ込んで多年の辛苦艱難を甘じたらう、實に縁は不可思議なものだね、殆ど奇と謂つべしだ、しかし天は長く過分の幸福を人に與へざるの理で、つまり月下氷神が間違つた配偶だから忽ち情縁を割かれて、その妻たる女には氣の毒な理由だが、君のためには取も直さず罰が當つたのだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、「いやもう何と言はれても亡妻の事に關しては黒田健次さうらに一句の申譯なしだ、なるほど、亡妻のためには可愛さうだが僕にやア罰が當つたのかも

知れない、眞實の事だ」「ハ、ハ、ハ、ハ、人の葬式を二上り新内の鼻唄で送りさうな君だが、かの島女の事といへば實に殊勝なもんだな、何となう俄に容を改めて悄然たる體、よくく、残酷な目に逢はしたと見えるね、せめて君が其神妙さの十分一を以て由來の世間一般に對は、天生の才氣俊秀、決して今日その褻衣一枚を小脇に抱へて食客の巢替に来る君ぢやアないんだがね、惜しむらくは好漢その平生に一點の用意を缺くを歎すべしだ、もし島女なほ靈あらば草葉の蔭より泣いて君に訴へむ、郎や郎や既に死して還らぬ妾がために悔悟せむよりは生きて遠き君が前途に其意を用ゐて再び誤る勿れと、ねエおい黒田、さうぢやアないか、おや、鬼の目に一滴の雫、やはり涙かね」「いや、世間普通の涙にあらず、こりやア黒田が五臟六腑を絞り出す苦惱轉輾の露だ、どうか倉橋、もう亡妻が事を言ツてくれるな、いはれなくツても澤山だ、さらぬだに秋雨蕭々たる曉、落葉寂寥たる夕、この横著野郎でも人しれぬ破れ

衣の袖を濡らすよ、虎狼なほ牝を失へば三月その穴に蟄して爪牙を磨がすと聞く、まして僕も人間だ、況や亡妻が如き薄命にして不幸數奇の黒田健次に伴ひ軼軻落魄の市井に死すればこそ、もし伉儷その配を得て名望得意の良人に添は、正に淑徳の令夫人たるべき女であつたさ、せめて僕が將來に決心せる無妻主義が心ばかりの手向草だ、斷じて僕は再び妻を持たない、あれだけの妻を殺した以上は男の冥加といふもの既に盡きたりだ、まだ浮世に對する色氣はあるが、もはや大悟徹底の智識も同然、女に對する色氣は更にない、つまり浮世の七分これで誤るといふ敵のなくなつたのも亡妻が賜物だ、残る三分を以後さらに謹んで歩まば、どうか斯うか今までのやうに大した怪我もなからうよ、しかし前途將來その三分で遣り損つた曉は、もはや人間萬事を捨て、自殺するより外に工夫のない僕だ、いよく我ながら見下け果てた黒田健次となるべき大切の境目だから、例の如き地獄の釜の一足飛び、乃至

また闇雲飛乗の無鐵砲は決して演じない覺悟だ、しかし最愛の妻を失ひし涙いまだ乾かず病  
 餘なほ全く舊に復せざる今日のところ、しばらく身を君に寄せて厄介になる次第、よろしく  
 願ふよ』いや別に願はなくとも宜い、ともかく自分の故郷にでも歸つた氣で居給へ、あ、  
 汐入村以來十餘年の今日、始めて君の口から眞面目のことを聞いたよ、平生謹直の人に聞く  
 よりやア却つて妙な氣がして思はず深く感じた、なるほど味方の意見よりも敵の諫言だ、生  
 きて君を慰めし島女は寧ろ君を害し、死して君を悲歎に陥らしめたる島女は寧ろ君を益する  
 の道理、結局この悲痛慘憺に逢はなきやア生涯さらに悔悟すべき君でないからねエ、實は今  
 日まで僕の心中、やはり例に依つて例の如き黒田健次とのみ思つて居たが、萬事の様子、少  
 しは違つたやうだな、しかし死んだ戀女房の位牌の前ばかり眞面目くさつて、所謂る三日坊  
 主、くるりと向き直つた時また舊の横著面ぢやアあるまいね、ハ、、、』大丈夫、安心し

てくれ、たま／＼の朝寐宵寐はするとも自暴ツ腹の晝寐を仕なくなつた、をり／＼の駄洒落  
 は吐くとも興に乗じて人を弄ぶ悪戯は仕なくなつた、ちよいと臺所の狐み喰ひ、時に無遠慮  
 の膨れツ面、氣に入らねば勝手舞、面倒臭ければ我ま、の俄啞、美酒佳肴を喜び粗食野菜に  
 聊かの不平を漏らすぐらゐの事さ、こりやア僕が持つて生れた癖といふよりは寧ろ天真爛漫  
 とも稱すべきところだから、君の方でさへ關せず焉と濟まして居つてくれりやア差支のない  
 筈だ、つまり根柢のない眼前無邪氣の小節は舊のまゝの僕だが、もしそれ人生消長の大義大  
 節に至つては黒田健次また以前の黒田健次にあらずだ、以て語るに足るぜ、大に談すべきだ  
 ぜ、なか／＼事を託するに足るぜ』ハ、、、、妙な天真爛漫を並べたもんだ、何が大丈夫な  
 ものか、いくら安心しろと言つても食客的としては悉く不安心の條件ばかりだ、しかし君と  
 僕との間だから居る奴も置く奴も互に差支がないよ、兎も角も當分まア其まゝで居給へ、今

日の黒田健次が語るに足るか談ずるに足るかは別問題として暫く預つて置かう、もし事を託するに足ると見定めた時は倉橋幸藏あらためて君に相談があるから』『おもしろい、その小節を黙許して大節を試みむとする一言、いかにも面白い、惜しいかな三年半も官吏をして居つたから吏臭紛々として鼻持もなるまいと思つたが、おのづから泥中の白蓮、流石に我黨だ、倉橋幸藏いまだ衰へずと謂つべし、とかく世間の俗物は器が小さくつて物を容るゝの量がないから話せないよ、自己が魂魄の置き所さへ無い胸の狭い小人原が恐れ氣もなく切りに我々を評價して善いの悪いのと吐すから癢に觸る、やうく火事跡の板圍ひより外に使ひ道がなくつても長さが一間二間といふ點から一尺の紫檀黒檀を無用とする馬鹿者どもには閉口するよ、ねエ倉橋、いはゆる大孝は孝ならざるが如く大信は信ならざるが如しで、凡下凡俗の凡眼には』『おい、黒田、それ、また例に依つて例の通り、そろく饒舌り出したね、つま

らない駄辯を弄する手間で、どうだ庭前の掃除でも仕ちやア、偏に病餘の身體、むしろ運動になつて君のためだぜ、ついでに氣の向いた時があつたら障子の破れを張つてね、また飯炊の婆は年齢が取つて危いから、をりく水甕を覗いて見て汲み込で置くさ、ハ、ハ、ハ、』  
 『こりやア驚いた、庭を掃いて障子を張つて水を汲み込むに至つては所謂三杯目にはそつと出して二階梯子の下に陣を取るべき食客の本藝本職、今日こゝへ来るや否、すぐ俗世俗物の食客の待遇を以て黒田健次に對するたア少々酷いね』  
 『ハ、ハ、ハ、酷いかね、しかし今、君が並べた天真爛漫の外だぜ、もし君が仕なきやア僕がするから悠々と煙草を吹かして座敷で見物し給へ』  
 『いや、何、僕が、僕がするよ、するがね、ハ、ハ、ハ、ちと目的が違つたやうだ、こいつア上田に一杯、頂戴仕つたか知らむ』  
 『ハ、ハ、ハ、何を上田に貰つたのだ』  
 『あの仙人奴をりく、油断のならない俗氣を出すからね、ハ、ハ、ハ、』  
 『もし僕の家が君の氣に入らな

きやア、どうだ川上のところは、今更ら上田へ逆戻りの體は無効だぜ』『南無三、いよく仕て遣られたわい、しかし川上のところは眞平だ、やはり此ま、御當家様の御厄介になるとしよ、なアに人間の出来は無精だが時に腹の蟲の居どころさへ宜きやア君、なか／＼これでも忠實に働く僕だよ、つまり僕をして忠實に働かしめむと思は、主人公なるもの先づ宜しく僕の機嫌を取って腹の蟲の居どころを安穩にすべしだ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、戲談は俵置いて兎に角、今日から君の厄介もんだ凡そ一年間は、こゝ一年の間にやア充分この體軀の養生をした上、僕もまた何とか工夫をして社會に飛び出すから、それまで少々の氣に入らない事や多少の不足ぐらゐは、どうか君、大目に見通して無事に置いてくれ』『ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、一年が二年でも僕の兵糧の續く間、君が居ようと思ふ間、萬事遠慮なしに顛り給へ、働くの働かないのといふなア別に一個の時事問題だ、さらに大體の置く置かないに關した事でないから、しかし随分む

づかしい食客様だな、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、僕に對つて多少の横著をしたところが別段その效能もなし、第一また此方で氣にもかけず構ひもせんがね、おい黒田、あの老女で正直な飯炊婆アなどを相手に仕ちやア困るよ、ありやア可哀さうに子もなく孫もなく親類もない不幸な獨身もので、しかも性質なか／＼萬事に綿密で忠實の上、生來の下司でもないやうだから長く僕が目をかけて使ひたいんだ、葬式も僕が出してやる覺悟の婆だ、世間普通の奉公人と思つて追ひ出すやうな事を仕てくれちやア第一この僕が困るよ、宜いか』『こりやア心外な事で念を押されたまもんだ、黒田健次いかに不埒な奴でも、まさか罪もない他人を』『いや、さういふ意味で念を押した理由でない、君が平生の説、いはゆる俗物の凡眼は得て大物の滑稽を誤解して怒るの恐れがあるからさ、まして女の老人なござアいくら何でも、まづ愚癡なもんだからね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、つまり君として取るに足らないものを相手にするなといふ事さ、腹の蟲の居どころ

が悪くツて變に調子の狂った時は會釋なしに眞正面から僕に當り給へといふのさ』『ハ、ハ、ハ、さう巧みに出られちやア閉口だね、まづ兎も角も謹聴々々、全體、君が一流として汐入村以來、面と對つて激しく斫り込んで來ないが萬事やはくと音もない遠巻の計が巧いから、食客的なンぞには頗る禁物の主人公だよ、この邊になると寧ろ假借しない川上の方が宜いから知らせてな』『ハ、ハ、ハ、雙方どちらへでも御勝手次第だぜ』『いや、やはり當分このまゝ君の方に取極めよう』『まるで主客顛倒、置いて貰ふといふんでなくツて居てやらうといふ食客だね、追ひ出されるより、おん出てくれるから用心しろといふ勢ひだな、ハ、ハ、ハ、ハ、』『失敬、失敬、僕は元來、訥辯で饒舌る事が頗る下手だからね、つい自己の意志を十分に發表する事が出來ない』『何が饒舌る事の手下なもんか、べらくと無用の舌が迂り過ぎて困るくらゐだ、元來の訥辯で自己の意志が十分に發表する事の出來ないといふなア經綸滿腹の大學者が質朴

かの上田が如き人物のいふこつた、君の如きは言語みだりに多くして行狀さらに足らざるの人、つまり五體のうちで舌ばかりが不調子に突飛で發達したんだね、意志の人、實行の人、言語の人とすれば君は正に是れ一個の饒舌漢だ』『ハ、ハ、ハ、ハ、さう僕は饒舌り過ぎる方かね、自分ちやア今まで寧ろ無口の方だと思つて居たに、いや以後、謹んで心得るから』『無用の駄辯禁制、その隣室の六疊を君の城廓に與へるから、よく掃除をして兎も角その身を安置し給へ、僕は少し用がある、第一もう午後には於ける讀書の時間が迫つて來たよ』『ちやア隣室を賜はるんだね、ありがたい、わづか壁一重だから顔を見なくツても居ながら談話が出来るね』『用もないに話しかけられちやア困るよ、また大きな聲で婆を無益に呼び付けちやア不可んぜ、自分の事は自分に起つて辨すべしだ、實際その方が早くツて便利で萬事に氣樂だらう』『僕の性として、やはり人を追ひ使ふ方が便利だ、事々物々みづから手を下すなアあんまり

氣樂でもないがね、御家風とあれば食客的の身分、さらに家憲を度外視すべからずだ、ぢやア隣室へ行くよ、今日は全體また何時ごろ君に逢へるね」「夕飯の時だ、それまでは面會無用、言語謝絶、この垣一重が鐵の門より高う心得ろ」「や、君にしては案外の大出来、この僕を袖袂たア」「やかましい、また饒舌り出すよ、黙ッてく」

其三

のらりくらりと草原を這ひ渡る蛇の如く、また時に忽ち鎌首ぬツと押ッ立て、物を覘ふ横著の黒田健次も、言行一致さらに周到緻密にして謹嚴なる倉橋幸藏が朝夕の行状をもて責められしかば、流石に懐中手のまゝ例の鼻唄うたうて見物もせられず、萬事こゝに止むを得ざる早起となつて竹箒を手に取りながら、舌鼓もろとも門前の落葉を掃き集むる折しも、馬車の馬丁めいたる男一人走せ來つて小腰を屈めつ、「ちよいと伺ひますが、倉橋様の御邸宅は當

家で御坐いますか」

健次おもはず箒を杖づいて眉を顰めながら、「倉橋は當家だが全體どこから」「へい、麴町からです、お嬢様が」「何お嬢様、おい當家は倉橋といふが倉橋幸藏だぜ」「その方で御坐います、只今お嬢様を御案内いたしますから」いひつゝ、其まゝ飛ぶが如く一散に走せ出しぬ、

さアいよく珍事出来、お嬢様といふからは未だ良人なき芳紀の處女、しかも單に麴町のみ稱して姓名を言はざるは始めて來訪の初對面でない證據、第一あの馬丁の凛々しく氣が利いたる姿、なかゝ尋常一様の俄紳士に奉公する奴ならず、さては黒塗馬車を其邊の廣場に停めつゝ、先づ此細道を尋ねて來いと宣ひし本尊のお嬢様なるもの、いかなる面か見てくれむと竹箒を捨て、門前に待ち受ければ、今の馬丁を先立て、靜に歩み來る風情、秋の日蔭の濕り勝なる垣と垣との細道に重ね草履の裾長く地に塗るゝも厭はで、年のころ二十歳前後の水

際たちし美人、眞白き手先の指に思はず鬚の毛を撫で上ぐる時、ダイヤモンドの光輝ばかりと輝けば、健次そのまゝ躍り上ツて蝗の如く門内へ飛び入りぬ、をりしも倉橋幸藏は書齋の机に對うて頻りに筆を執りつゝ、何をか起稿の傍らより、健次あわて、膝を突ツかけながら、「やい倉橋、けしからん奴だな貴様は全體ど、何うするんだ、あんな美人を」「何だ馬鹿、唐突に、驚くぢやアないか狂氣じみた」「えッ其方より此方が唐突に驚いたぞ、僕が此家へ来た時、何故かうくと前口上を仕て置かないんだ、そら、もう玄關へ来た様子だ、僕ア取次に出ないよ、あんまり癪に觸るから、こんな用意で食客的に來たんぢやアない馬鹿々々しい」「何が何だか、君のいふ事が前後さッぱり分らないよ、む、誰だか人が來た様子だね、玄關に聲がする、君ちよいと」「いやだ、誰か來た様子だねもあるものか、生憎婆が買物に出て不在だから君が御自分で行くが宜い、御本人同士、ちき／＼の方が早い

よ」「ハ、ハ、ハ、ハ、いよく／＼分らない奴だ、ぢやア僕が出よう」「畜生、早く出てやれ、お待ち兼ねだ、畜生」「何か黒田、氣でも違つたんぢやアないか」「まア宜いから早く出てやれよ、そらまた聲がするぞ、えッ蒼蠅い奴だ、少しの辛抱も出來ないのか、畜生々々」  
 倉橋幸藏そのまゝ立出で、一目みるや否、はッと思つて流石に安からぬ胸を抱きぬ、固より無根の捏造、まさに恥づべき事實はなけれど、かの新聞紙上は思はぬ濡衣を著せられし今更、互に見合はす顔と顔と、何とやら俄に更まりて世間を憚る心地すれども、現在かく訪はれし上は、逢はず語らで其まゝ追ひ歸すべき人にもあらず、まして男の我よりは口惜し涙のあるべき深窓の身を、かゝる場末の隠れ家まで、わざ／＼忍んで來りし心のうち、あはれ汲み取るに餘りありと、殊更ら慇懃に迎へて自己が書齋に誘ひぬ、  
 『よくまア此家を御存じで御坐いましたね、同じ根岸でも奥へ片寄ツて人通りのない不便な



ところですから嘸、お探しなさいましたらう、しかし、いつも御機嫌よろしう、お世話になる時ばかりに蒼蠅く伺ひまして其後は案外の御無沙汰、何とも申譯のない次第で、閣下も相變らず』『はい、父も無事に居ります、また今日、まゐりますに就いて、貴方へ宜しうと申し聞けまして御坐います』『いや恐れ入ります、何分、御覽の通り、かやうな茅屋で、しかも只今ぢやア飯炊の婆と舊友の食客と家内三人暮しの書生肌、また客間書齋寢床た、此八疊で埒を明けるんですから、萬事失禮お構ひ申し上げる事も』『どう致しまして、なか／＼風流で閑靜な御住居で御坐います』『ハ、ハ、ハ、ハ、まづ風流とか閑靜とか、社會人事の必要に反いた空名を稱して、其實は意氣地なし奴が仕方なしの負け惜しみに住むんですからねエ、ハ、ハ、ハ、ハ、おい黒田、其、その番茶でも差上げてくれないか、おい黒田、黒田、こりやア困った、婆は居ないし、また彼は憐れむべし元來の聲で御坐いますから用に立ちません、ぢやアちよいと

私<sup>わたくし</sup>が御免<sup>ごめん</sup>を蒙<sup>かう</sup>つて、臺所<sup>だいどころ</sup>で番茶<sup>ばんちゃ</sup>を煮<sup>に</sup>て獻<sup>けん</sup>じませう、いはゆる常綺羅<sup>じやうきら</sup>の木綿<sup>もめん</sup>好みとやら、たまには却<sup>かへ</sup>つて赤<sup>あか</sup>く煮<sup>に</sup>出した茶<sup>ちや</sup>が御意<sup>ごい</sup>に叶<sup>かな</sup>ふかも知れませんよ、その間<sup>あひだ</sup>、そこに今日<sup>けふ</sup>の新聞<sup>しんぶん</sup>が御坐<sup>ま</sup>いますから』『はい、有難<sup>ありがた</sup>う御坐<sup>ござ</sup>います、お茶<sup>ちや</sup>は結構<sup>けつこう</sup>、いくらでもお待ち申<sup>ま</sup>して折角<sup>せつかく</sup>の思召<sup>おほしめし</sup>を厚<sup>あつ</sup>く戴<sup>いた</sup>きますが、あの、此<sup>この</sup>ごろの新聞<sup>しんぶん</sup>は、もう／＼手<sup>て</sup>に取るのも口惜<sup>くちやく</sup>しくつて、憎<sup>にく</sup>らしくつて、嫌<sup>いや</sup>になりました』

はつと思<sup>おも</sup>へども、はや立掛<sup>たちか</sup>けの空耳<sup>そらみみ</sup>、わざと聞えぬ體<sup>てい</sup>に、其<sup>その</sup>ま、臺所<sup>だいどころ</sup>へ往<sup>ゆ</sup>かむとすれば、隣<sup>とな</sup>室<sup>むろ</sup>の一室<sup>ひとむろ</sup>より健次<sup>けんじ</sup>そつと飛<sup>と</sup>び出して後<sup>あと</sup>を追<sup>お</sup>ひつゝ、大目玉<sup>おほめだま</sup>ぐる／＼、『おい倉橋<sup>くらはし</sup>、この僕<sup>ぼく</sup>を生<sup>な</sup>來<sup>き</sup>の聲<sup>こゑ</sup>たア酷<sup>ひど</sup>いね、も少し何<sup>なん</sup>とか言<sup>い</sup>ひやうのあつたもんだ、しかし美<sup>み</sup>だね、なか／＼尤物<sup>いうぶつ</sup>だ、どつか僕の亡妻<sup>わがめかけ</sup>に似<sup>に</sup>て居<sup>ゐ</sup>るところがあるよ、あゝまた今更<sup>いまさら</sup>ら思<sup>おも</sup>ひ出して堪<sup>た</sup>まらない、何<sup>なん</sup>といふ名<sup>な</sup>だ、年齢<sup>ねんれい</sup>は幾<sup>いく</sup>何<sup>つ</sup>だ、身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>は』『え、喧<sup>やか</sup>しい、靜肅<sup>じやうさく</sup>に黙<sup>だま</sup>つて居<sup>ゐ</sup>ろ、聲<sup>こゑ</sup>だから聲<sup>こゑ</sup>と言<sup>い</sup>つたのさ、

また君が野卑な料簡で想像するやうな關係でないから安心して居れ、互に清いもんだ、しかし君、君は過日の新聞を知らないに見えるな』『新聞、新聞たア、あの美人の事が何か新聞にでも出て居ったのか』『いや、知らなきやア知らないで宜い、あとで今夜、委細を話してやるから、騒々しく騒がないで居てくれ、ありやア僕が在官中の世話になつた同國出身の大臣が一人娘で、綾子といふんだ、辭職後絶えて僕が出入しないから近處へ来た途上ついでに、ちよいと尋ねて来たのさ』『む、さうかい、あの大臣の令嬢か、道理で風俗萬端ちらと見たゞけでも尋常の女でないと思つて居たよ、しかし君、今日その大臣の令嬢ともいはるゝものが、遠路わざわざこの草深い邊鄙へ君を尋ねて来るなんざアお安くないぜ、なアに近處へ来た歸途たア得てある處女の方だ、折角の芳志、うかく受けちやア勿體ないから、こゝが君、平生の周到緻密を以て深く考究すべきところだぜ、形勢いよく、穩和ならずだ、さア君』

『べら／＼とまた餘計な事を噂るよ、君に用がないんだから自分の居城へ引籠つて靜に仕て居るが宜い』『だつて君、これが一室へ引籠つて靜に仕て居られるもんかい、相手が近來、稀に見る美人だもの、綾子々々』『馬鹿、最愛の島女を失つて以來、およそ女に對する男の冥加すでに盡きて大悟徹底したと言つたぢやアないか』『やア際どいところで一本まるられたな、しかし今も言ふ通り、その島に面貌どツか背て居るから騒ぐのさ、君まづ往つて居給へ、その茶は僕が沸かして持つて出るとしよう』『今更ら頼まない、しッ込で居れ』

やう／＼煮立てし番茶の土瓶そのまゝ持ち出づれば、庭前の樹立を打守りて何をか頼りに物おもふ風情、さてはと倉橋も我みづから我を咎めらるゝ心地して、おもはず眉を擧めつゝ咳拂ひに紛らしぬ、

『さア番茶が出来ましたから召上つて下さい、しかし、お菓子は御坐いませんよ』『まア貴方』

わざ／＼、何よりの御馳走で御坐います』「ハ、、、お父様の御厄介になつて居ります時分は、これでも家内に多少の便利は御坐いましたが、今では斯の通りの一寒生、この番茶より外に、お待遇の仕様もない境涯ですから、萬事、悪しからず』「どう致しまして、しかし、あまり突然の御辭職で御坐いました事ね、妾も家の書生に承つて始めて存じたくらゐ、父も大變、残念に思つて、お惜しみ申して居りましたが、定めし何か深い御事情のある事と』「いや、別段これといふ事情も何もある理由では御坐いません、其節、お父様にも申し上げた通り、たゞ平ツたくいへば薄學淺才の倉橋幸藏、いまだ職を求め身を固めて一家を成すには早いと氣が付いたところから、急に舊の書生となつて此まゝ、五六年は、なほ一勉強したいためで御坐います、まづ四十までは社會に對する學生の決心で、ハ、、、實は生意氣に門の出やうが早過ぎましたからね、つまり出直す考量で』「いえ、その御立派な思召も、父から承り

ましたが、あまり御立派過ぎて、折角の御本領が淺果敢な世間へ分りませんから、却つて御迷惑な、過日の新聞に出ましたやうな、妾は、あの新聞を見ました時、どう致せば宜いかと思つて』「や、其事に就いては殆ど、お談話の仕ようもない譯で、嘸、さぞ』「いえ妾よりも貴方こそ、まア何といふ悪い奴で御坐いますかね、あんな事を、まるで影も形もない事を、よくまア』「ハ、、、相手が相手ですから、いくら腹が立つても手の付けやうのない奴等です、しかし、一介の書生に立戻る男とは違つて、御心中お察し申し上げます、實は、それに就いても一應、是非お伺ひ致さなきやア濟まないで御坐いますが、また却つて何だか、妙なものだ、いろ／＼考へた上で態と差控へて居りましたが、今日かうして御自身に、お越し下すツちやア重々恐れ入りますな、いづれ其うち、あらためて御挨拶かた／＼伺ひますから、どうか閣下へ宜しく、なアに貴嬢、全く事實のない聲は、すぐ自然に消滅いたしますよ、た

だ一時、残念心外と思へば思ふやうなものの、相手が取るに足らない奴ですもの』『いえ、さうは考へて居りますが、をり／＼また思ひ出すと、口惜しくツて悲しくツて、あの當坐は御飯もいたゞけませんくらゐ残念で、父に何とか仕てくれと泣いて迫りましたところ、馬鹿と一言に叱られました、しかし、あれは新聞社の内で書いたのではない外から投書した奴がある。その奴も十中の八九、分ツて居るから猶、詮議した上で、キツと處分すると申して居りました、さう聞くと妾も、どうやら胸に當るやうな事が御坐いました、もし其人なら猶更ら残念で、残念で』『は、ア、さういふ事が御坐いますか』『まるで貴方、自分の事を顛倒に出したやうなもので御坐いますよ』『む、さうですか、しかし、さういふ奴は却ツて、お捨て置きになる方が宜しう御坐います、貴嬢にさへ大した御迷惑がなくなつて、どうか斯うか御辛抱が出来ますなら、なアに私の方は平然たるもので、いはゆる石地藏の頭上を蚊が螫すほどにも

感じません、感じぬと申しては貴嬢に對して何とも濟まないやうで御坐いますが』『はい、いえ、妾は濟むも濟まないも』『それでは、たとひ其人が分ツて居つても、御身分柄、こゝは黙つて在らツしやる方が寧ろ、お爲のやうに存じますから、いづれまた其うち伺つて、ぢき／＼閣下に私が申し上げませう、馬鹿と小人は捨て、置くに限りませよ、事實がなくツて互の心中にさへ疚しからねば、わざ／＼その馬鹿と小人を相手にして騒がずとも、世間が自然に公明正大な裁判をしてくれますから、まづ、こゝは一番、大きく出て、たゞ一笑に附するのみですよ、ハ、ハ、ハ、』『さう承れば、そんなもので御坐いますが、また思ひ出すと、いかにもあまり』『いかにも、あまりの事ですから寧ろ一笑に附する理由で、もしこれが此方に多少の事實あつて、その攻撃の點が多少の眞面目であれば却ツて打棄て置かれないやうなもので、一歩この間の取捨進退を誤ると自ら人品を落すのみか今よりも一層、怒るべく悲しむべき無

念の大間違ひの結果になりますから、つまり萬物の靈長たる人間が下等動物の牛や馬に力が及ばず猪や熊と取ッ組ンでも逆も叶はないといふ理から割り出しても、捨て、置くに限りませんよ、貴嬢が口惜し涙で、お父様に仰しやツた時たゞ一言の下に叱責せられたのも實は此理ですよ、どこに自分の子が無實の冤に泣いて訴へる不幸を一言の下に叱り飛ばす親がありますものか、しかし御心中お察し申します、人もあらうに不肖、倉橋幸藏が如きものゝため、とんだ御迷惑、つまらない御災難で、お氣の毒に存じます』『いえ貴方、妾の方で、お氣の毒に存じますればこそ、かうして伺ツたので御坐いますが、いろ／＼お談話を承りまして、大變、何だか氣丈夫になりましたやうで』『ハ、ハ、ハ、さう、お取り下されば結構です』『今更ら申し上げると、何だか變で御坐いますが、なるほど今朝、父が出掛けに妾の部屋へまるツて、ともかく貴方を伺へと申し付けましたのも、實は全く此邊の事を存じて居るからで御坐

いませう、つまり貴方の御氣性を存じて居りますから、わざと妾に伺ツた上お説を聞けと申したので御坐いませう』『いや、まさか、さうでも御坐いますまいが、ついでに倉橋奴、辭辭後どういふ風に何をして居るか見て來いとのお思召でせうよ、もし萬一お聞きになりました節は、御覽通りの景況、この茅屋で舊の一寒生となつて斯の體を宜しく御傳言下さいますやう願ひます、いづれ其うち』『はい、それは承知いたしましたでしたが是非、今まで通り貴方お出で下さいましたな、御辭職を遊ばした上は猶更ら萬事に御遠慮のない筈で御坐いますもの、また申すやうですが、第一あんな新聞のあつた後ですから、わざと人の目に付くやう大手を振ツて父や妾を、お訪ひ下さいますればねエ、ホ、ホ、ホ、わざと妾も今までよりは却ツて親しう、萬事お心易う、親密な御交際を願ツて、つまり事實で、あの事を取消したい考量で御坐いませう、貴方は噫、かさね／＼の御迷惑で在らっしゃいませうねエ』『いや、迷惑どころか、さ

うしていただければ倉橋幸藏も俄に面目を施す理由で、有難くは御坐いますが、結局また、おために宜くない事が出来ませうから、先刻も申し上げた通り、まづ萬事お氣に觸へない方がハ、ハ、しかし近日のうち、是非とも一應お伺ひ致します』『必ず、お待ち申して居りますがいつごろ、在らっしゃいますか、ちよいと前日』『なアに別段これといふ用のない體軀ですから、いつ何時でも伺へますが、わざわざ前日に申し上げなくとも』『いえ少し此方に、第一が折角お越し下さいまして、もし父も妾も不在では、いけませんから、それでは貴方、甚だ失禮で御坐いますが、妾の方から近日のうち日を定めて、お迎ひを差上げますから其節は是非とも御都合を遊ばして』『ハ、ハ、ハ、さう大業ちやア却って困ります、では来る日曜にでも伺ひませうか』『明後日、いや明後々日で御坐いますね』『さやう、今日から四日目ですが、しかし御用次第、わざわざお待受け下さいましては恐れ入りますよ、今は御覽通りの一書生、

垢顔蓬髮破帽弊衣に手製のステッキを突き鳴らして晴雨兼用の下駄の齒からころと參上するんですから、いはゆる御威勢を冒すの恐れあるかも知れませぬ』『それでこそ、却って貴方の御立派なところが見える道理で御坐いますから、きつと、必ず、お待ち申して居ります、もし其日お越し下さいませんと妾が、お迎ひに出ますよ』『ハ、ハ、ハ、いや必ず伺ひます、どうか御馳走を』『ホ、ハ、ハ、いたしますとも、お氣に召しますものを妾が、他人手にかけて不束ながら妾が、お料理して差上げますから』『いや、それでは却って怖氣が付いて伺へませぬよ、根が臆病に出来てる倉橋ですから、ハ、ハ、ハ、』『ホ、ハ、ハ、いくら妾が下手でも、不馴れでも、お毒になるやうなものは差上げませぬから御安心遊ばして、また調理の上は、どうせお口に合ひますまいが、料理人よりは品質の吟味に念を入れて行届かします決心で御坐いますよ』『ますますく恐縮、さう仰しやッては御挨拶に困ります』『いえく、まだ貴方お困り遊ばす事をい

たすかも知れませんから、萬事その御覺悟で、ホ、、、』『ハ、、、、つまり新聞の復仇を、方角違ひでも、お手近の倉橋になさる御料簡ですな』『どうせ、どうせ貴方、御迷惑ついで、御坐いますもの』

くれぐれも四日後を固く約して後、得もいはれぬ色香いくたびか振り返りつゝ、辭退せし綾子の背後より、倉橋幸藏なほさら慰勸に送り出せば、いつの間にか例の黒田奴が玄關に待ち受けて俄に頓首再拜の體、この横著野郎また何をするかと思へども、わざと其まゝの無言に見送り果て、書齋に立戻るや否、ばたくと臺所に走せ入つたる健次、やがて一尺あまり三重の桐函に紐結びの厚總かけたる菓子折を恭しく目八分に拵けて摺足に入り來りながら、倉橋が前に差置いて満面の笑を浮かべぬ、

『今の美人が一重ならぬ二重三重の底深き心を籠めたる君への贈りもの、かの馬丁そつと先刻臺所へ持つて來たがね、其時すぐ君に見せると本人に對つて餘計な辭退の糞面倒あらむ事を恐れ、此ま、預つて置いたのだ、なか／＼重いで、函の體裁といひ持つて來人の人品といひ、きつと上等飛切の美味い菓子に違ひない』『これさ黒田、どうも困るな、また貴様そろそろそんな横著を仕出しちやア、物が外のもんと違つて菓子だから辭退を仕切る筈がない、なぜ其時すぐ見せてくれないんだ、一應の挨拶といふものがあるよ、道理で俄に玄關へ送り出して嫌に更まつて丁寧だと思つたよ』『ハ、、、、しかし折角の芳志、此ま、樽天王のやうに荷ぎまはるところもあるまいから、早速開いちやアどうだね』『いや、開かない、そもそも官を辭して此茅屋に閉居以來、三度の飯の外に菓子は勿論、いやしくも無用の間食物は一切禁制の決心だから、家憲だから』『や、驚いた、そりやア始めて承つた、しかしその家憲

も久しく此ま、堪へむとする籠城策より出たので、つまり自分が買ッて喰はないといふに止  
ツて餘所から不意に貫ッたものを『やかましい、何事でも僕の決心は頑として一本調子だ、  
其間に小面倒な臨機應變なしだ』『ちやア君、この菓子をお君、どうする』『食ッても食はなく  
ツても宜いから、玩弄物として上田の子に送ッてやるのだ』『ハ、ア、なるほど、しかし君、  
そいぢやア折角あの美人の芳志を、無にするやうなもんだぜ』『かまはない、餓虎の群羊を驅  
り盡す勢ひで、むしやく病ひ揚句の君に仕てやられるより、愛らしい小兒の手で掴み散ら  
して喜ぶのを上田夫婦が満面喜悅の體に打守る風情、實に見るやうだ、ハ、、、しかし可  
哀さうに、玄關で平生の節を折ッて俄に頓首再拜した效はなかつたねエ』『ハ、、、柄にな  
い事を遣ると、いつも此通り無念な失敗を取るよ、ハ、、、時に君、耳を翫て壁を隔て、  
聞いて居たが、ありやアたゞ一應の挨拶を義理一片で來たんぢやアないぜ、あぶるゝ色香に

情を寄せて徐ろに秋波を送るの體は目に見えなかつたが、言語の間おのづから言外の意を含  
んで寧ろ憎むべき纏綿の餘韻、いえゝ此上まだ貴方お困り遊ばす事を致すかも知れませ  
んから萬事その御覺悟で、ホ、、、どうせ貴方、御迷惑ついで、御坐いますものと、最後の釘  
を打ッて歸ッた心中、豈それ此ま、無事に天下泰平の兆ならむやだ、しかも流石は當世大臣  
の令嬢として相應の教育もあり交際にも馴れ年齢すでに二十歳に及んでも居るからだらうが、  
いたづらに疊の髻を撈ッて只もぢくする古風の手数が省けて、恥かしいうちにも言葉が明  
確してるよ、ねエ倉橋、しかし不思議だ、殆ど奇怪だ、全體どこが氣に入ッたのだらう、失  
敬ながら君の容貌として、但し亡妻お島が僕に於けると一般、人目に分らない氣心にも惚  
れ込んだのかね』『馬鹿、また戯談け出すよ、さア例の時間だ、いやに妙な目付をして菓子折  
に未練を残さず自分の部屋へ立去るべしだ』『去るよ、立去るがね、四日目の約束、君が今の



美人の招待に應じて行く時、どうだ僕を連れて往つちやア、また何かの役に立つぜ」「ハ、ハ、ハ、あまり役に立ち過ぎて困るだらう、もし君をして三分の謹慎と二分の呆然したところがあると、こんな時に連れて行く段か實は名代として往つて貰ひたいくらいだが、さて其つうづうしさと無遠慮ちやア、どんな間違ひを惹き起すかも知れないからねエ、つまり飼犬の首つ玉に手紙を縛りつけて遣る方が確實だ」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、犬より不確實に見られちやア萬事、に休せりだ、さらば自分の部屋へ引退つて沈黙考しよう」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、君が沈黙考した上ぢやア、どうせ、ろくな事を考へないだらう、しかしまだ壁一重隣室で喧しく饒舌り立てられちやア猶更ら閉口だ」「徹頭徹尾、何故かう君に信用を失つたらう、この様子ちやア逆も急に挽回は出来ないやうだね」「まづ、むづかしいね、死んだ細君でも呼んで来て保証人に立てない以上は」「いや道理だ、何につけても今ぞ思ひ知る身の小夜時雨、袖に涙の戀ひしかりけ

る我亡妻だよ、あ、南無佛、南無阿彌陀佛」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし妙だ、かの島女の事をいふ時だけは殊勝氣に聲の出どころが違つてるやうだぜ』

其 四

百尺竿頭の奮勵一番、さらに我心を鞭うつて舊の一寒生となりし倉橋幸藏が、庭の垣根に暫しの浮世を隔て、今の境涯に甘んずる以上、かの片々たる俗物の毀譽褒貶、まして無根の浮説は讀書の窓を叩く木葉一枚の音響ほどにも感ぜざれど、ともに根もなき浮名を唄はれし綾子か、わざわざ深窓を出で、口惜し涙に我草庵を訪ひ來し心中、かつは在官中の恩をうけし其父なる大臣の手前、此ま、捨て、無言に打過ぎむ事もならねば、その約束の日曜日を幸ひ、いざや引籠りてより三月越しの今日、始めて門外の景況をも見渡さむとて、取り散らしたる書齋を片付けつ、靜に立出づれば、例の黒田それと知りて慌しく玄關まで追ひ來りぬ、

「何だ君、何か用でもあるかね」「いや別に用もないが、いやしくも家の主人公が稀有の外に出に際して其、その食客たるもの玄關へ送り出さざるを得ないぢやアないか、ハ、ハ、ハ、ハ、かし君、今日は彼美人を訪問するのだらう、否、かの美人が懇望に應じて例の大臣が行くんだらう、なるほど、いくら君でも、三十五の今日まで嚴格方正を以て保ち來りし君でも、諺にいふ大象を曳き戻すの力、まして門地才色ともに得難き彼の美人が玉肌満身の愛情纏綿で待ち受くる今日の約束、あゝ木像の仁王といへども動き出して行かざるを得ざる場合だ、況や人間の倉橋幸藏さらに進んで行くべし、大に行くべし、行けよ君、行いて油斷なく如才なく遣れ、空手で戻る勿れ、千載の一遇この機を逸すべからずだ、戀を曲物といふ俗世の野暮説に恐れちやア不可ン、そもく戀は愛の神の人間に下し給ふ貴重露で、いはゆる戀愛は虚偽なき眞人の生命だよ君、しかし今日の幸福を自分の獨占は酷いぜ、こゝにこれ黒田

健次といふ一個の憐れむべき食客的が徒らに指を咬へて空房寂寞たるところに悄然と我影を見返る氣の毒さを忘れないやうに頼むぜ、つまり何か、お土産を貰つて来てくれといふんだ、私は今かく暖き情に包まれて金谷園裡の春に酔ふ心地は致しますが、かの茅屋には十餘年來の舊友で最愛の妻に別れ人生消長の波浪に打上げられて病餘失意の額を散り來る秋の落葉に叩かれながら顔色憔悴形容枯死せむとするものが御坐いますと、あはれッほく情なく持ち込んで見ろ、おやまアお痛はしい事といふ御意の下、必ず何等かの消息ありだよ、相手は世の中に不自由がなくつて現在の君に思召あるんだから袋の鼠、釜中の魚、こんな時にこそ君多年の友達甲斐を出して貰ひたいもんだね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、「わざろ、出がけの僕を引止めたのは君、それだけの川か、もう外に何もいふ事はないかね」「こりやア案外、いやに冷淡な口氣だな、聊か拍子ぬけの體だ、もう少し返答の仕やうがありさうなもんだねエ」ところが、な

いね」『あゝ、度し難し、度し難しだ、もう宜いぢやア勝手に出て勝手に歸り給へ、天の與ふるを取らざるもまた一興だらう、わざわざ穴から飛び出して來た虎の子を取遁すも面白からう、むかしは七十にして猶かつ風雲を待つ快男子あり、今は三十五にして眼前の機を殊更に失するの好奇漢ありだ、豈た、單に彼美人を惜しむのみならむやだ、どうしても僕を擯斥して仙骨を帯びたる上田に同情を寄する君だよ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ』『君は影を挿ふるの人、僕は形を捉へむとするの人、君は機變を奪ぶの人、僕は實正を守らむとするの人、おのづから其間に取捨の別ありだ、かりにも女の肌褌袴を幕に張って浮世の風を防がむとする倉橋ぢやアない』『や、氣焔萬丈、當るべからず、暫く謹んで其なすところ拜見するのみだ、しかし君、惜しいぜ、由來骨肉に勝るの君をして此黒田が何事ぞ、女の肌褌袴で浮世の風を防げといふもんかね、大河は清濁を選ばず細流を拒まず、取って以て自己の用になすものは時に飢ゑて

乞食の椀飯にも、舌鼓を打つの勇氣と度量がなくなつちやアいけまいといふのさ、しかし君は君たり、我は我たり、友としての情に於ては格別、友となるの以前より持つて生れた性としての君と我とが右左、こりやア仕方ないこつた』『何だ、それほど分つて居ながら、つまりない出がけに引止めてさ』『お靜に往って在らっしゃい、神妙に留守番をして居ますから』『ハ、ハ、ハ、頼みますぜ、しかし不在中は僕の書齋へ出入御無用』『ハ、ハ、ハ、悲しいかな、まるで盗賊待遇だね、よほど僕を不安心に思つて居るね』『なアに大體を信じて留守を頼むからだから、別に不安心にも思つて居ないがね、また安心も出來ないよ、汐入村の昔、折角あの川上が山から荷いで來た鹿の皮六枚を偷んで飛び出した事もあるぢやアないか』『君子、舊惡を思はず、ありやア偷んだのでないさ、只あの時あの場合で、つまり諸君が不在中を幸ひ無斷に貰つて往つたのよ、しかし其節は立退狀一札を残して置いたぜ』『ハ、ハ、ハ、聊か論法

に合はないやうだね、諸君の面前で幸ひ得心の上なら宜いが、諸君が不在中を幸ひ無断ぢやア變だ、あの立退狀一札の如きは世俗いはゆる竊盜が何の呪ひか自己の不潔物を残してゆくと一般だ』『いやはや、男兒いやしくも別に志を立て、同志を脱する一片の主意書を、かの盜賊の夜糞と一事に見るなア酷いね、しかしまた、ハ、ハ、ハ、と何事も笑って互の氣にかけないところは今日の輕薄社會、殆ど得易からざるの友誼だね、倉橋』『笑ふから無事に済むんだ、もし君の言を眞面目に聞いた日にやア毎日々々掴み合だぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、』『無駄な事を言ッて居る間に時間が後れるだらう、早く行き給へ』』どツちが無駄な事を言つたんだらう、ハ、ハ、ハ、倒まに念を押されて恐縮だ、どりや行かう、あとを頼むよ』

倉橋幸藏が天生、その地位と境遇よりは殊更に外見を粗にして時流に奢らざりしかど、必要

に應じての車を飛ばし服制に迫られての容儀を整へし高等官の當時に引き代へ、今は十年前の昔に立歸りし一書生、空腹を抱へて破れ布子一點寒曝しの苦痛はなけれど、萬事すべて汐入村の古築を立出でしころの體、野暮は實用に適する木綿の羽織袴に紺足袋を穿ちて日和下駄を履き占め、メリヤスの肌著に握り太のステッキ、帽子と羽織の紐ばかりは賣り飛ばすに馬鹿らしく新に買ひ求めむも無用の浪費と其まゝ用ゐるしが、何とやら一際すぐれて目立ちたる呵しき、ぶらり飄然と根岸の草庵を立出でぬ、

根岸より麴町への方角、兩國界隈へは弓狀の迂回ながら、いづれ今日中を丸潰しの覺悟にて聊か早く出掛けし足ついで、橋を前後に上田と川上を訪はむとて、淺草の廣小路より厩橋を渡りて河岸傳ひに行けば、表通りなれど一棟に三軒長屋の粗造なる新建、その端の軒下に見馴れたる黒田が例の筆太にて、和洋煙草、小間物類いろくと認せし看板は正に是れ浮世に

攻められし涙の痕、あゝ上田ほどの男が何として百鬼行列の繪巻物を展けしが如き今日に生れたるぞ、

しづかに立寄りて店頭を差覗けば、あはれ斯良人にして斯妻ありともいふべき妻女お清が小兒に乳房を含ませながら、ふと門口を見て、『おや倉橋さん、ちよいと良人、倉橋さんが入らッしやいましたよ、さアどうか此方へ、御覽の通り店と小兒で妾は、良人まア何を仕て居なさるンですよ、倉橋さんが、あれまだ聞えないと見えますよ、失禮で御坐いますが、ずツと其まゝお通り下さいまし、只今すぐ』『なアに構はないで、いや立つにやア及ばない勝手に通りますから、ハ、ハ、ハ、美味さうに乳を吸ッてるわい』

店と臺所を除けば六疊の一室、この天井の上は黒田が病後の横著を構へし二階、さても上田は何處と思へば、廁の中より破鐘に等しき聲、『失敬々々』だ、高野の奥の冬籠り、黄金佛

を拜したら今すぐに出るよ、あゝ苦しい』かくても上田は上田、あはれに滑稽を含んで昔ながらの上田なりけりと、倉橋幸藏おもはず獨り微笑を漏らしぬ、

やがて出で来りながら、會釋もろとも四邊を見廻しつゝ、店頭の妻を睨みて、『おい何故、茶でも湯でも出さンのだ馬鹿め』『なアに僕が構ふなと止めたのだ、今、小兒が乳を呑んでる時だよ』『それにしても、手出しの入るこツちやアない、しかし心易いからだ君、ゆるしてくれ、時に今日は』『今日は少々、用事があツて麴町まで行く途中、ちよいと來たくなツてね』『麴町へ行く途中こゝまで迂回してくれたのか、おい清、麴町まで行く途中わざ／＼來てくれたンだけ倉橋が、おい、おいッてば、やいこら、何か茶菓子、ないのか、無けりやアちよいと横町で買ツて來い、なアに君、まア喰ツてくれよ、時に過日は大變に結構な菓子を送ツてくれたね、あんまり美事だから三重のうちの中の一重を小兒に見せて實は夫婦が朝夕三日の賞瓶』

上下の二重は川上と家主に分けて贈つたよ、ハ、、、あんな上等菓子を態使者で僕への贈り物、なるほど手紙に餘所からの到来物としてあつたが、よくまア黒田奴が無事に見通して通したもんだね』『ハ、、、察しの如く妨害策を講じて、かれこれ牽制運動を仕をったがね、僕の家に来て以来、一切さらに構はない、萬事きびくと頭上ごなしに押し付けてやるから、流石の彼奴も聊か閉口の體だよ、しかし、あんな横著漢でも、よくく骨身に徹へたと見えて、傳へ聞く彼妻島女の事をいふ時だけは俄に凋れて神妙に哀れッほくなるのが一入、可哀さうだよ、ふかく語ると、をりく目に涙を含んでね』『さうだらう、いくら彼奴でも、さうあるべき筈だ、さうなくっちゃア叶はない道理だ、性格行狀の點からいへば川上より君よりも第一に容るゝこと能はざる僕が、今日なほ彼奴を得捨てずして病後さらに彼奴を思ふの篤きは只それ其亡妻、かの島女が生きて無効の艱苦に伴ひし貞節の涙を眼前に知り、死し

て一片の土饅頭、空しく春花秋雨に訪はるゝ無縁の靈に對するがためだ、なるほど當世の交際場裡に立って、天晴の令夫人といはれるには多少の缺けるとこはあつたにしろ、不規律不節調なる良人を扶けて絶え間なく寄せ来る浮世の艱難辛苦に堪へし涙と情に於ては實に得易からざる感心な女だつたね、全く黒田には勿體ない貞女だつたよ』『と見えるね、かの横著漢が腸を斷つ玉碎摧花の感、千古の遺憾として無妻主義を叫ぶくらるだから、その弱點に乗じて彼奴の横溢を諫むるため、をりく僕は島女の事を言ひ出してやるのさ、すると彼奴が俄に弱り込んで何となく容を更むるが如き體で、悄然たる顔色に物の哀れを含む時は、殆ど何をさしても間違ひのない人間だね、しかしまた、どうかすると忽ち例の猾才馱辯を弄して困るよ、ハ、、、』『いくら言つても君、あの癖は直らないぜ、ありやア彼奴が生來の持病だ』『惜しいもんだ、少し謹んで眞面目にさへ遣れば彼また一個俊秀の才物だがね』『だから

君が言行に恥づるやう、自然に化してやツてくれ』「いや、うかくすると此方が化せられさうだ、ごまかし自在、ぬらくら縦横、なか／＼油断も寸隙もならない奴だよ、根が馬鹿でないからなア、ハ、ハ、ハ、時に黒田が妻も妻だが、また君の細君も得易からざる細君だぜ』「おい倉橋、其、そんな事を本人の耳に聞かしちやア不可ンよ、死んだ女を譽めるのは宜いが生きてる女を譽めるなア爲にならない、第一この亭主野郎の威嚴に關するから、さらぬだに女子と小人は養ひ難き世諺、わけて僕の家は君、あの噂ア大明神で持つてる世帯だよ、秘密秘密』「おや良人、何か妾に御用ですか、倉橋さん御免下さいましよ、まだ乳を放さないんで御坐いますから』「そら君、すぐあの通りだ、流石の黒田も僕にやア例に依つて萬事無遠慮だつたが、噂アにやア少々あれでも氣兼ねして居つたぜ、おのれが悪い事を仕た時は一晩の下に縮みあがったからなア』「ハ、ハ、ハ、常に小面が憎くつて、たまに哀れを催すのは黒田だ、

常に哀れを催して、たま／＼阿しい滑稽のあるのは君の夫婦だ、門を出で、今日の社會に不幸の人たりとも、君は決して家に不幸なる良人でない、門外百歩に才子才物と稱せられて勢ひ猛に當世を馳驅しながら家に歸つて人しれぬ不愉快な男泣きの涙に袖を絞るもの幾何ぞや、それに比ぶれば貧に處して多少の不自由はあつても、一團の和氣に包まれて情の冷かなるを知らざる君は寧ろ人生の幸福なるものだ、大事にかけ給へ、華の如き妻は多く面の皮たゞ一枚を染め出した人爲の極彩色だ、晴れて雲なき時は宜からうが、もし一夜の風雨に逢へば忽ち其色の剥脱すべき恐れありさ、だから削つても變らない其まゝの木地に限るよ、ハ、ハ、ハ、時に遅くなる、また出直して来よう、今日は是非とも約束の時間があるから、そして川上も、ちよいと訪ひたいのだから』「まア宜いぢやアないか、しかし無理に引止めても却つて』「いや、また近日、ゆつくり来るよ、風邪が流行るといふから小兒に氣を付け給へ、何か弄

物を途中で買ッて来れば宜かつたねエ』いひつゝ、店頭に出で、満面の笑を含みながら、やうく乳を放せし小兒の頭を軽く撫で、妻女に對ひ、『お骨が折れますな、店と臺所と小兒と三方兼合の働きだから、その上また五尺八寸二十貫目といふ世間並すぐれた御荷物があるんだもの、ハ、ハ、ハ、しかし一人の力で天下泰平、上田は幸福者ですよ、なほ宜しく願ひますぜ』

『あれまア倉橋さん、何を仰しやるんですよ、妾のやうな意氣地なしが、どうして貴方』いや決して、さうでない、しかしました、ゆるく響めに來ませう』ホ、ハ、ハ、ハ、恐れ入ります、また此ごろは黒田さんが御厄介に、いつまで妾方に在らつしても宜いんですが、是非、貴方へと良人が申しますので』ハ、ハ、ハ、ハ、あの難物、定めし長らく御迷惑でしたらう、昔からあの通りの奴で、手も付けられない我まゝもんですよ、いづれ其うち上田は兎も角、貴女まで御挨拶に來させますから、しかし其時お世辭にも甘い言葉を出しちやアいけませんよ、彼

奴また宜い事にして悠々寛々、するくくと這ひ込むかも知れません、上田と違つて私は毎日毎日喧しう責め立てますから』それでは貴方、いくら黒田さんだつて、お可哀さうですよ、悪まれ口を仰しやつても根に毒のない方ですもの』ハ、ハ、ハ、ハ、あれで根に毒があつちやア堪りませんよ、しかし、をりくは上田に店番をさして置いて、ちと遊びに入らつしやい、今までと違つて閑靜に氣樂な住居ですよ』ありがたう御坐いますが、貧乏世帯に迫ひ廻される子持になつては迎も貴方、よしまだ出られるにしたところが黒田さんや良人の店番では、こりくした事が御坐いましてね、ホ、ハ、ハ、ハ、』こら馬鹿、つまらない事をいふな、おい倉橋もう宜い加減に出て往つてくれ、この様子ぢやア次第に纏縷が出さうだから、ハ、ハ、ハ、ハ、』ハ、ハ、ハ、ハ、實に面白い、なるほど黒田や上田の店番ぢやア奇談がありさうだわい、しかし近日また來よう』其まゝ立出で、兩國橋を渡り、藥研堀を斜めに濱町へ差掛りつゝ、冠木門に富



田正次といふ表札、いまだ川上三吉の名を並べて現さるるところ寧ろ彼が本領ぞと、心に笑を含みながら玄關より聲をかくれば、かねて顔を知る小間使の女いで、慇懃に迎へぬ、『川上は居るかね』『おや、お珍らしい事、しかし若旦那様は』『む、不在か、どこへ出て往った、時に細君は』『在らっしゃいますから、さア此方へ』『いや別に用事もないのだ、倉橋が来たと宜しく言ッてくれ』いひつゝ、其まゝ立去りて門を出てむとする折しも、今の女が俄に我を呼ぶ聲、振り返れば川上の妻女すでに玄關まで立出でつゝ、頻りに會釋する體、さてはと引ッ返してステッキを杖つきながら、『その後は暫時、お聞き及びでせうが、辭職後、けふ始めての外出です、ハ、ハ、ハ、また舊の一書生、いつ何時、おしかけて御馳走を迫るかも知れませぬよ、時に川上は何處へ行きましたな』『おやまア倉橋さん、急に御身形まで、しかし兎も角お上り下さいますし、いろいろ伺ひたい事も御坐いますから』『いや今日は少々、外に約束の時間

がありますから、また其うち』『だッて貴方、お久しぶりですもの、もし良人が居りますれば是非お上り遊ばすでせう』『なアに川上が居ッても、ちよいと此まゝ玄關で立談話をする心算で來たんですから』『うそを仰しやい、しかし今日、良人は貴方を伺ッたので御坐いますよ、幸ひ吉田さんも來て在らしッたから、お連れ申して』『や、さうですか、そりやア残念な事をした、實は今朝、早く出て今まで上田のところへ、これから麴町へ出掛けるんですが、近ごろ家に例の黒田が居ますから、どうか斯うか談話相手になるでせう』『おや麴町へ、あの麴町へ往らっしゃるの、麴町はどちらへ』『は、ア、麴町々々と妙に念を入れて、をかしく變に、お問ひなさるが、ぢやアあの新聞一件を御承知ですね』『ですから、此處では貴方、ちよいと奥へ』『ハ、ハ、ハ、天地俯仰さらに恥づるところなし、公明正大、倉橋幸藏まだ腐りませんから御安心下さい』『いえ貴方その邊の事は萬々よく承知いたして居りますよ、ですから

良人も、あの新聞を見た日、すぐに慌て、驚きもせず、今ごろ悠々と伺ったやうな理由で、しかし倉橋さん、妾は陰ながら口惜しくって残念で、心外で『ありがたう、定めし黒田からも聞くでせうが、川上が歸つたら猶、念のために傳言して下さい、現在その大臣親子に懇請せられて會食かたぐその官宅へ出かけたと、なアに凡俗小人の中傷的、むかし我々が汐入村に苦學の肌を整された藪蚊一疋ほど感ぜませんさ、いづれ事實に於て自然の証明が出来るでせう、ハ、、、また伺ひます』それでは、却つて、お引止め申しても何で御坐いますから、是非とも御歸途に、お待ち申して居ります、して御徒歩ですね、失禮ながら家の車を仕立てさせませうか』『いや官を辭した其日から断じて車禁制、この膝栗毛の瘦馬に鞭うって何處へでも行く覺悟です、御覽なさい、そろく馬首をめぐらして蹄の音からころと響かしますよ、ハ、、、』『ホ、、、、しかし倉橋さん、あの新聞を上田さんが御存じなく

って宜う御坐いましたね、良人でも、さう申して居りましたよ、もし上田が見たら忽ち大喝一聲、どんな猛勢で新聞社へ吐鳴り込むかも知れない、つまり本人を信じ切つてるから念のため一應問ひ合はせて意見を聞くまでもなく悲憤激烈の餘りに眞一文字だからってね貴方、却つて此事を心配して其日、わざわざ餘所ながら上田さんの宅へ様子を見にまわりましたよ、しかし、あの新聞を取って在らっしゃらないし、またそんな事を通知するお友達が外にない方ですから、萬事御存知がなくなつて済みましたの』『いや、いづれも感謝すべき事です、わけが川上が此倉橋を信ずるの深き、現在その日に其新聞を見ながら、あの機敏にして電氣に等しき脳髓が更に動かす驚かず、平然として今日まで何の問ひ合はせもなかつたのは、眞に十餘年來の交友、頗る頼母しいと満面の笑を含んで居た體、よく傳へて置いて下さい、さやうなら』

けふの日曜を幸ひ例の大臣が官宅に小宴遊會を催して、招かれたる客は二十餘人、いづれも當時高等官中の少壯有爲をもて目せられ、しかも世間よりは大臣の子分として稱せらるゝもの半以上、よし子分にあらざるも多少の關係を有して平生この官邸を自由に出入するものみなれば、さらに何の隔意もなく會釋もなく、後園の芝生に打解けて三々五々、おもふがまゝの快談縦横、互に椅子を持ち寄りて彼方に呼ばれ這處に招かれつゝ、笑聲しきりに湧くが如き折しも、何者か俄に聲たて、倉橋來を叫ぶものあり、  
官を辭して後、飄然いつこにか去つて其消息を通ぜざりし不思議の倉橋、眞偽は儲置いて近日の新聞紙上、かの一件ありし其倉橋が何として來りしぞ、招かれてか、押し掛けてか、とにかく鐵面厚顔の男、これに對する大臣の舉動いかにと見れば、今まで二十餘人の談論縦横

を兒戲に等しく冷笑うたる豪壯の主人公が、俄に椅子を離れ足を早めて慇懃に迎ふる體、しかも迎へられたる倉橋幸藏は都門見物の田舎書生に似たる木綿の羽織袴、さらに驚くべきは倉橋來の聲を聞くや否、花の色香も漏らさで深く閉せし令嬢綾子が春風一番おもむろに吹き來りて新に室を出でしが如く、今日を晴れと著飾りたる洋装に人の目を奪ひつゝ、さも嬉しけに笑渦の露を含んで父と倉橋との間に名花一輪の風情、三人うちよりて頻りに何をか語る體を見るより、満園の歡語笑聲そのまゝ消えて等しく視線を集めたる二十餘人、あつと呆れ驚きぬ、

千百の浮説は一事の目撃に如かざるの世諺、さては例の新聞一件も何者か爲にするとところありて殊更に無根の寃を蒙らしめしのみか、眼前あの體は寧ろ反對の事實を示して、いはゆる意中の人は却つて彼奴倉橋にあるかと思へば、今更ら俄に嫉妬の念も湧き出でつゝ、しかも

我々は其新聞一件の取消の證明人に招かれたるかと思へば、猶更ら馬鹿らしく小癢に觸つて堪らぬと、大切の庭木を捻ぢ折り芝生を踏み躪つて怒るもの羨むもの笑ふもの呆るもの、一時またこゝに反動の活氣を添へて癩癩玉の捨て處なしとぞ動搖めきぬ、

倉橋は暫し大臣と綾子を左右に引受けて心地よけに何をか語りしが、わざと我から身を退いて其場を立去りつゝ、此方へ向うて静に歩み來る體、しかも花を欺く令嬢が猶も未練氣に其影を逐うて背後より慕ひ來るが如き風情に、いづれも思はず顔を見合はして目を敬てつゝ、さア大變々々、いよく肉薄吶喊に來をツたぞ、此上御念の入ツた事を間近く見せられては堪らぬと逃げ出すもあり、さては一番まちうけて冷かさむとするもあり、なほも仔細に様子を見届けむとするもありて、また一入に立騒ぐを倉橋かくとも知らねば慇懃に小腰を屈めて微笑を浮べながら、『や、諸君、しばらく御無沙汰いたしました、御覽の通りの體で、ハ、ハ、

、舊の一寒生となツた倉橋幸藏、實は今日の席に連る身分ぢやアないんですが是非、來といはれる主人公の懇招で、また辭職の節いちく御挨拶にも出ず在官中の萬事お世話のなりッ放し、定めし無禮な奴と思はれたでせうが、いはゆる野生みだりに禮を弄ばすと、此ところ自分勝手ながら却つて慇懃を表した心底です、ハ、ハ、ハ、『拙に野暮なるが如くにして巧みに翻弄一番の口氣を含みつゝ、重々しき口より軽く圓轉の妙を吐きながら、田舎竊手織も綿の羽織袴を流行歐化の洋装中に立交りて、悠々と前後左右に會釋の體、元來の謹慎をもて聞えたる男だけ一入さらに何をか卑しんで冷笑ふが如し、

をりしも令嬢綾子が蓮歩しづかに慕ひ來りて、自然に溢るゝ目の鹽も身に餘りて滾るゝ愛嬌も今更ら他人には惜しき風情、見向きもやらで倉橋幸藏の身邊に寄り添ひつゝ、『倉橋さん、まだ何か御談話があると申して父が呼んで居りますよ、そして貴方、もう食堂にも時間が御

坐いませんから、どうか此方へ、おや大變お足袋が汚れて、誰が斯んなお草履を差上げましたの、あれほど申して置いたに、氣の付かない人達だこと』洗ひ晒せし紺足袋の爪頭が聊か庭園の土に塗れたとて、わざと此衆中での御注意御心配、どうだ面々いよく手厳しいぞ、もし我々が目の前ならずば玉の腕を伸べて其土を拂ひ落したいほどの思召、いやはや恐れ入ったと今更に呆れて打守れば、流石に綾子も氣の毒とや思ひけむ、しづかに振り返りて人々に對ひつゝ、『どうか皆様も此方へ、失禮で御坐いますが、お食事を差上げる時間にも近づきましたから』

どうか皆様も、皆様もとは何事ぞ、そもく元來、もといふ字は餘り有難からぬ意味、よくいへば事のついでに手近の物を包含するの意味、わるくいへば嫌々ながら世間の義理に迫られて仕方なしに應ずるの意味、なさけなや我々は彼奴倉橋のために注ぎし愛嬌の露の下卑

御川に立った後の糟粕、あつい煮汁の冷めた殘餘頂戴、おついでに御挨拶を賜はったと嫉妬笑ひの聲高く打騒ぎぬ、

X

今日の食堂には官職の等級を立てず年輩の前後を問はず、只その姓氏のいろは順に席を定めて、主客ともに打解けながら談笑の間に盃をあけぬ、

おくりいだす美味すでに半を過ぎて談笑醉顔また正に酣ならむとする時、主人の大臣、しづかに席上を見渡して微笑を含みつゝ、『いづれも斯う揃ったところは實に多士儕々、もし當世の務を談ずれば殆ど天下をあけて掌上の物、うって一丸にすべきの勢ひありだな、ハ、ハ、ハ、しかし倉橋さん、君は此中で一種また別な男だ、少壯有爲で前途多望と稱せられし官を括つること冷飯草履を脱ぐが如く、殊更に舊の一書生となつて大に他日の翱翔を逞しうせむこと

するの用意、ハ、ハ、ハ、わるくいへば高飛の羽づくろひで、つまり慾の深い油断のならない人だが、偉なかく尋常人の出来ないこつた、一躍して取るの勇よりも取つて守るの勇よりも更にこれを棄て、取らむとするの勇は最も得難い、たゞ體軀を大切にしないよ、惜しむらくば好漢蒲柳の質といふ遺憾が世間に多いからね』

令嬢のみか父の大臣まで、なるほど今日は彼奴が爲に設けたる宴にして、つまり我々は陪食を仰せ付けられたりと、いよく嫉妬の眼を集めて見返れば、倉橋幸藏しづかに微笑を含んで會釋しながら、『いや、さやうな仔細らしい立派な覺悟で辭職いたしたのでは御坐いません、實は淺才不敏その職に堪へないからで、いはゆる自ら其地位にあらざるを悟つたからで、もしこれを露骨に申し上げれば、倉橋幸藏の如き官海にあつて當世の御用に立つよりは、かの草莽に隠れて僅に飢餓を凌ぐの計をなすの外、ハ、ハ、ハ、無用の書物でも捻くつて文人の仲間

入る方が自分の性質に合つて居りますからの事、只今の御言葉は閣下、いさゝか御見當違ひで、眞實お買ひかぶり御坐いますよ、しかし體軀を大切にしろとの仰せは有難く心得ます、實は病氣で寐た事は御坐いませんが、生來あまり達者でないものが逆も長く事務繁多に勝ち得まいと存じたのも、辭職を決心した原因の一事で、いはゞ萬事おのれの都合上から出たこと、この外に理由も仔細も御坐いませんが、さて世間からは重く見られて別に何か事でもあるやうに、いろいろ風評が立つて困ります、ハ、ハ、ハ、』

大臣の我を遇する體、令嬢の我に向ふ風情、例の新聞一件より殊更に心を用ゐて浮説を取消すがためとは思へども、また案外の好意深切、かくまで過ぎては却つて面白からざるのみか、今日の宴會に集りし人々の手前、これ見よがしの事を好むに似たるは平生の我所信に反けり

あまり狂言めいたるは我心に恥かして、やうく宴の果つるや否、そのまゝ、席を辭し他の談笑を聞き残しながら強ひて立去りぬ、

わざく大臣は一室を出で、會釋し、令嬢は殊更に玄關まで送り出しつゝ、馬車にせむ人車にせむと立騒がれしを、遁ぐるが如く去つて門を出づれば、またこれ一瞬の榮華を捨て、飄然たる一寒生の倉橋幸藏、さつと吹き來る砂塵の中に日和下駄の齒音からころと響かして歩みぬ、

大臣の官宅を出でしは午後一時過ぎ、麴町より根岸の奥までの途中、官を辭して三月越しの今日なり此後また用なければ暫く不出門の讀書生ぞと、わざく銀座街頭を徘徊し、日本橋の雑沓に立交り、淺草に出で上野を越えて、其日の夕暮、やうく我家に立歸りぬ、

人を窺ふ猜疑ならねど、例の黒田奴、我不在中いかに何を仕をるかと思ひつゝ、そつと門を入りて登音を忍ばせながら、その城廓に與へたる一室を差覗けば影もなし、さては今日かの川上と吉田が訪ひ來しを幸ひ、出入無用と固く禁ぜし我書齋を引き散らして其まゝ、其處にと見れば、果して室内を掻き探せしと覺しく書籍を散亂し、入らぬ小道具まで引き摺り出したるのみか、縁端の障子を明け放ち窓の下に据ゑたる机を持ち出して其上に腰うちかけながら、しきりに煙草の煙を吹きつゝ、暮れ行く庭前の景色を打眺むる體、また俄に何をか差俯くと思へば、川上の持ち來りしものか加之も既に半を盡せる菓子折の中に片手を差入れて、むしやくと喰ひながら片手に土瓶を取つて其まゝの瀧呑み、呑めばまた鼻の穴より白く煙草を吹いて見返りもせぬ大聲、「おい婆さん、おい婆ア、この土瓶に湯を注してくれ、そして今のうちにランプを點ける、歸つて來ると隠居奴また喧しいぞ、おい婆、きこえないか聾だ、

な、お、い婆』しきりに叫びながら、ふと顧みれば背後に倉橋幸藏ぬツと立ちぬ、『やア失敬、いつのまに君、やア失敬々々、おい婆さん主人公のお歸りだぜ、今日あの川上と吉田が来てね、失敬々々』あまりの不意に打たれて度を失ひけむ、机に腰うちかけたるも忘れて猶そのまゝに振り返りながら、白き菓子粉に塗れたる唇端を尖らしつ、頻りに失敬々々と囁る顔色、さすがの倉橋おもはずぶツと吹き出せば、俄に心付いて腰を卸さむとするや否、脚下の菓子折びしやりと踏み潰して横に倒れぬ、『ハ、ハ、ハ、君、どうだツたね今日は、萬事無用の饒舌なき君にして悠々寛々と一日がけの御愉快、嗚あ美人が楚々たる艶治で待遇したらうね、ハ、ハ、ハ、『どうも始末に困った人間だな、一見この體たらくは、軍人の楯ともいふべき人の机を引き摺り出して腰をかけるのみか、大きな聲で婆ア〜と、第一あの喧しい隠居奴と言ったのは誰のことだ』』ハ、ハ、ハ、さう君、他人行儀に詮議立をしなくツても宜いちやアな

いか、いはハ柄にない嬉しい目に逢つて来たんだもの、南瓜の當り年を祝つて何かお土産のあるべき筈だよ、歸るや否、すぐ權突たア少々酷だね、しかし君、今日の戰場どうだった、坐を構へて語つてくれないか』『馬鹿、ともかく此處を片付けるんだからランプを點けて來給へ、そして箒も持つて來るんだ、何だ此菓子折を踏み潰した醜態は、それぞれの足で歩いちやア困るよ、反故か手拭で、厄介な男だ、唇の端の粉も拭き給へ見苦しい、まるで山出しの猿に留主番さしたやうだ、ハ、ハ、ハ、』

おのれに失策ありと思へばこそ、この横著漢が一言の下に追ひ廻され叱り飛ばされながら、ランプに火を點け物を取片付け室内を掃き出す體、倉橋じろ〜、打守りつ、『平生そのくらゐ働く人間だと權助をしても喰つて渡れるがねエ、しかも立廻りに無駄がなくツて萬事なか〜巧者に手ツ取り早い工合を見ると、すれば人並すぐれて出來る癖に、いよく平生の横



著が現れて来るよ、今日も兩國へ迂回して上田へ寄ったが、いろく君の批評が出たぜ」「ハハ、どうせ聖人君子ともいふまい、上田は兎も角あの鼻アが僕の弱點を知り抜いて殆ど丸呑みの勢ひだからなア、しかし外見によらない氣の宜い鼻アだ、川上の妻が腹心の下女としてお清大明神の昔から毒氣と邪氣のないので通つて来た女だからなア、上田とは實に似たもの夫婦の世諺、眞に其配偶を得た伉儷と謂つべしだ、時に君、先刻も言つたが今日あの川上と吉田が来てね、頗る残念がつて居たよ、しかし幸ひ僕が」「その僕に居られたから二人とも却つて迷惑したらう、實は上田を出ての道順、橋を渡つて川上を訪うたのさ」「そいつアお互に残念の交換だ、ところで君、麴町の大臣官宅に於ける今日の様子は、それを聞かうと思つて娛樂に待つて居たのだ」「うるさいね、別に話す事もないよ、たゞ午餐を馳走になつたばかりさ、その外に何が珍も奇もあるものか」「大賈は深く藏す、大に獲たる奴は必ず平

氣を粧うて物事を祕すの道理、今日は君、君が生來の感覺上、尤も腦裡に印して一種いふべからざる感に打たれたらう」「ハ、何とでも君の想像に任さう」「そら、その言すでに君けしからん一端を現してるぜ」「けしからん一端とは何のこつた、それこそ、けしからん想像だ、ハ、しかし今日は一日、歩きづめで草臥れた、つまらない談話を仕かけてくれるな、いつもより少し早寢をするから、ねエ婆や、ともかく夕飯の用意をして貰ひたい、なアに茶漬で宜いよ、おい黒田貴様の部屋へ行かないか」「ちやアまづ此ま、で深く根を掘るまい、しかし何だか自分のこつてもないが妙に氣がゝりだ、よし、次の幕で今日の序幕を考へてやらう、君は自ら誓つて刃りに此草庵を出ないといふから、あの美人、どうせ近日また堪へ兼ねて来るに相違ない、その時の様子、相對うて語る一言一句、なアに君、いくら祕したつて無効だ、その點に至つては五人中の先輩、ハ、ハ、ハ、既に濟んで来た僕だ」「どうでも宜いから

早く行けよ、全體、君といふ難物が来て以来、よほど無用な時間を費すぜ、一日のうち先づ三時間は確乎に取られるね』『かも知れないが、さう君のやうに詰め切つて勉強ばかりするもんでないよ、無用な時間を費すといふが一日わづか三時間ぐらゐる、これを無用の用に解釋して見給へ、僕が駄辯喋々たる或は君がために藪醫者の調劑よりは勝るの効果あるかも知れん、人間もし三年ほど無人島に流されて人と人との關係を斷つた時は殆ど言語を忘れて仕舞ふさうだね君』『わかつた、わかつてるく』『いやさ君、妻子も何もない人間もし一年ほど友といふものを失つた曉は殆ど腦の作用を損じて恍るさうだね』『あ、蒼蠅い、この様子ぢやア逆も僕のところには置けない、明日、手紙を出して川上の家へ傳送しよう、ねエ黒田、もう君お謝絶だぜ』『や、一身上の進退に關して來ちやア聊か考へものだ、うかく、饒舌れない、あの川上、今日も随分、いやな事ばかり吐してね、ハ、ハ、ハ、僕は何故かう運の悪い男だらう』『ハハ、運ばかり悪いと思つてるから困るよ、さア早く自分の部屋へ退去々々』

其五

一躍して取るの勇よりも取つて守るの勇よりも一度これを棄て、更に取らむとするの勇は得難しと、例の宴會席上にて大臣が倉橋幸藏を稱揚せしは當坐の言ならず全く感歎の眞意に出でしと覺しく、其後しばらく人をもて書をもて懇篤に招かれしかど、今は致々たる讀書の一寒生たゞ恩を謝するのみ暫く閣下に拜趨するの違なしと、固く辭して應ぜざるところ勢利銅臭を覘うて日夜飛鳥の如く翔け廻る當世には珍しき心底、いはゞ一辭ながら其の頑たる中に一種の馨しき匂ひありとて、大臣の手前よく男振を見立てられぬ、此ごろ俄に父の譽めもの、まして我身のため新聞に汚名を唄はれて無根の冤に叩かれながら、じつと堪へて訪へば只一笑に付せし心の廣さ床しさ奥深さ、しかも現在あの官職を捨て、

苦學の一書生となりし遠謀大志、なるほど今の世には得難き人、かつまた我おもふ戀として  
 浮名を立てられし人ならば世間への憚りもあれど、かの新聞には正しく我身の憎みて飽くま  
 で嫌ひし男といはれし人、たとひ意地にもと思ひ込みし女の一念、いつしか眞實の戀ともな  
 りてや、いと憚る風情もなく時に馬車を驅り時に人車を急がせつゝ、令嬢綾子が花の如き  
 容姿、をりく人も通はぬ根岸の奥の草叢を訪うて倉橋幸藏が讀書の窓を驚かしぬ、  
 最初のほどは倉橋も頻りに好意を謝して迎へしが、中ごろは何とやら敵にもあらぬ一種の物  
 に襲はるゝ心地、果は前途を思うて今の身に眉を擧めつゝ迷惑顔、をりく臺所の片隅に遁  
 け込んで不在のよしを欺けば、例の黒田奴が慇懃に迎へて持參の賜物を己れ占領しながら喋  
 々と囁る不埒千萬、今更ら出るにも出られず苦惱轉帳、やうく歸るや否、忽ち躍りいで、  
 眞正面より責め立つれど、はや相手の本尊と心易くなりて操る絲を握りて顔色さらに驚かず

まさか鬼に部屋を差覗かれる心地もすまいなど、澄しきッて平氣の體、おのれ友を賣るに等  
 しき振舞、追ひ出さむとすれど追ひ出せば此奴また何を仕出來すやら、對手を噉して今より  
 嚴しく我を困らすぐらゐは得たる業、もし悪く戯れし曉は一騒動を持ち上げかねまじき奴と、  
 流石の倉橋も腕を組んで窮すれば、黒田いよく手を拍つて笑ひつゝ、さア君どうだ、殆ど  
 君が生殺與奪の權は我にありとぞ叫んで家中を躍り歩きぬ、

一日の朝、倉橋黒田の兩人が朝食の膳に差對うて箸を取る折しも女關に訪るゝ聲、飯炊の婆  
 立出でしが、やがて一通の書狀を持ち來りつゝ黒田に渡せしを、何心なく受取つて一みみる  
 や否、茶碗も膳も顛倒して頭に捧げながら、「さア倉橋、いよく變な調子になつて來た  
 ぜ、これこの書狀は正しく彼綾子嬢より我への御直筆、その文の大意に曰くさ、倉橋さんは

逆もお出でになるまいから、せめて貴方でも今日お遊び旁、来て下さいといふんだが君、どうしたもんだらうと弱い音を吐いて相談しない、僕ア行くよ、折角の思召、躊躇する場合でない、すぐこれから出かける』いひつゝ其まゝ起つて自己が部屋に駆け込む體、倉橋はツと驚いて追ひ行きつゝ、『おい黒田、眞實に出かける決心か貴様』『眞實も虚偽もあるもんかね、わざ／＼使者を以ての御招待、捨て、置いちゃア義理が濟まない、しかも過日来、君が隠れるから三度も逢つて心易くなつた間柄といひ、別使書狀の置きつ放しは我を信じて必ず来るべきものと待つてるんだもの、是非とも行くさ、往いて大に語つて大に御馳走になる心算だ、また時機が善けりやア大臣に逢つて一議論してやる考量だから、君あの袴だけ借してくれないか』『いやはや呆れた奴だ、づ／＼しいつてば、これ黒田少しは物の順序と事の成立と時の場合を考へろ、うか／＼今こゝで貴様のやうな奴に行かれて堪るものか、おい黒田』『だッ

て君、僕の名ざしで来いといふから僕が行くに不思議はあるまい』『不思議のある無いぢやアない、全體また此家に居るとはいへ、どんな男か二三度やう／＼逢つたばかりのモンに手紙で呼びに来るたア、けしからん女だ、狂氣馬の綱を斷つたやうに勢ひ込んで飛び出さうとする奴も奴だが、また招く女も女だ』『ハ、ハ、ハ、もう君、そろ／＼嫉き出して来たな』『ばば馬鹿ッ、斷じて行く事はならないぞ、いくら貴様が行くと争つても僕が遣らない、腕力に訴へても捻ぢ伏せるから覺悟しろ此奴め、今まで大概の事は例の性質と見て許したが、事によると今日は實際に十餘年來の絶交問題だぞ黒田、もし悪譜なら今のうちに止せ』『ハ、ハ、ハ、君、全く怒つたね、そりやア少々なさないね僕を見る目が、いくら僕だつて物の大體は辨へてるよ、いはゆる當事者で主たる君が既に心すゝます應ぜざるものを、的の外の僕が、第一、馬鹿々々しいぢやアないか』『それほど分つて居ながら、何故また貴様』『謝罪謝

罪、實は君、あんまり君が綾子嬢の事に就いて呵しいほど要害堅固すぎるから、ちよいと例の戯れに『ちよいと例の戯れといふ事があるか、もし一步を誤れば取返しにならない人事の大切に關するのだ』勿論、さうだ、それに相違ないがね君、また君のやうに固い道理ばかりを盾に取って乾燥無味ぢやア不可ンよ、そもく彼嬢が呼びたくもない目的外の僕を招くといふなア、つまり情に餘った處女の一念より湧き出でたる方便で、即ち目的の君を促す所以さ、早い談話が倉橋、君は無妻主義の人であるまい、いづれ娶るべき妻、その妻としての綾子嬢は君、どうだ、まづ才色兩全、さら世間に落ちて在る女でないぜ、只その父の大臣として權威富貴を併有するがため、これ尋常人に於ては拜跪して喜ぶところ、これ一片の氣骨ある男兒に於ては寧ろ身つて多少の不快を感じるところ、そこで君は正に拜跪せずして多少の不快を感じる方だらう、殊更に避けて自己が獨立獨行の力を飽くまで社會に遺憾なく伸張し認

識されたい方だらう、つまり大臣の娘なぞア嗚アにして面白くないのみならず世間の耳目批評が癢に觸るんだらう、しかし倉橋、こゝがまた胸を据ゑ心を廣くして一考すべきところだぜ、そもく大臣何者ぞ、まして富を論ずれば彼等の財産をあけて幾何ぞ、實は餘り大臣といふものを見上げ奉り過ぎるから、いやに變な遠慮が出て、をかした意地骨が突ツ張るのさ、親が大臣でも乞食でも宜いぢやアないか、只それ娶つて生涯を契るべき娘その女にありだ、しかし其女が氣に入らないといやア萬事それまで、論はないが、もし其父の大臣たるを以て躊躇するンなら無用な遠慮だ、いは臆病の致すところだ、そこで僕が綾子嬢の眞意を察するに、決して最初から君に惚れたンでも何でもない、しかし今日の戀愛を構成せしもの二件ありだ、第一は官を去つて舊の一書生になりし君が志の立派なところを感じたのと、第二は過日、委しく聞いた新聞紙上、全く君に對して如何にも氣の毒だと思つたところより俄

に同情の念を寄せたのと、第三は氣の走った一途の娘氣に得てある奴で、世間に評判を立てられた反對の意地から出た負け惜しみが、つい我しらす本物の戀になるものだ、ね君、以上の三要素が今日かの綾子嬢に擒にして、さアどうなとなさいで君の前に呈する月下氷神の思召、うける心算か、跳ね返す心算か、平生は兎も角、今かくいふ黒田健次は生涯に幾度といふ大真面目だ、骨肉に勝る十餘年來の刎頸の友として語り給へ、この一事に就いては僕が心身を傾けて君がため猶よく綾子嬢の性質を實地に考究すべき法もあるがね、兎も角、君が今の目を以て見たところは、どうだ倉橋、鼻アに持つか持たないか』

倉橋幸藏が生涯を契るべき友白髪までの妻は誰ぞ、いづこにある、新聞記者として意は満たさ官吏として心に足らず、忽然また舊の一寒生となつて苦學慘憺の曉、この草庵を出で、再

び社會に向ふ時、そもく何をもて業とするか、いかなる地位を得て如何なる境遇に甘んずるか、

倉橋幸藏後編

其一

都門の片邊り隅田川の流水に沿ひし汐入村に月漏る軒の片廂といへば、いかにも風流めいて浮世の榮華を飽き果てし雅人の宿に聞ゆれど、その實は風雅でもなく洒落でもなく浮世の中央に棲み兼ねて年中の空腹を抱へし涙の痕、霜夜の膝小僧抱き寝に苦しんで裸踊りの勇を鼓し終夜の藪蚊に責められて吊板飛乗の滑稽を演じつゝ、いづれも乾き切つたる鍋釜の底を叩いて負け惜しみの梁山泊を學びし頃にも、倉橋幸藏のみは常に心を平靜にして武者振ひの後陣に控へ殊更ら奇を好まずして眞面目の讀書三昧に耽りしかば、同輩いづれも呼んで血の氣の尠き若隠居とぞいひぬ、

さても其後さるほどに汐入村の古巢を捨て、前後おのく世の中に這ひ出でつゝ苦學十年の效を收めむとせし時にも、黒田が例の臨機應變をもて風車の如く浮世を飛び廻つたるに似ず、かの上田が頑として俗世の逆流に自己が性を守らむとするにも似ず、さては川上が飽くまで持重して最後の一發を試みむとするにも似ず、この倉橋幸藏のみは塙を出で、より一日の羽翼も空しうせず、しかも高く飛ばねど低く地に舞はずして時と處に分相應の衣食住を構へ、新聞記者となりては書を貯へ官吏となりては金を蓄へつゝ、またこゝに舊の一書生となりて悠々たる三年讀書の籠城を築かむとの用意、出處進退いづれも節に従ひ度を守りて著々その言行を遂げしかば、今は却つて油断のならぬ謀反隠居と呼ばれぬ、

また出處の曉、第一に黒田が例の島女を抱いて浮世の苦勞あれほどの果を一片の土饅頭に止めし哀れの男泣き、第二には川上が富田家の愛嬢芳子の戀婿となつて春夢さらに濃かなる間、

第三には上田が常に濱町河岸の泥濘さては土生の家鴨と罵つたる其お清を妻として最愛の一子をあけし間にも、この倉橋幸藏のみは一味の年長者しかも早く一家をなせし身ながら、一切さらに風流の罪なく紅粉の香に酔ひ情縁の羅に繋がれずして、たゞ獨り多年の空閨寂寞を守りしかば、また戯れに呼んで我黨の清淨無垢、生佛殿とぞいひぬ、

汐入村の若隠居も、世の中に對しての謀反隠居も、すでに其名の如く一步も踏み迷はで歩み來りし倉橋幸藏が、そもく女にかけての生佛いつまでの清淨無垢に涉るべきや、かの新聞に思はぬ無根の浮説を唄はれし以來、意地より出でし戀か戀より出でし意地か、但しは人の噂に立てられて世にいふ口惜しまぎれの虚偽より出でし眞情か、此ごろ頻りに根岸の奥の露滋く草深き讀書の窓を驚かして得ならぬ色香を乗せたる馬車の通ふ音響あり、

さても孤獨寂寥の淋しさを慰めむとして來る愛の神の導きか、なほも行末の宿志大望を挫か

むとして差覗く惡魔の使者か、倉橋幸藏おもはず眉を擧めて人しれぬ心を惱ませつ、我道芝の露か玉かと疑ひぬ、

されどこゝに食客的の黒田健次は例に依つて例の如き横著さ、づうぐしき野面のツペりと天井の節穴に貰の煙を吹き付けていふ、なアに構ふもんか君、鬼でも蛇でも年頃の美人に化けて來りやア引き摺り込んで幸ひ秋の夜長の徒然を慰むべしだ、まして性の知れた才色兩全の綾子嬢、この草叢に裳を濡して音もなく門の柴折戸を叩いてくれ、ば色も情も申分のな

いとところを、大臣の娘で候と馬車に乗つて來るだけが少々小癩に觸つて懐しくないやうだ、しかし手を出すや否その日から忽ち此方の厄介物に荷ぎ込む女よりやア萬事の手数がなくつて結構至極さ、また業々しい馬車でなくンば却つて人目の關を越え兼ねる身分といやア其事も其筈、なるほど恕すべしだぜ君、おい君々と叫んで頻りに何をか獨り呑み込んだる顔色、



今のうちに取押へずんば由來の例に依つて此奴また此まゝに捨て置けぬ奴と、倉橋幸藏さらに一入の肩を掣めて内外二人の敵をうけたる心地しぬ、

くれたけの根岸の里といひしも今は激しき浮世の塵埃に吹き込まれて、くだらぬ根岸の市街となり果てながら、なほ奥深き片隅の此家には車馬の音響も遠く市井の巷に叫ぶ銅臭の喧騒も聞えず、まして冬近き秋の日の暮れ果てし後は、萱葺屋根を互る木枯の音のみ高く、まだ霜は置かねど窓うつ落葉に肌寒く、何とやら心を誘ふ上野の山の鐘の音、おほろに幽む日暮里あたりの無縁寺に托鉢坊主が経讀む聲、終日の疲勞を夢に見るか、三河島邊の牛小屋に遠吠えの淋しさ、こゝに世を棄てねど官を捨て、再び一介の讀書生となりし倉橋幸藏がためには燈下いよく親しむべきの好時節ながら、病餘の野心さらに勃々として詮方なくくの

食客的となりし黒田健次がためには月なき配所の心地して、主人が机の傍らに惘然と坐しつつランプの影に無用の腕を組む體、高僧智織の眼前に引き出だされて化け損ねたる狸に似たり、

「おい黒田、そこに惘然と腕組をして仔細らしく何を考へてるんだ、いつもの例で壽命の縮つた蟬のやうに喧しく饒舌られないから耳觸りにはならないが、また勉強の目觸りになつて困るよ、どうだ宜い加減に自分の居城へ引き取つちやア、もし君の言を學んでいはゞ、天下の賢不肖無差別が一例に枕を並べて討死する時刻に近づいて來たぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、』ものを言へば耳觸りとの御意、黙つて居れば目觸りとの御叱り、いやはや主客の勢ひ、すまじきものは食客だね、また別に惘然と何も考へて居ないが、ふけゆく秋の夜寒に木枯の音、捨鐘の餘響かすかに讀經の聲、牛の遠吠え、これでも日本一の首都のうちかね、あんまり好奇に風流す

ぎて聊か浮世戀しの歎ありだ、いくら淋しくツても猪や猿が遊びに来る片山里ぢやアなし少しは程度のあるもんだ、まして君、喰ふに困った汐入村の昔と違つて苟も三年坐食の用意ありといふ今日の君、せめて霜夜に叫ぶ按摩の笛ぐらゐる聞えるところへ出ちやアどうだ、もし一歩を進めて露骨にいへば、夜しづかに人定まりて後、かの俗中に雅あり雅中に俗ありとも稱すべき情致風趣、三味の音じめの遠く近く枕に通ひ高く低く心を誘ふ新内の流音でも聞えるところへ移つちやアどうだね、一つ間違へば其まゝ人間界を去つて仙人になる古昔の腐れ儒者は格別、たとひ誤つて時を失ふとも再び社會へ乗り出して二度の旗揚をしようといふ君が、あまり浮世に遠ざかるは其策の得たるものでないよ、豈たゞそれ住居の浮世に遠ざかるのみならむやで、近來しぼくこゝに蓮歩を運ぶ例の美人ね、あの綾子嬢さ、あれも何とか急に處置を仕なけりやア君、不可ンゼ、現在本人の君よりも僕が第一、氣になつて氣になつ

て半夜の夢おどろくこと屢々ありだ、早く處置を付けてくれないと傍で見ると目の僕が辛いね、堪らないよ、もし君が嫌なら僕がといふものでなし、殆ど氣が揉めて瘦せるやうだ、ハ、ハ、ハ『馬鹿、そろゝまた馬鹿口を始め出すよ、こゝが淋しくツて氣に入らなきやア、例の立退狀一札に及ばないから何處へでも勝手に飛び出すが宜いぢやアないか、また他人の事で辛いの堪らないの瘦せるのと、ハ、ハ、ハ、入らざる餘計なお世話さまだ、黄塵萬丈といふ日本一の首都のうちで木枯も鐘の音も讀經の聲も牛の遠啼きも自由自在に聞えるから猶更ら尊いのだ、これが市街の中央に大廈高樓を構へて電氣燈の輝く下に蓄音器を樂しむ奴等の得られるところでない、黄金の人は黄金に限られて天の賜物に與ること能はずで、他日もし僕が志を得た曉は今より尙ほ遠い片田舎に本宅を据ゑて銀座か日本橋の雑沓中に別莊を持つてやる決心だ、世間今日の人は繁に追はるゝがため常に閑を思つて加之も閑を得ないが、僕は閑に

身を處して繁を樂しむのが持論だ、その由つて來るところは金錢上の經濟よりも寧ろ人生打算上の經濟に重きを置いて、つまり腦髓と身體の儉約から割り出したので、かの徒らに風流とか韻致とかいふ空文字に踏み迷つて人間の出路を失つた徒輩とは全然その流を異にしているだからねエ、安心し給へ、まさか此まゝ飯を喰ふ字典になる覺悟でもなし仙人になる筈もなし、やはり名は倉橋幸藏だ、たゞ心の倉橋幸藏に於て今より多少の變化あらむのみさ、ハハ、ハハ、『なるほど、俄に容を更めて歎服すべきほどの名論でもないが、また一理ある一種の説として聞くべしだ、それで始めて分つたよ、陰に閉ぢられて響く上野の鐘が三味の音じめより意氣で、世に捨てられた乞食坊主の寒念佛が家元の咽喉よりも有難く、わけて木枯と牛の遠吠えが御意に召した此住居、ハハ、ハハ、ところで例の美人に就いての説を承らないが、ついでに伺ひたいもんだね』『いやはや呆れた御挨拶だ、いつもの流で今に始つた事でも

ないが、どういふもんか君の言葉は嫌に人の鼻ツ柱を舐めるやうな調子があつて、しかも毒々しくつて餘韻に何となく憎味を帯びて居るぜ、これが十餘年來の交友で腸の底まで知つて居ればこそ、また例の通りと高を括つて氣にも仕ないが、初對面で少し癩癩持の相手と來ちやア忽ち喧嘩だね、よく今まで無事に通つて來たよ萬事その風で、君が向不見の大膽と會釋なしの横著と縦横の才氣とを振り廻して數年奔走の結果、こゝに今日の失敗となつて食客的の境涯に口惜しがるのも實は幾分か口舌の故だぜ、ハハ、ハハ、『おい倉橋おい、君にも似合はない卑怯な振舞だ、僕の揚足を取つて差當る自分の返答を誤魔化さむとするな、さアハハ、ハハ、どうだね、綾子嬢に就いての御議論は、たとひ間違つても何でも事々物々に必ず一個の持説と主張があつて著々これを行ひ、もしくは行はむとするのが汐入村以來まづ君の長所ともいふべきところだ、まして君、あれほどの美人が戀に心を亂して此、この草深い片隅

の茅屋に最愛しの郎や在すかと情緒纏綿、しばく忍んで訪ひ来る愛情の露を神經過敏な君が性として、何とも思はないたア言はせないぜ、かういふ場合になると僕ア猶更ら気が急いで言葉が荒くなつて困るが、手取り早い勝だよ、おい倉橋、白状しろ、先方も先方だが此方も此方で惚れたなら惚れたと言つて仕舞へ、つまり其間に友達甲斐の工夫があるからよ、まゝッ子が意地の悪い母親の前へ出たやうに、うぢくするな、生きたか死んだか沸えたか沸えないか分らないで持ったものは蛇の生殺しと豆腐の糞鹽梅だ、嫌なら嫌で今のうち早く断念めさしてやるが宜い、可哀さうに死花の咲く野郎と違つて處女の色香は三日見ぬ間の櫻と一般、實に一刻千金だ、うかく中有に迷はされて堪るもんか、第一これほど重い罪はないよ、しかし君、まさか嫌ぢやアあるまい、鰻は喰ひたし生命は惜しといふんだらう、なアに鰻だつて料理鹽梅たゞ一事だ、もし鰻を喰つて死ぬもんなら東京の魚河岸に住む奴と

日本の瀬戸際、かの門司と馬關に人種が盡きる筈だ、そこで料理は僕がするから君まづ箸を取つて見給へ、早い談話が君、どうせ持つ唄アぢやないか、互に好いた同士が一所に住んで尻を放つても呵しく無くなりやア其事で天下泰平だ、戀は神聖だの愛は虚偽なき人の心の琴線を弾ずると杓子定規を持つて廻つて騒ぐ糞面倒な手数のかゝつた絲瓜の皮も身もあるものか、ハ、ハ、どうだ倉橋、「宛然これ下手な落語家の前坐だね、のべつに饒舌るが更に要領を得ないよ、もし近來をりく僕を訪ひ来る綾子嬢の事なら君、さう騒いで餘計な心配してくれるに及ばない、訪はる、本人の僕が別にまた考量があるから、不肖なりと雖も我みづから我に關する一切の事を處理すべき分相應の能力があるから、食客的たる當事者外の君は正に有難く三度の飯を喰つて靜に自己が身を保ち無事に日を送るべしだ、そもく上田夫婦に散々の厄介をかけた後、さらに轉じて僕のところへ來た時、君は何と言つた、敗軍の將みだ

りに兵を談じて主人公の勉強を妨げず、病餘の身たゞ保養を専一として由來の横著を構へず例の駄洒落を吐かずと、さも眞面目らしく誓つたぢやアないか、それに一月やうく経つか経たないうち既に斯の如き體では僕も殆ど閉口だ、いよく今度は川上のところへ傳送しなければならん、其うち吉田も何とか身を立てるだらうから、また川上から吉田への傳送、もし汐入村以來の我々を軒別に廻つて見る覺悟なら其事で宜いがね君、まさか然うであるまい、疾病は既に癒えたり涙ながら足手まとひの島女はなし、もはや一身一體いづこの里へ行くとも平氣で喰つて通るに差支のない男、時と場合ぢやア萬金をもて迎へても癩癩に觸へて應じないほどの男だが、骨肉に勝る十餘年來の知己なればこそ甘んじて暫く食客的になつてる筈の黒田健次その人が、惜しいかな近來あまり調子を外し過ぎるやうだぜ、例に依つて例の通りも少々その度を越えたやうだぜ、彼奴が病痾に臥して生死の境に苦悶するほど弱り込んだ

時が恰も世間普通の人間だらうと評した川上の一言、ある點に於て譽めたのか譏つたのか知らないが其當時は兎も角、殘酷の言として實は君のため聊か不平に思つたが、なるほど、さのみの的外れでもないやうだな、一時外來の病氣に押し込まれて勢ひを潜めて居つた天性持前の持病が此頃また、そろく頭を持ち上げて來たんだからねエ」「一急一緩、捉へては放ち放ちては捉へ來るところ、いかにも巧に囀つたね、しかも現在こゝに、事實として現れつゝ辨解論争の權能を奪はれたる食客的を翻弄一番せしところ尤も妙だつたよ、ハ、ハ、ハ、しかし僕も殊更に好んで君が避くる點を追窮し御機嫌を損ねたくないから今夜アまづ此まゝで置くとしよう、なれど君、君また彼綾子嬢に就いて現れ來るべき事實で辨解論争の機能を失つた時は食客的たる僕また翻弄一番するからね、とかく今日の世の中は事實問題だ、ハ、ハ、ハ、」

しかしまた命令的に婆アを呼び付けて臥床を取らしちやア不可ンゼ、おのれの寐る夜具の始末ぐらゐは自己が當然すべきもンだ、まして食客のといへば、ハ、ハ、ハ、ハ、また妙に擲ンで來て怒るだらうな』いや怒らない、眞實その食客的に相違ないから、むしろ謹ンで感謝するよ、あゝ食客の々々々、どりや志を更めて恐惶肅々と大に氣兼しながら更け行くまゝに冬近き秋の夜の冷え切つたる木綿夜具を自ら展べ、龜の子のやうに手足を縮めて半泣きの食客寐と出かけべい、また明朝あらためて御意を得ますよ主人公』ハ、ハ、ハ、ハ、志を更めて大に氣兼をしても、まだそれだけの憎まれ口が出るンだから物凄いや、俗に食客根性といふ事は聞いたが、そもく食客寐といふ言葉は今が始めてだ』僕だッて憐れむべし近來やうく自然に覺えたのさ、食客寐、食客喰ひ、食客目、食客鼻、食客垂れ、なかく數へ切れなほどあるよ、いづれも物の哀れを含んで寐ると喰ふ段は兎も角、怖しいもンぢやアないか

君、食客的になると常に主人を憚ッて目鼻の相まで違ッて來るぜ、もしそれ食客垂れに至ッては言語の外、明日でも僕が實地を見せてやるから、ハ、ハ、ハ、ハ、』主人を憚ッて目鼻の相まで違へなくツても宜い、どうか主人を踏み願ばさないやうに仕てくれ、ば結構だ、もし戰國時代なら僕の寢首を搔いて敵に渡す食客かも知れないからなア』こりやア酷い、いくら僕が』いや戲談だ、もう今夜これぎりで雙方無言々々、君を相手に仕て居ちやア夜が明けて仕舞ふよ、しかし黒田、わるく言ふが君もまた一種の辯を持つて生れてるね、ろくでもない駄洒落、つまらない無用の饒舌、決して耳を傾けまいと思ッて居ながら、つい我しらす引き摺り込まれて大切の時間を空費するよ、いつでも後で後悔する點を考へると、やはりこれ君が一種の才辯だ』や、そこだ、そこだ君、も一歩、さらに一歩を進めて考へてくれ、萬事に慎重の態度を取ッて要害堅固なる君が、我を忘れて僕の駄辯に引き入れらるゝ道理がない、頭

上から信用しない僕の饒舌に釣り込まれる筈がない、その道理なく其筈なくして大切に可憐ら時間を空費するの後悔あるは君、そもく何の理由ぞ、こゝを考一考して貰ひたい、お坐に乗り出して自分の事を自分と言ッちやア變に呵しいが、駄辯饒舌のうちにも一點おのづから奪ふべからざるの眞意あるがためさ、どツか君、これでも可愛らしいところがある證據だよ、誠實なきの千萬言は人を動かすに足らずといふ言を引き出しちやア僭上かも知れないが、まづ千萬言中に一二の誠實ありとでも自稱すべしかね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、良工は寸木の朽ちたるをもて尺木を棄てずだ、ねエ君」「やうく凋れて立ちかゝつた奴が、また俄に勢ひを増して坐り込んだよ、困つたなア、うツかり譽める事も出来ない、なるほど、さうかも知れない、知れないがね其お手前味噌は明日また改めて頂戴するから今夜ア此まゝ龜の子になつてくれ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、それでも君、ちよいと語るに足るべき間際まで悟つて來たのが愉快だ、山海の

珍味を食客的に供してくれたよりも有難い、この様子ぢやア更に二二個月の後、おいしく僕の眞意誠實が了解するだらう」「いよく驚いた、その勢ひで二二個月も饒舌り立てられて堪るもんか、今のうち防禦線を張らないと饒舌り殺されるかも知れない、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、まづ龜の子、龜の子」「さらば手足を縮めるとしよう、しかし防禦線とは何だね、まさか食客的に對する退去條例ぢやアあるまいね」「馬鹿に強情張つた剛い事をいふかと思へば、また神妙に恐れを抱いて氣にするところが殊勝だ、よほど叩き出されるのが嫌と見えるね、君にしちやア寧ろ愛すべしだ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、なアに退去令でないから安心し給へ、つまり言語應對に關する規程を設けて一種の家憲を作るのさ、いはゆる君が舌鋒を防ぐの楯さ」「言語應對といやア既に兩々相對する理由で、取も直さず合意的になる筈のものだ、一人で勝手に設ける規約は許さないぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

其二

庭前の垣一重に浮世を隔て、此茅屋に三年籠居の志を定めてより、倉橋幸藏が門を出づるは上野の圖書館へ通ふ時と在官中に交際を結びし大學講師の博士三四人の許へ學理上の不審を問ひ其説を聞くがために通ふのみ、その他は一切不出門の讀書生、身は我から配所の幽閑に似たれども、心は更に天馬空を走るの勢ひありて、もろくの希望と快樂とは一夜千金の豪遊に誇る癡人よりも多く、肥馬輕車を市井の巷に驅る眼前の富貴人よりも深し、けふも上野の圖書館へとて出で行きし後には、例の黒田が悠々と手足を伸ばしての大欠呻、留守中に門の内外と庭前の掃除を命ぜられたれど、はや秋ふけて冬近き此ごろの落葉頻々、掃へども掃はざるに等しければ歸りて文句をいふべき證據なしと、其また倉橋の書齋に大胡坐を搔いて縁端の障子を開け放ちながら、蕘の煙はツと吹けば土廂の軒をかすめて、おほろ

臙と空に消え行く體を額越しに睨んで、竟に池中の物ならぬ蛟龍が風雲を得て天に上るの形容、我また今は此家に食客的となつて無用の駄洒落に日を送れども、おのれ一朝その機に會せば力足を踏んで社會に飛び出しくれむと、思はず笑を含みぬ、をりしも飯炊の婆が臺所より番茶の初煮を汲んで持ち來りつゝ、例に依つて留守中の氣焔に當てられじとの用意にや、菓子のはりに澤庵の新漬をさへ添へて差出しながら、『黒田さん、お茶が出来ましたから召上つて下さい、そして氣は心のお菓子も添へて御坐いますよ、ホ、ホ、』

黒田おもはず振り返りて茶碗を手に取上げながら、片手に澤庵漬を掴んで満面に笑を湛へぬ、『こりやア婆さん、よく氣が付いたよ、喧しい奴は居す天氣はよし何となく氣が清々として鼻眼の一つも出さうな折柄、炮じあけた番茶の初煮に香の物の取合ははせたア野暮でない、



むしろ玉露で羊羹を喰ふよりは氣が通ツて洒落れてるさ、ハ、、、しかし婆さん、この菓子  
子の嫌に音のするだけが癢に觸るね』『そりやア貴方、物置の隅に四斗樽の桶漬で仕込んであ  
る菓子ですもの、お坐敷に出て桐の折箱に這入ッてる御進物用と少しは違ひますよ、ホ、  
ホ、』『いや婆さん、なか／＼談せるわい、きけば今年六十一で良人も子も何もない孤獨者と  
いふが、眞實かね』『何が貴方、虚偽を申し上げますものか、全く草の葉陰の依頼もない婆で  
御坐いますから、此上とも宜しく萬事お願ひ致します、實は普通の慶庵口にかゝッて、御厄介  
になつたので御坐いますが、まア貴方、斯んな氣樂な結構な御主人を持ちまして、外に行く  
ところが無けりやア死ぬまで居れ、葬式は乃公が出てやると仰しやるんですもの、つまり  
婆の運が宜くツて御主人を取當てた方、また旦那様は却ツて御迷惑な厄介物を荷ぎ込んだ方  
で御坐いますよ』『なるほど、そいつア心淋しくツて氣細からうよ、その老年で孤獨者ちやア

ねエ、しかし婆さん、この倉橋といふ男は外貌よりも腹の底の深切なもんでね、第一まづ自  
分の言ツた事を違へない性質だから安心して長く居るが宜いよ』『はい、有難う御坐います、  
どうせ時代おくれの氣の利かない事ばかりで、萬事お心には叶ひますまいが、まぬけた老婆  
の仕事は斯んなもんだらうぐらゐのところで御勘辨に願ひまして御見捨てなく使ツて戴きます  
覺悟で、實は叩き出すと仰しやツても、お袖に縋ッて動かない決心の厄介婆で御坐いますよ  
ホ、、、』『その料簡で他人氣なしに居てくれりやア雙方の都合だ、しかし婆さん、唐突に  
妙な事をいふやうだが、若い時は随分と面白をかしく浮世を渡ッて來た様子だね』『あれ貴  
方、何を仰しやいますよ』『いや、たゞの女の成る果ちやアあるまい、今でこそ落魄れて苦勞  
した上を他人の臺所で煤ほつたばかりか年齢の故もあるだらうが、どツか昔を忍ばるゝ目鼻  
立、またその顔の皺も自然に寄ツた皺でないやうだ、さんざ洗ひぬいで木地を擦り出した戀

の餘波の色皺と見た乃公の目が違つたかね、ほんのりと目元の臉邊の黒ずんだ鹽梅、別れたか死んだか知らないが良人も子もないといふ事情、言葉の端々ちよいくと重くない調子があつて人を外さぬ工合、おい婆さん、隠したつて無効だ、親に付けて貰つた外に浮世から付けて貰つた全盛の名があつたらう、こんな事は野暮に物固い倉橋の前ぢやア大の禁物、また外の事と違つて氣の付く筈もないがね、乃公は少々、ちつとばかり分る方だよ、だから今ごろ彷徨いて友達の家へ食客的に來るのさ、ハ、ハ、ハ、幸ひ誰も憚る奴はなし、打明けて聞かしてくれよ、第一その身の罪亡ほしにもなるぜ、また乃公が講學の一端だ、くだらない一夜漬の駄小説を読むよりやア必ず面白いと見込んで頼むのさ、どうだ婆さん、花の色香を夢と過ぎた昔語りもまた一興、おはもぢさまながらと出掛けてくれないか』『あれまア、恐れ入りましたよ、こんな皺くちやの婆に、何が面白い昔語りの御坐いますものか』『いや、花は昔し

に皺くちやの梅干婆といふところに面白味があるんだ』『困りましたねエ、しかし貴方は、お鑑定で在らツしやいますよ、なるほど、妾も今では心底から發起いたしまして、後悔やら冥加のためやら、若い時分の埋め合はせに死に働きの苦勞と覺悟を極めて居りますが、舊は』『そら出た、さう來なくツちやア面白くない』『ホ、ホ、ホ、何だか變に更つて、宜い年をして、きまりが悪う御坐いますが、お話し申せば貴方、なか／＼長い事ですから、搔い抓んで中年後の懺悔談話だけを致しますよ、今より四十年ほど前で江戸繁昌のころ、吉原の久喜萬字といふ大籬に兎も角、その當時の立物で白露といはれたのが、ホ、ホ、ホ、この婆で御坐いますよ、傾城と鎌切の世諺で、全盛を唄はれるほど罪の深い道理、わづか五町まち三界を天地と心得て禿からの仕立て上げて御坐いましたから、猶更ら世間の事は一切、自分の威勢に任して大門外から來る人の身代破滅や路頭に迷つて水死首縊りの末路を聞いても廊下で上草履の

鼻緒が切れたほどにも思はないんですもの、罰が當らないで無事に済む筈が御坐いません、しかし悪運とやらも立つ時には現に報いの來ない凡例で、數ある客衆の中に一年以上ついでて人の噂に立てられるほど立派に通つて來た方が前後十年の間に凡そ三十二三人も御坐いましたらうか、んがし其うちで別段の怪我もなく自然に通路を斷つて身の修つた人が十人あるやなし、あとの二十餘人は貴方、手こそ下しませんがこの妾のため、お氣の毒な最後ばかりで、謀判をして牢死したのもあり、戀の意氣張から相手を斬つて死罪になつたのもあり、親に勘當され不義理な借金に首も廻らない苦しきまぎれ隅田川に身を投じたのもあり、また或藩のお武家で御用金の消費込が知れかゝつて、俄に切腹をした方も御坐いますが、ちやうど其時は盆前の物日に差迫つて居ましたから、俗にいふ切餅一俵、二十五兩といふお金の無心を其お武家に頼んで置いた催促かたぐ、幸ひ平生御最辰になつてゐる幫間を堅氣の風に仕立て

てやりましたところが貴方、お國出の勤番ですから一人の仲間を外へ出して仕舞つて誰も居ないお長屋でね、今、御家老へ申譯の一札を遣して腹を切つたばかりの眞ッ最中、演劇の外に見た事のないものが腥い眞實の血糊に出喰はしたのですから堪りません、きやつと驚いて其まゝ其處へ腰を抜かした大聲に藩中の方々が駈けて來て、ともかく此奴、胡亂な奴と縛りあげられた大騒動、その幫間に引き違へて仲間が妾へ届けに來た幅紗包の中に貴方、約束の二十五兩が封じてあつたには、いかな傾城根性にも思はず總身ぞつと寒くなつて念佛を唱へましたよ、しかも其お金を物日の用に得立てず、幸ひ盆の魂祭りに部屋の一室を清めて懇ろに涙の回向を致しましたが、此お武家ばかりは生きて通はれた時に何ともなくて、死んでから眞實お心に惚れ込みましたね』『いや、さうだらう、實に面白い、そいつア奇談だ、しかし外に、まだ面白い事があつたらう』『別段その外で、しみじみ身に染みて忘れないやうな事

は御坐いませんが、やはり、これも二十餘人のうちで、今お話し申したお武家よりも實は氣の毒に思ひながら、あんまり薄氣味が悪過ぎて、嫌らしくツて、ちらく、目の前に三年ほども付き纏はれたのが御坐います、それは遠州の秋葉山の麓で、なか／＼大きい材木問屋の一人子息ですが、深川の木場に取引店があつて来たのを、根が正直一途の田舎者で加之も身代が太くツて初めての江戸見物といふので、その實は木場の番頭が自分の娯樂半分、懐中を肥さうため、夜櫻を幸ひ引ツ張ツて来たのですが、年は二十九で國元には妻子もあるとの事、また妾は二十四で先づ全盛の頂上で御坐いましたね、ところが呵しい談話を致しますが、そのころ、妾に、ホ、、、始めは一人の色客で、後には落魄れて忍ぶ戀路の情夫にして置いた男が』『おい／＼その邊は、あんまり委しう聞きたくない、どうか素通りにして田舎子息の事だけ』『ホ、、、だツて貴方、それを申さないと談話の前後が分りませんもの、しかしまづ

萬事あツさり手軽く致しますから、つまり一方に消えて行く抜穴があツて一方に引き出せば出る穴が出来た時の傾城といふものは貴方、それこそ腕が冴えて度胸が据ツて我ながら怖しいくらるですよ、まるで生首でも煮て喰ふ勢ひ、高が山家生育の世間盲目を生膽引き抜いて手鞠に取るは箸持ツて御飲いたゞくよりも易い事、しかも先達に立ツて悪神に付き纏うた木場の番頭を味方に引き入れて、取る金の一割半は年貢に收める約束で、内外から搔いて落したのが凡そ三年越し、まる二年半の間に國元の身代を塵埃も残さず揉み潰さして妻子まで生き別れの酷い結果、もはや逆さに吊して鼻血も出ないといふ曉を貴方、よくまア出来たもの、今更ら思ひますが、ほんとは突き出して見向きも仕ないばかりか、わざ／＼未練を残さないやうにと入念に鹽花まで振り掛けた鬼畜生の仕業も、さのみ其ころは不人情とも思はないで平氣に居ましたところが貴方、世間を渡ツて来た人とは違ツて田舎大盡の懐中生育で版

に摺りたいほどの傾城文殻を肌身に離さず持つて居る人間ですもの、まして口端の夫婦約束を眞に受けて國の妻子を離縁したくらゐですもの、正直一途の心に三年越しを欺しぬかれた怨恨が骨身に染み渡つて、しかも現在その日の路頭に迷うて國へは歸れず江戸には猶更ら立寄る影もない無念さ心外さ、なるほど口惜しまぎれの生命一個を抛け出して、おのれやれと妾を覘つたも無理は御坐いませんよ、しかし編笠紙衣の末と小唄に諳ふ通りの尾羽うち枯した身で、賤しくつても大名の姫様に比べられる傾城の全盛には逆も再び近寄る事も出来ませんから、いよく怨恨の執念が重つて野倒死する覺悟で妾を付け覘つたものか、仲の町の櫻の道中があつた時、けふを晴れと粧つて第三番目に練り出した妾が、傾城道中の脇目と禿の時から禁じられて居ながら、蟲が知らせたもので御坐いますか、ふと何心なく見れば見物の人込に押されて一所懸命に妾を打守る男が貴方、その人ですよ、どろく／＼に垢染んだ拾一枚

を骨と皮になつた餓鬼のやうな身に纏うて、火口を集めたかと思はれる頭髮に口髻ほうほうと生して窪んだ眼の口惜し涙が物凄く光つた時の驚愕、はつと思はず身震ひして八文字の足取が躓くや否、おのれ白露と叫んで飛び掛られた拍子に妾も絶體絶命、著飾つた袖を力に任して振り拂ひましたが、可哀さうに素人の小袖と違つて厚板のやうな金銀の縫模様、氣は上ずつて加之も弱り果てた手先の力ですから摺み外して横に倒れた上を、警固に付いて居た廓の消防夫や妾の男衆や見物の彌次馬に貴方、折重つて打たれる叩かれる引き摺られる踏み躪られる、黒山のやうな人中に只、ひい／＼といふ悲鳴ばかり聞えましたが、後で委しう見たものゝいひますには、もはや捨て、置いても野倒死するに間がないほど弱つて居たところを、大勢の力拳で勢ひに任せて遣られたから堪らない、あのまゝ袋叩きに踏み殺されて仕舞つたとの事、しかし蟲の息の引き取るまで、さも無念らしう妾の名をいうて、おのれ

白露々々と、流石それを聞てからは寢覺が悪くツて、をりく枕頭へ來る夢を見るやうになりましたが妾の身の落目で、誰いふとなく死靈が取ツついてるの、いや怨恨の一念で夜中に客が魘されるのと、妙な風聞が立ツてからは猶更、ぼつたりと寂れて仕舞ひまして、きのふの全盛は今日の涙、弱り身に祟り目の世諺で、多年の無理酒や何や斯や一時に出て果は重い病氣となりましたが、さて罪の報いですか傾城の落目は客の落日よりも酷いものでね貴方、竟には破れ三味線を抱へて人の軒に立つやうな境涯まで』『む、なるほど、古三味線を抱へて人の軒へ、立つやうになつたかい、む、道理だね、しかし、それほどの凄い事をした報いでそれくらゐの落魄は、まだノ、運の強い方だけ、世の中には一人の男に貞女を立て抜いて多年一日の樂な日も得せず、苦勞さんぐの果、その境涯に落ちて泣く女さへあるからねエ婆さん、しかも今かうして老の末の奉公とはいひながら、まづ氣樂な主人を持つて無事に暮せるのは、よほど好運の性質だせ』『いえ貴方、妾も、さう思ツて、よくまア生命無事に今日までと有難く存じて居りますよ、しかしまた、妾が五年の間、門附の三味を弾いて喰ふものも喰はずに溜めたお金で、いちく二十餘人の名は彫刻みませんが一個の石碑を立て、以來、すツかり發起いたしましたしてね、今でも朝夕、その人達の回向を忘ツた事は御坐いませんが、若い時分の事を思ひ出しますと、この額に角の生えなかつたのが不思議なくらゐる、我ながら怖しく身の毛が彌立ちますよ』『さうだらう、しかし人間は心の作用たゞ一事で、生れながらの善人より悪人から悟ツた後の善人が却ツて尊いのだ、なアに婆さん、少しも恥ぢて隠すに足らない、誰にでも對ツて打明ける方が宜いよ、懺悔談話は寧ろ其人の最後に於ける光明だから』『ホ、、、、、しかし貴方、まさか自慢談話にもなりませんもの』『ハ、、、、そりやアさうだね、乃公のやうな奴が聞いてこそ、始めて面白くも思ひ趣味も深く感じて一種の益と

興とあるが、さて倉橋の如き眞面目な男には無川の談だ、入らざるこつた、しかし婆さん、若い時分の腕の凄さと悪度胸の据つたところが思ひやられるね、また全盛の色香も見たかつたね、第一に白露といふ名が宜いよ、その時には玉かと疑はれる意にも叶つて、今はまた老の身の成る果を草の葉末に宿るといふ運命にも叶つて、殆ど名詮自稱とも謂つてつべしだ、ハハハハ、いや思つたよりは案外の個條女で、實は聊か驚いたよ、たゞの年寄つた婆さんではあるまいと睨んだが、まさか其處までの海山を越えて來たとは知らなかつた、何だか臺所で飯を炊かすのが惜しいやうだね、まだ嘴の黄色い乃公ななか、大きな聲で婆ア〜と呼ンぢやア濟まない心地がするよ、ハハハハ、これからは白露の刀自とでも呼ばうね、むかし思へば日本一の大廓に名を得た全盛の餘波、その傾城の身の果に飯を炊かして、人もあらうに倉橋のやうな物固い眞面目な謹直の男が喰ふたア殆ど奇だ、ハハハハ、人の流れといふもな

ア何處に落ち合つて何をするか知れないねエ婆さん』『全くで御坐いますよ、妾だつて、この老年まで無事に生きて貴方がたの御世話になるとは夢にも存じません事、をり〜寐ながら考へますと萬事が思ひの外の事ばかりで、思つた通りには逆も運はないやうで御坐います、全盛の時分は大名でも長者でも氣に入らねば横に向いて濟ますぐらの勢ひに引き代へ、そろ〜落目になつて來た時は荷ひ賣の小商人でも身を寄せて方付きたいと思ひながら儲の相手もなく、古三味線を抱へて人の門に立つた時は猶更、この年になりました誰一人の身寄りもなく、慶庵口にかゝつても老の身の末、逆も人間並の終焉は取れまい、なるほど取れない理窟の我身と覺悟すれば、また貴方、思ひも寄らず斯やうに氣樂な結構の御主人を持ちましてね』『いや、そこが浮世で、人生の面白いところだ、こいつを杓子定規に當てられて堪るもんかね、分らないので持つた世の中さ、ハハハハ、時に婆さん、晝飯の用意は宜いかな、

もう倉橋が歸つて來るぜ、あんまり談話に興が乗って、しかし面白かった、實に近來の快だ、また時機があつたら猶その外の事を委しく聞かしてくれ』ホ、、、妾も、つい思はず談話に身が入りまして、全體かやうな事は二十年來、何人にも打明けて申した事は御坐いませんに、どういふ調子か今日は、しかし旦那様には貴方、くれぐれも御内分で、過ぎ去つた昔の夢で御坐いますなら構はないやうなもの、物固い御性分、もし御氣分でも悪く遊ばしては第一この婆が』大丈夫、あの通り毎日々々倉橋に權突を喰ふ餘舌だが、言つて宜い事と悪い事は知つてる男だから安心すべしだ、ハ、、、』さやうで御坐いませうとも始めて貴方が當家へお越しになつた時、旦那様が妾を呼んで、念の爲に置いて置くかと仰しやいました事』

『む、倉橋が何と言つた、どうせ善くは言ふまい、づうづうしくって横著で油斷のならない奴だから其用意で萬事、そつと當らず觸らず捨て、置け、ぐらゐのところだらう』ホ、、、

まづ其邊の御言葉もあつたやうで御坐いますが、わけて第一に仰しやいましたのは、少し仔細があるから乃公は態と厳しう喧しく吐鳴り付けるが、婆や和女は陰で深切に扱つてやつてくれ、シャツや肌著に氣を付けて垢染みないやう、をりくは乃公の目や耳に入れないで多少の我まゝも通してやつてくれ、實は近來さう苦勞をかけた世話女房に死なれて自分も病氣揚句で、しかも少々遣り損つた矢前だから、頭腦の中が揉めて可哀さうが、ありやア十餘年來の友達で兄弟同様の男だ、絶えず憎まれ口を利くが腹の底に毒がなくって、ぐわらくして居る様だが物の道理の分つたところがあると、貴方、よほど旦那様は貴方の事を御心配して在らつしやいますよ、ですから折々お二人で今にも喧嘩なさるかと思ふほど御議論が起つても、この婆は平氣で別に驚きも何も致しません、却つて貴方の御言葉が呵しくつて、ホ、ホ、しかし、お珍らしい親睦じい事と感心いたして居りますよ、いくら舊い御朋友の間柄



でも、また貴方がたは格別、御氣分が合ッて在らッしやると見えますね』『ハ、、、  
なアに氣分の合ッてるどころか、まるで反對だが、その反對で寧ろ合ッて行くのが不思議  
だ、もし男と女なら切るに切れない腐れ縁とでもいふんだな、しかし倉橋の今の言葉を聞く  
と少しは嬉しい氣がするよ、さう聞いた以上は乃公もまた聊か謹んで、あまり逆らはないや  
うに心掛けなくツちやア濟まないね、よし今日歸ッて來たら世辭の一事も言ッて機嫌を取ッ  
てやらう、ハ、、、』

其二

きのふに引ツいて今日もまた倉橋幸藏が上野の圖書館より其ま、午後は大學講師の博士が  
許へ立廻らむと、わざ／＼握り味噌の焼飯を竹の皮に包んで出で行きしかば、終日の不在に  
猶更ら骨身を伸ばしたる黒田健次、のツそりと臺所へ懐手のま、立現れて、『どうだね白露の

刀自、また今日も昨日の後編として何か奇談のありさうなもんだね、二十餘人と云ッた中で  
やう／＼二人を聞いたばかりだ、あとにまだ面白いのがあるだらう、ハ、、、、『何で御坐  
いますよ、白露だなんて、そんな汚らしい名を、昔は昔、今は今で、きのふの談話も昨日  
ぎりで今日は平に御免を蒙ります』『いや、御道理千萬な理由だ、ぢやア其うち氣の向いた時  
また伺はう、時に今日の晝飯の菜は何だね、きのふ婆やの言葉に、をり／＼乃公の眼や耳に  
入れないで少しの我まは通してやツてくれと頼まれた手前、何か主人公が命令外の手加減  
で御馳走に預りたいもんだねエ、ハ、、、』『ホ、、、すぐ貴方は萬事、さう附け込んで  
我まを仰しやるから困りますよ、今朝、旦那様が御用で外へ往らッしやるんでさへ、お味  
噌で焼いた御飯を竹の皮に包んだま、それに貴方、勿體なう御坐いますよ、婆を苛めて食  
好みなぞ遊ばすと』『恐れ入ッた、食客的分際として猶更ら恐縮だ、ましてこれが尋常の

皺くちや婆なら強請込んでも番菜ちやア喰はないが、全盛を極めた君傾城の身の果がいふん  
 だから、殆ど感心仕って此ま、恐縮々々』『あれ、また仰しやるよ、つまり昔の罪を數へ  
 て貴方、お責めなさるやうなもので御坐いますよ、只今の婆が身に取りましては』『もう言  
 はない、これツきりだ、さて今日の一日を、どうして暮さう、出るに出られず金はなし喰ふ  
 に美味なし語るに談話相手はなし、あはれに心細く淋しいこつたね、久しぶりに何か書物で  
 も讀んでくれうか、ねエ婆さん』『ホ、、、お氣の毒さまで御坐いますことね、しかし黒  
 田さん、實は今朝旦那様がお出かけに一圓紙幣を預って御坐いますよ、乃公の不在に何か魚  
 類でも買って喰はしてやれ、また五六日このまゝで腥いものがないと、膏ッ氣が脱けて骨放  
 れがすると蒼蠅く喧しいからって貴方、全く罰が當りますよ、おろそかに思召しては、いく  
 ら御朋友でも、どこに貴方これほど食客を大事にする方が御坐いますか』『さう婆やまで食

客々々といふない、しかし食客に違ひないから仕方がない、ハ、、、いや今に始めぬ倉橋  
 の芳志、現在その身は焼味噌の握り飯で安閑と遊惰の僕に魚類を喰へたア感涙だ、多謝々々  
 さう聞いては流石の乃公も聊か喰ひ兼ねると、しきりに辭退すべきところだが、ねエ婆さん  
 どうしたもんだらうな』『さやうで御坐いますねエ、同じことなら旦那様と御一所に召上った  
 方が宜しいやうに存じますが』『いよく無効だ、そんな挨拶ちやア困るよ、全體また黒田に  
 喰はしてやれと折角、置いて往った一圓を預りながら、なぜ今まで黙って居たのだ、主人の  
 芳志を無にするやうなもんだ、事情を言はずに買って來れば宜いものを、なまじツか妙に談  
 話をするから不可よ、ハ、、、理窟は儲置いて其うち三十錢だけ頼む』『ホ、、、一圓紙  
 幣は生憎らひさい銀貨か銅貨がなかつたからで、一圓を皆と仰しやつたのでは御坐いませ  
 んよ、それに一人前十五錢か二十錢より上の魚類は買ふ事ならんと豫て承って居りますから』

「む、さうかい、そいぢやア感涙にも及ばなかつた、仕方がない、家憲の最高度、二十錢で何か買ッて来てくれ、鯛があれば小さくツても鯛だ、乃公は背の青い魚類が嫌ひだから、もし何もなけりやア寧ろ鮪の刺身だ、如才はあるまいが田舎羊羹のやうに赤くツて綺麗なばかりが本味でないよ、少し膏ツ氣の交ツたところを願はくば拍子木切といふ奴にね、薄ッぺらで皿の模様透き通るなア眞平だよ、時候から言やア白魚も料理で宜からう、ちと早いが鮎鱈鍋にしようか、いや牛肉なら炒くツてもヒレかロースだ、鶏肉なれば皮付の赤肉で少々雜物を加味して手羽といふところ、雪でも降りやア猪が喰ひたいね」『ホ、、、二十錢で御坐いますよ』『ハ、、、二十錢の程度は固より承知だが、まづ先觸れの威勢を示して腹の蟲を驚かして置くのだ、しかし戯談は措いて何でも宜い、土左衛門の外、海でも川でも水の中から上ツた死骸でさへありやア結構だ、食客的々々々、勿體ない文句をいふべき場合にあ

らず』『全く黒田さん、よくまア貴方の御口は、をりく感心いたしますよ、もし一日の間黙ッて在らしツたら、どんな御心持が致します』『なアに人間それく癖といふものがあつてね、寧ろ五體に自然の作用で、もし學理からいへば譬ひ死んでも、まして寐入ツた時でもどツか動かないぢやアならない理窟に出來てるのさ、つまり虚心平氣で唯一人おのれは身動きもせず坐ッて居る決心でも、現に手足を動かすとか顔の道具を動かすとか身體を微細に揺るとか、そこで乃公のは取分け舌の動く癖があつてね、舌が動けば従うて聲が出る、しかし只、一本調子に聲ばかり出すのも變だから、耳目に觸れて腦に感覺の與へられるかぎり絶えず饒舌るやうになるのさ、ハ、、、饒舌るのも實は運動の一端で、胃腸が達者になツて願る氣持が宜いよ、ハ、、、』

口には無川の駄辯を弄すれども、心には感謝して晝飯の膳に對ひながら、赤貝二十錢の三盃酸に舌鼓を鳴らして後、庭前を散歩して何心なく縁端に腰うちかけつゝ見返れば、窓下に押し据ゑたる机の傍ら、積み重ねし書籍の上に置き忘れしか、「枕頭閑語」と題せる倉橋が一部の草稿あり、

人の草稿を窺み見るは人の祕密を窺ふに等しけれど、互に十餘年來の隔意なき交友、まして今は同じ家に枕を並べて起き臥しの身と、其まゝ手に取つて披けば、平生の口吻は殆どたゞ理これ一片の乾燥無味なる男に似もやらで、四季の風物花卉に思ひを寄せ情を運びたる詩歌俳諧の類ひ多く、しかも韻致風流に富み綺語秀句に自在を極めて文字外また一種の妙味を餘すところ、むしろ其道に耽りて名を得たるものよりは深く、流石の黒田も今更に舌を巻きぬ、

謀反隠居とは全く彼奴のこと、世に對する出處進退のみか、常には殆ど度外に置きて冷笑する詩歌俳句にさへ斯くまでの用意修業ありと、始めて驚きながら猶も其奥を見れば、また別に「一家言」と題せるものあり、たゞ書き流せしまゝ諸處を塗抹して猶いまだ自己の意に満たざるが如きも、なるほど一家の言をなして此家に三年籠居の主意を盡せり、

一家言

○人は黄金を拜して積まむと欲し、我は黄金を卑しんで集めむと欲す、尊きがために拜して積むものと、卑しきがために唾して集むるものと、いづれか其要を得たる、拜するものは足るを知らずして竟に其奴隷となるの恐れあり、卑しむ我は卑しき黄金のために人生行路の恥辱を蒙らざらむとするのみ、

○書は讀むべし耽るべからず、食は身を養ふべし胃は飽くべからず、敵は避くべし遁ぐべ

からず、友は力めて愛すべし必ず頼るべからず、人は敬すべし信すべからず、情は致すべし迎ふべからず、衣は著るべし飾るべからず、家は住むべし誇るべからず、言は用るべし設くべからず、死は恐るべし悲しむべからず、心は常に平かなるべし時に傾くべからず、利は取るべし追ふべからず、事は明かにすべし争ふべからず、

○十年の苦學、六年の社會、三年の修養、なほ餘すところの三年を以て更に社會に試み、年四十にして始めて我みづから我を知らむとす、

○三年籠居の間は有形的に社會と斷ち無形的に社會と接す、現實に利害得失の數を脱却し意志に窮達消長の機を研究す、また身體の健康を以て天の賜物とし有用の讀書を以て人為の幸福とす、慰撫は健康より得て快樂は讀書より得、書を讀んで後は力めて運動し、運動して後に飽くまで勞れ、勞れて後に能く睡る、睡る時は死せるが如くなるべし、半

夜半睡の妄想を以て其日に於ける我薄志弱行の罪とす、

なほ此他に三年籠居の我みづから我を警めて一家の言をなせるものより日々の米鹽に關するまで、凡そ二十五の條目を設けし用意周到、さすがの黒田も今更ら感に堪へて我を忘れつゝ、讀み行きしが、其まゝの白紙數葉を隔てし最後の紙末、別に一個の文ありて、「某女に與ふ」と題しぬ、

いづれも書き流しの草稿ながら、いたづらに無用の文を作る閑人ならねば、苟も倉橋幸藏として某女に與ふの一文は殆ど生涯の珍事、さては彼嬢にかと思はず眼を敬て、讀み下せば、文よりも意を専らし意よりも情を専らとして其間に自己の品格と所信とを失はざるところ、むしろ風流罪科の文士が意中の人に對うて情緒纏綿の艶語を弄するよりも巧みに細かに華實を並び得たる體、いはゞ浮世破りともいふべき黒田健次も十餘年來交友の腸を抉られて、い

よく其案外に驚きぬ、

某女に與ふ

某女に與ふとは實際その女に與へしものならず、與ふるところは我おもふところにして、形なき此一片の文は形なき我心の言語なり、時に取りての所信なり  
 觀念の一部なり、認し置きて他日懷舊の一に備ふるのみ、あなかしこ、この文  
 や人に知らるゝ勿れ、たとひ反故となりて屑屋の籠に投ぜらるゝとも引き出さ  
 れて世に現るゝ勿れ、また夢にも某女が深窓に入りて夜半の枕頭に通ふ勿れ、  
 固より仔細らしき仔細ありての業にもあらず、別に事々しき心ありての境涯にもあらず  
 また風流を解して閑日月を娛しむ今の身にもあらず、たゞ同じ途を行くにも短き脚は長  
 き脚よりも忙しかるべき我、生れて智に疎く才に乏しき我は人よりも深く學びて多く力

むべきの理由ありて、かく遺憾なき世に反し讀書の意を、此ごろの朝夕に訪るゝもの  
 は軒端を渡る木枯と庭前の枯草に絶えくゝなる蟲の音とのみ思ひしに、思ひきや玉の臺  
 に養はれて隙間も風さへ厭ふべき君が姿の屢々こゝに訪ひ給はむとは、元來の野生に  
 育ちて溫柔の肌なき我形は動かされど、多年の貧苦に處して嬋娟の習なき我心の俄に驚  
 かさるゝを奈何せむ、馴れぬ道芝の露にや濡れ給はむ霜にや犯され給はむかと、  
 されば三年こゝに閉ぢたる我柴折戸は鐵の扉ならねど、惡魔の力にさへ容易くは破られ  
 まじき今の我覺悟として音もなく吹き送る君が情の匂ひを防ぎ得ざるは何の爲ぞ、もし  
 これを戀といはゞ三年こゝに戀や來る勿れ、

今の我は形の平かなるよりも境の靜なるを願ひ、境の靜なるよりも心の穩かなるを願  
 うて、たゞ一意、斯の如きの一書生、かの綽々たる餘裕あるべき丈夫兒ならねば、かく

まで脆く弱く感じ易き我心を憫れみて三年讀書の我愚を守らせ給ふは却つて君が情といふべし、

戀は神聖にして人の生命といへど、今の我は其戀の來るを恐る、戀は生命の露にして人の誠實といへど、今の我は其戀の來るを厭ふ、恐るゝは避くるの意にあらず只これを迎ふべき境涯にあらざるを奈何せむ、厭ふは忌むの心にあらずして只これを遂ぐるの途なきを奈何せむ、年齢三十五にして妻なきの我、なほこゝに戀を恐れ戀を厭うて世間萬人の羨むべき君が情に反かむとするものは何の爲ぞ、願はくば我をして三年無情の人たらしめよ、三年無言の人たらしめよ、

三年にして門を出づるの日、もしなほ君が心に我を思ふ一點に餘蘊あらしめば、我この戀を荷ひつゝ却つて君を襲ふやも知るべからず、もし君が心に我を忘れて一縷の情緒な

からしめば我この戀を荷ひつゝ却つて君を恨むやも知るべからず、されど君は三年この戀に弄ばれて三年の色香をへふ勿れ、夢にも我ために三年の他日を待ちて三年の春秋を空しうする勿れ、戀を遂げざる間は其戀のいつれに行くも清く、戀を果さざる間は其戀の何人に落つるも潔し、たゞ君がために其戀の清く潔きのみを思つて三年の後に我戀の影なき遺憾を思はざるなり、乞ふ君この我をもて徒らに無情の人となす勿れ、たゞ三年こゝに無情の人たらしめよ、

我みづから甘んぜざる今の身として君の情を迎ふれば、只これ君が情の露を一時の快に取るもの、却つて長く君が情に反く我たらむ、もし三年の後この門を出で、君が情を迎ふれば、たとひ綠葉蔭をなして子は枝に滿つるの恨ありとも、正に君が清き情の露に生涯を伴はむとせし我泣いて君の幸福を喜ばむ、羨んで君の舊情を謝せむ、あゝ戀や君

を導いて他に嫁くの早きか我を誘うて君を追ふの早きか、さもあらばあれ、戀や君をし  
て一時も無情の人たらしむる勿れ、たゞ我をして三年こゝに無情の人たらしめよ、

夜更け人定まりて時雨の音が木枯の音が頻りに我書窓を叩くの時、また燈火の

影に何物か来りて我を窺ふが如く襲ふが如く思はるゝの時、世に反き人と斷ち

て茲に三年籠居の無情漢しるす、

たとひ聖賢の書にても漫然讀過の黒田健次が何とか思ひけむ、目を敬てつゝ幾度も讀み返し  
て後、月夜ならぬ白晝に自己が鍋釜を引き抜かれたる心地しながら、うそが事するとは眞實の  
世諺、無口者の油斷大敵とは此事、あの隠居奴、女が運ぶ情の露も膝上におほるゝ味噌汁の  
露も同じ男と思ひの外、さて、一面にも氣にも似合はぬ味な心を持つた奴かな、しかも只こ  
の草稿に止めたるのみにて夢にも某女の枕頭に通ふ勿れとは、いよく心憎き文句、戀に慌

て、初心めいたる野暮でない證據、されど與ふるところは我思ふところとして、いつまで此  
まゝの人しれぬ草稿に葬り得べきか但しは彼嬢が襲ひ来る色香の深淺に依つて此草稿を書き  
直しつゝ送るの時あるか、こゝ暫時の後が土依際の劔が峯、あの倉橋が戀の剛敵と組んでの  
勝負こそ面白けれ、理窟と實地の間一髪は一入の見物ぞと、満面の笑を含みながら猶その奥  
を見れば、また一枚の白紙を隔て、「黒田健次」と題せる一文あり、さア事ぢや、そも、  
乃公を何とか見る、彼奴が平生の我に對する口と心が一致するやせざるや、この一文の取捨  
に依つては我また進退を決すべきの時節到來、十餘年の交友とはいへ萬事の耳目口舌、むッ  
つりとして押せば鳴り叩けば響くべき急所の分らぬ男、いづれ益友とも師父に等しき朋輩と  
も吐すまいが、また其間に多少の我本領を知るところあらむかと、道踏み迷うて飼主なき病  
犬に脚下を嗅がらるゝ心地しながら、薄氣味わるく讀み下せば、



黒田健次

過去に於ける黒田健次は知らず、將來に於ける黒田健次は知らず、唯こゝに我  
籠居の一飯を分ちて養へる黒田健次その人の現在に於ける性行を見るのみ、世  
俗これを單に食客的といへど、我なほこれに多少の禮を失はずして十餘年來の

親友とし、たのむ木下に雨の霽るゝを待つものとす、

大喝一聲、眼を怒らし身を躍らしつゝ、長刀を振うて勢ひ猛に斬り下すも、その刀痕の長  
く曳けるのみにて深く致命の傷をなさざるものあり、また柔佞喃々、猫の馴るゝが如く  
親しみつゝ、竊に細き針を以て肺肝を刺すものは、その残忍深酷なる瘡口は小にして出血  
少く耳目を驚かさざれど竟に殺し了りて再び起つ能はざらしむ、もし黒田健次に罪を犯  
す事ありとせば其いづれに屬すべきか、我は斷じていふ、刀を以て長く斫るの人にして

針を以て深く刺すの人にあらざるべしと、彼は咎むべし憎むべからず、彼は吐すべし退  
くべからず、彼は厭ふべし忌むべからず、彼は愛すべし親しむべからず、憎めば反し、  
退くれば襲ひ、忌めば仇し、親しめば弄せむとす、とかく言を設けていへば頗る難物に  
して始末に終へぬ厄介ものなり、もし強ひて譽むれば安價時計の器械に似たる男なり、  
手を觸るれば急ち狂うて止む、

その頭腦散漫にして行爲の不節調なるところ自然に無頓著となり鐵面皮となりて、時に  
常識を失ひ禮義を紊り、しかも多年の貧苦と失敗とは愈々その資性の大胆を増して前後  
の無差別なるところ自然に物を輕んじ事を輕んじ人を輕んずるが如きも、いまだ謀りて  
他を谿谷の底に陥れつゝ岸上より冷罵するの惡魔にあらず、否、寧ろ人を陥れむとすれ  
ば自己また俱に墜落するの不用意にして無意識なる滑稽を演ずべし、彼の罪は意思と行

爲と結果とに構成せられたる重罪にあらす輕罪にあらすして時と場合に生ずべき違警罪の最も大なるものなり、されどまた一度その輕罪を犯して終身を悔悟するものにあらずして、日々夜々その違警罪を犯して更に改悔の状なきに至つては頗る手数すこぶての面倒なる男といふべし、

たゞ恐る、法理に於ける時効よりも眼前の事すら忘れ易き性を備へたる世人が、數年獄裡に投ぜられし前科犯を知らずして却つて朝夕その警察署に曳かるゝを知るがため、彼は彼を知るものゝ前に罪淺けれど、彼を知らざるものゝ前に罪深き男たらむ事を、その才幹は學識の數倍にして其學識は其性行の十分一にも價する能はず、もし彼に一點の用意と節調あらしめば、正に當世俊秀の人物たるべきも、惜しいかな彼は野原の風の如く首尾なくして音高く吹き荒み、谷間の水の如く秩序なくして騒がしく亂れ流る、

罵言と嘲弄と冷笑とは彼に於て平常の言語なり、横著と駄辯と惡戯とは彼に於て平常の行爲なり、懶怠と散漫と無禮とは彼に於て元來の資性なり、されど彼は善惡ともに應報の來るを驚くものにあらずして、その言語と行爲と資性とに依つて得たる世の嫌忌怨恨は彼また甘んじて受くるの大膽を有す、否、有するのみならず時に或は自ら迎へて快とするの奇癖あり、かくの奇癖たゞ其人の奇癖に限られて他に及ぼさざれば事なけれど、もしこれを大にすれば、天下この流の厄介物を持て餘して常に社會の秩序を紛亂す、もし彼をして戰國か舊幕の時代にあらしめば必ず世に拗ねたる深編笠の浪人として、今の講談か浪花節の一端に唄はるべきものなるべし、

されど耳目の小面憎くして舌端に毒を含めるところ寧ろ其才幹の迸り出づるを見る、をりく別人の如く自己が性を柱けて沈思默考するところ多少その本領を窺ふに足る、彼

が才幹とは何ぞ、彼みづから事を設け身を苦しめて加之も其事に驚かず其苦と戦ふの勇氣をいふなり、彼が本領とは何ぞ、いやしくも五體のうちに一縷の命脈あるかぎりは丸裸として鬼畜の間に投ずるも彼また能く這ひ脱れて死せざるの技倆をいふなり、彼は檻に捕はれたる猛獸の如く、餌に飽けば益々荒れ、飽かざれば愈々吼ゆ、その厄介物たる所以なり、彼は粗大なる南瓜の如く、危けれど蔓にあれば落ちず、落つれば美味ならねど膳に上る、まんざら捨てたものにもあらざる所以なり、これを憎まむ乎、これを愛せむ乎、あまり憎まば憎むもの、爲ならずして憎まる、彼がためにもならず、あまり愛すれば愛するもの、爲ならずして愛せらる、彼がためにもならず、あゝ厄介物々々々、この厄介なる無用のお荷物を奈何せむ、追はむか追ひ出さるべき奴ならず、引き止めむか止るべき奴ならず、あゝ難物々々、この無用の難物を奈何

せむ、何物か我心に答へていふ、彼は彼が知られざる世人の前に一日も多く嫌はれ深く怨まるゝより、彼は彼が知らるゝ汝の前に一日も多く救はれ深く迎へらるゝの幸福なるに如かずと、是に於て三年籠居の我米鹽を此厄介物に預つべきの意を決せり、もし其間に此南瓜野郎みづから蔓を辭して去らば去らむのみ、

腕力に訴ふの外これを退くべき手段なくして、我惜寸の讀書を彼が喋々たる饒舌に攪亂せらるゝこと凡そ二間時餘の後、あきれて筆をとる、

さすがの黒田健次も一讀再讀、さらに三讀の後、ぐるゝと眼球を廻轉して自己が額を軽く叩きながら、やア畜生々々、痛いところを押へをツたぞ、そもく我を評するに苟も善美を標準とせずして萬事を罪惡の點より割り出したる論鋒、それもよし、もしこれを大にして舊幕時代に置かば講釋師の飯喰ひ種となつて張扇子に叩かるゝか浪花節に唄はるべき男とは、

畜生々々、あの隠居め、やうく譽めたところで野生の南瓜に比し、まんざら捨てたものにもあらざる所以とは、なさけないかな、されど最後の一節、何物か我心に應へていふところは正に友を思つて念々さらに忘れざる一掬の涙あり、この厄介なる無用の難物と連呼するは寧ろ飽くまで我を捨てざるの眞意、たとひ赤裸にして鬼畜の間に投ずるも死せざるの技倆を知るは我本領を疑はざるの言、あきれて筆を採るとは手も付けられざる言語道斷の奴と叫ぶに似たれど、その呆れて手も付けられざる言語道斷の奴に三年籠居の米鹽を頒つべきの意を決せりとは嬉しいかな、なか／＼この南瓜野郎は急に君の蔓を辭して去らざるべしと自己また意を決しぬ、

其四

日和下駄からころと踏み鳴らし竹の皮の焼飯に腹を肥しつゝ、上野の圖書館より大學講師の

博士が許を訪うて、終日の脳裡に寸隙なく流石に勞れたる身も、歸れば浮世を隔てし山家に似たる落葉寂寞の境、また今更の心地して倉橋幸藏おもはず笑を含みながら、眼前巨萬の利を掴み損ねて眉を擧めつゝ、金殿玉樓に歸る俗物が知らざるところ、彼は今夜の金屏風に圍まれ絹衣具に包まれて夢おどろき易く、我は今夜の窓うつ木枯に誘はれ木綿衣具に包まれて安く眠る、

をりしも其日の暮近く夕飯の膳に對うて箸とりながら、前に坐せる黒川を額越しに睨んで婆を見返りつゝ、『婆や今日は一日、乃公が居なかつたから嘸や嘸、迷惑したらうね、鼻息が荒くツて』『いえ貴方、今日は大變、おとなしくツて眞面目に在らツしやいましたよ、午後は猶更、しきりに御本ばかり讀んで在らしつたやうに見受けましたから、ホ、ハ、ハ、ハ』『む、乃公の不在に眞面目で本を讀んで居た、そいつア近來の珍事だ、殆ど其人にあるべからざる



ながら、机に對うて頻りに讀書の壁一重を隔てし隣室には、さのみ腹痛でない證據、もはや音なく睡りて夢にや入りけむと思ふ折しも何やらむ俄に呻るが如き聲しぬ、

さては全くの腹痛、しかも上の部に達せしかと耳を敏つれば、その呻る聲の次第に長く高く高くなりゆきぬ、

あれほどの横著漢も失敗の餘り今は我ために衣食する身を思へばこそ、無遠慮のうちにも何となく遠慮の氣味ありて、かくまでの腹痛を醫藥に及ばぬ中の部と戯れし心のうち、どこやらに物の哀れを呑みて嘔や淋しく、すぎし妻をも斯る時こそ一入さらに戀しかるらむ、たゞの男が悲鳴よりも却つて無殘なれ、せめては届くだけの介抱して取らせむと、おもはず坐を起てば、呻りし聲の次第に絶ゆると等しく、俄に小川の蛙を踏み潰せしが如き大聲を發して叫び出しぬ、『御入來なる上様方へ、申し上げます表題の儀は、花も心も開けゆく世の男一疋

明治年間に黒田健次として、外貌の割には氣の善い豪傑、いざやこれより其一代記をば』唄ふは正しく浪花節なりける、

さすがの倉橋幸藏、あつと呆れて其まゝ机の前に身を抛ぐるが如く居直りながら、いやはや論にも齒にもかゝらぬ狂氣奴、これが三十の上を越して苟も文字あるもの、仕業かと、腹が立つやら呵しいやら、半は怒り半は笑うて猶も耳を敏つれば、ばちくと指もて木枕の横を叩く音もろとも、『さて演じまするは、例の黒田健次殿一代記のうち、昨夜の讀み續き、いよ／＼浮世の戰場を遁れて落武者と相成つたる悲しさは、心にもない根岸の奥の去るところに食客的となられまして、かほどの豪傑も時と場合には致方の御坐いませんものか、あはれ御姿も窶々しく、すぎし昔を夢と御覽遊ばされ』これはまた取も直さず張扇子の講釋師なりける、

十餘年來の交友、固より調子の狂ひし奴とは知りながら、かほどまでの奴とは今の今まで、もはや棄て置くべき場合にあらすと思ひしが、ふと心に浮びしは我草稿の一文、あのまゝ彼奴を大にしたところが浪花節か講釋師の張扇子に叩かるべき男と論ぜしを、今日の不在中に引き摺り出して見たるがための面當か、さては某女に與ふ一文をも讀みしに相違なし、南無三寶、たゞさへ事を持ち上げて喜ぶほどの厄介物、無用の騒ぎを面白がって益々調子の狂ひ出す此いたづらものに、あの草稿を見られたるは不覺の上の不覺ぞと、また靜に坐を起ちつづ寔音を忍ばせて障子の隙間より差覗けば、どこが頭やら足やら分らざりし龜の子が蒲團の上に取り直ッて、小首を傾け耳を欬てつゝ壁を隔てし我舉動を窺ふ體、空家に取殘されたる狎の如し。

『こら黒田、貴様、けしからん奴だぞ、不在中に僕の草稿を引き摺り出して見たな、殆ど人の祕密を發いて信書を破ると一般の罪、ましてあの呻り聲は何だ、宜い年を仕つたものが今にも咽喉を絞め殺されさうな馬鹿聲で、第一どこに腹が痛いんだ』『ハ、、、失敬々々、しかし腹痛は全くの虚偽でないよ、少しは其形跡のあつたことで』『いや、君のいふことは一切虚偽だ、たとひ虚偽でないにしろ僕は斷じて虚偽にするから將來その決心で居るが宜い、いくら何でも飯が喰へないで世の中に彷徨く奴は無効だ、食客的め、あまり悪戯をすると思き出すぞ、いつまで蔓に付けて置かないぞ南瓜め』『や、君にして聊か其言の人品に關するを恐る』『餘計な恐れだ、黙ッて寢ろ』『寢ろ、寢るがね君、僕が大成したところで講釋師と浪花節の一端に名を止むるのみは少々酷かつたね、もし強ひて譽むれば安價時計の器械に似たる男なり、觸れば忽ち狂うて止むの一段、いよく手厳しかつたね、まんざら捨てたものでもない所以に至ッては頗る心細かつたよ、ハ、、、』『ハ、、、、でろれんの浪花節に唄





なら君、まだ適切にして其言よりも面白い實例がある、かの蜂は倒まに家を作つて棲んでるよ、ハ、ハ、ハ、某女に與ふの一文は所謂歌人の戀歌を詠すると一般、そもく何の不思議かある、當分まづ餘計な人の事で氣を揉まずに自分が願ばない脚下の用心專一だ、靜に寢て能く考へろ、白癡の圖に乗つて其上うか／＼這ひ出すと今夜こそ、きかないぞ、ろくでもない胸間聲を發して二度と再び浪花節を唄つて見ろ、頭上から冷水をぶツかけてやるから、のほせ上つた狂氣の治るやうに』いひつゝ、登音あらく立去りしが、臺所より手桶の水を提げ來りて隔の罅際に置きながら、また机に對うて讀書の體を、ちらと見て流石の饒舌家も其まゝの無言、たゞ口の中にて何をか呟く時、飯炊の婆が聲として『あの旦那様、この手桶お一個で宜しう御坐いますか、もし足りませねば、また別なものに汲み込んで置きますから、ホ、ホ、』『ハ、ハ、ハ、よく氣が付いたね、なか／＼婆やも脱落がない、こゝらが平生の復仇だ

からなア、しかし其手桶一個で宜からう、あんまり浴せ過ぎて凍え死でもすると死骸が面倒だから』『いえ貴方、宜い加減に冷え切つたところで、鐵瓶の湯を注して温湯になつたのを一浴び、おかけなさいますと、また直に蘇生りますから大丈夫で御坐いますよ、ホ、ホ、黒田さん御免遊ばせよ、悪く思つて申し上げるんでは御坐いません、眞實お爲を存じて心配いたしますので』きくや否、黒田は夜具の中より鎌首ぬツと立て、舌鼓もろとも、『畜生うぬが知つた事かい糞婆め、覺えて居れ、しかし食客的にはなりたくないねエ、澤庵の古漬に等しくはしたなき老婢の口の端に弄ばれ、水甕の底に沈んだ飯粒に等しく、たゞ下目に覗き込まれて哀れや浮ぶ瀬もなしかね、ハ、ハ、ハ、おい倉橋、もう寢るよ、謹んで寢るから安心してくれ、こら婆、退れ、退れといふに、退らないか、いつまで其處に居られちやア怖くツて寢られない、もしや昔の若氣でも出して這ひ込まれるかと、ハ、ハ、ハ、』

其五

苦蒸したる萱葺屋根の下にも、魏々たる洋館の下にも、交通機關の便に遲速なければ、富を生命とする商賈もしくは其他の必要あらざるかぎり、殊更に苦しんで四通八達の巷に住むものと、悠々自適して落葉寂寥の境に住むものと、身に於ける利害得失、心に於ける消長窮達、これを打算して差引勘定の損益は果して如何、

今しも投げ込みし一枚の端書を手に取り上げて見れば、大學院の五六輩と他よりの三四輩と今日の日曜を幸ひ一場の討論會を催すべきよしにて例の博士が我をも招くの文面、宛ら自得の劍客が他流試合に臨むが如き心地して、倉橋幸藏おもはず笑を含みながら、やう／＼起き出でたる黒田が前に其端書を投げ遣りつゝ、「おいどうだ、今日は君、こんな面白い事出掛けるんだが、三寸不爛の舌鋒は公の常に誇るところ、なか／＼得難い戦場だぜ、ゆかないか

行いて大に論争喝破してやれ、風雲を叱咤するの勢ひで口角に泡を飛ばして氣焰萬丈、實に逸すべからざるの好機會、敵手に取って面白い奴等だ、平生の饒舌家は此處だよ、ハ、ハ、ハ、」幸ひ前夜その頭上に手桶の難を免れて、いつよりも今朝は早く引き起されたる黒田健次、まだ朦朧として睡た氣の眼に不平の顔色、しぶ／＼ながら端書を取り上げて、香爐獅子に似たる鼻息ふんと笑ひぬ、「學問は居家處世の方便に供すべきものだ、さるを御苦勞千萬にも可憐ら生涯を只これ文字の犠牲に奉るの徒、いたづらに道踏み迷って屁理窟を放り合ふの輩、其奴等が殊勝氣に寄り集って折角の場所へ、わざ／＼僕が出掛けて一棒を喰はすにも及ぶまい、しかし悪い事ぢやアないから君は行くが宜い、まづ僕ア差控へよう、人を驚かすは士君子の爲さざるところだ」「ハ、ハ、ハ、いや御道理な理由だ、あんまり君のやうな士君子が差出る場席でないからねエ、ぢやア不安心ながら、また留守番を頼まう、しかし例の書齋荒しは眞半だ

ぜ、鼠さへ君、常に餌を呉れてやれば悪戯をしないといふに、まして人間の食客的」置いて合はず居て合はずの世諺、どうせ睦じい新夫婦のやうにゆく理由がないから、さう君いち／＼小言をいふない、置くほどの奴は置かれるやうな奴より辛抱が強くツて度量が廣くなくツちやア治らない理窟だもの、まして主客の勢ひ既に異なれりだ、さるを君、なほ解せずして強ひて僕を追ひ出さむとするなら遠慮なく追ひ出し給へ、僕また別に心算ありさ、所謂某女なるものに事情を打明して食客的の鞍替をするから、ハ、ハ、ハ、ハ、たゞ單に讀んで字の如き米鹽を頒たるゝのみで事々物々うるさい小言を聞くより、苟も大臣の令嬢に養はれて戀の幃幄に參じつゝ君を攻め立つるの快なるに如かずだ、おい色男、どうだ」「ばゞ馬鹿」

倉橋が立出で、より凡そ一時間ばかりの後、誰やら玄關へ訪ひ來りしを臺所の婆が迎へて何

をかいふ體、をりしも黒田は只一人の無聊に堪へ兼ねたるまゝ、そつと差覗けば此冬枯の寂寥たる破れ廂の下に色香も深き花一輪、かの令嬢綾子が小腰を屈めつゝ、微笑を含みぬ、しかも婆は主の意を心得顔に氣の毒けの額を寄せつゝ、生憎主人は不在で御坐います、また歸宅のほどは夜に入ります筈とて、あはれ此まゝ敬して遠ざけ言葉巧みに追ひ歸さむとする體、黒田みるより眼を圓くして其場に立現れつゝ、慇懃に會釋しながら、「やア、これは入らツしやいまし、おい婆サン、折角お越しになつたものを、倉橋が居らないからツて乃公が居るぢやアないか、さア貴嬢どうか此方へ、番茶でも召上ツて暫時、其うち歸ツて來ませうから」

『だツて黒田さん、今朝お出掛けに今日は夕方になると仰しやいましたよ、あまりお待ちせ申し上げては却ツて失禮かと存じまして』『なアに乃公には午前中に歸ると言ツたよ、よし夕方になるとしたところが、まアお通し申して、お茶でも上げないぢやア、どうか貴嬢、おい

婆さん早く墓所へ往つて湯でも沸かせよ、其間この乃公が御相手するから、さア貴嬢、ちよ  
ツ今日に限つて倉橋奴また、のこく何處へ出たんだらう」

浮世に馴れて育ちし蓮葉ならねど、去歳の十九までは當世流の學校育ち、しかも大臣の令嬢  
として二十歳の今は交際場裡の花と持て囃されつゝ、この夜會かしの園遊會にも招かる  
る身なれば、面映氣に袖屏風の古風なる體もなく、女大學さては今川流に縛られて立往生の  
風情もなく、まして麴町の金殿玉樓より根岸の奥深き此草叢に訪ひ來るほどの心には、黒田  
の言葉を渡りに舟と嬉しく、たとひ其人の姿なくとも運びて通ふ我おもひの届けかし、結局  
その人の在さぬは情の露の置きどころ、歸りて後に残る色香や知り給はむと、しづかに會釋  
して其まゝ打通りぬ、

何事をも例の横著心に弄ぶが如き黒田ながら、これのみは眞實その心に倉橋が行末を思ひ、

また綾子が人しれず忍ぶ情の胸裡をも察し、つまりは互の身のためと、幸ひ無事に苦しむ食  
客的の一仕事、なほ何處やらに例の面白半分といふ氣はあれど、あれほどの我妻を苦勞の果  
に死なしたる心の申譯、せめては自己こゝに月下氷人となつて榮えゆく此戀を本物に仕立上  
けむとの心底、まづは殊勝と獨り笑を含みぬ、

倉橋が書齋を常坐の客室として、庭前に對へる縁端の障子を明け放ちつゝ、取散らしたる書  
籍を俄に押片付け、机の前に坐蒲團を裏返して懇懇に進めながら、少しく坐を下り更めて一  
禮せし體、いかにも平生の調子に變りて呵しく、もし知る人に見せしむれば思はず吹き出す  
べし、

「先達といひ今日といひ、遠路わざわざ折角の來臨に生憎、ちよいと前日に御一報下さいま  
すれば宜しいに、倉橋が歸りましたら嘸、遺憾に存じませう、しかし午前中には十中の八九

戻る筈で御坐いますから、まア貴嬢、ゆる／＼在らっしゃい、立派な御住邸から時に田舎めいた茅屋の半日ぐらゐは却って御保養の一端になりますよ、ハ、ハ、ハ、ハ、『いえ先日、貴方の御目にかゝって居りますから、倉橋さんが在らっしゃらなくとも、しかし、いつ伺つても宜しう御坐いますね御閑静で、なるほど人が根岸と申します筈、麴町邊の騒がしいところと違つて、何だか氣が清々いたしますよ』『さう御賞讀に預つては御挨拶に困りますが、閑静は閑静です、倉橋が今の境涯を守つて自己の所信を實行するには至極適當の場處です、否、適當といふより寧ろ已むを得ざる場處といふ方が當然かも知れませんがね、ハ、ハ、ハ、ハ、拙者も實は死に損つた大病の後で、まづ暫時は養生かた／＼』『おや、さやうで御坐いますか、少しも御病氣後のやうには、お見受け申しませんが、よほど大體が御壯健と見えますね』『そりやア貴嬢、貴公子の病餘など、違つて、根が全くの野生で御坐いますもの、死ぬほど煩つて

氣息奄々になつたところで、まづ面貌が紳士の感冒ぐらゐですな、つまり積族の系統で獸身に近い方ですから』『ホ、ハ、ハ、ハ、まさか貴方、いくら何でも、しかし、お身體の御壯健は王侯にも代へ難い幸福の第一と申しますから、何より御結構で御坐いますよ、あの倉橋さんも別段お弱くないやうに伺ひますが』『はい、なか／＼彼も達者の方です、拙者と違つて頭腦が能く出来て居ますから自然その割に身體は拙者より劣りますがね、それでも世間普通の人間と比較上、頗る健全です、第一、彼が身を大切にして衛生の注意と鍛鍊の勇氣に至つては實に他人の企て及ばざるところで、まづ朝は鶉の聲と争つて日の出るか出ないうちに寢床を飛び出すや否、褻衣のまんまで、井戸端へ駆け出して丸襟の頭上から冷水を二三十ばい、それが済むと戸を引き開け庭を掃き自分の書齋を拭き掃除して、冬でも額に汗が出るほど働かないと決して朝飯の箸を取りませんね、また人に過ぎた勉強力で讀書を致しますが、その間また

人に過ぎた熱心で力めて運動しますから、皮膚も筋肉も次第に固くなつて年々あの通り丈夫になります、物を容れるには器が大切といふ事は誰でも言ひますが、さて實行する點に至つては倉橋ほどの男まづ稀らしいです、これに限らず何事にも彼は言行一致、いはゆる實行的の男で、拙者などは十餘年來の交友、殆ど骨肉に勝るの間柄ですが、いまだ曾て一言の虚偽を構へた事も御坐いませんな、ところで世間もし彼に類する人ありとすれば、往々かゝる人の一失として度量狭小、頑固偏執、或は冷淡無情、甚だしきは残忍酷薄、この複雑にして限りなき變化の人生萬事を單純なる數學的の答案に比せむとする人物が多いやうですが、さて倉橋は妙ですよ、自己を戒むること頗る嚴格で在ながら、人を待つこと頗る寛で、むつつりとした無口者ですが、なか／＼情の深い觀察の行き届いた案外の捌けもんですよ、あんな眞面目な顔をして、不意に人を驚かすの滑稽と洒落を持つてるから猶更の不思議ですよ、ハ、ハ、ハ、おや、つまらない饒舌で夢中になつて、まだお茶も差上げませんでしたな、まことに失禮、只今すぐ」

そのまゝ、臺所へ走せ行けば、婆も心得て火鉢の火を掻き起し鐵瓶の湯を沸し番茶を煎じながら、「黒田さん、宜い加減に、お歸し申さないと却つて貴方」『わかつてるよ、さう野暮に喧しく言ふない、意地の悪い、まして戀の水上に掉さした粹の果ちやアないか、少しは自分の若い時を思つて察してやれ、倉橋だつて口でこそ四角張るが、心の中では婆さん、まさかね、どうで内證の裏表さ、盜賊を引き摺り込んで茶を呑ましたとも思ふまいよ、ハ、ハ、ハ、』『ホホ、ハ、自分の若い時に覺えがあればこそ、お歸し申す汐合が大事だといふんですよ、また盜賊は外から引き摺り込まなくつても黒田さん、家内に居るか知れませんぜ』『畜生、ふざけるな婆の癖に、ハ、ハ、ハ、』

人も愛嬌、番茶も出ばな、その炮じ加減を馳走ぶりに持ち出で、殊更ら慇懃に獻するが如く差出しながら、『お口には合ひますまいが、どうか召上つて下さい、お熱いところだけが取得です、ハ、ハ、ハ、斯ういふうちにも倉橋が歸れば宜しう御坐いますが』『い、え貴方、自分が勝手に、いつも不意にお邪魔いたすので御坐いますから、萬事お構ひ遊ばしては却つて恐れ入ります』『構ふにも構はないにも御覽の通り、これッきり、いはば哀れな境涯ですよ、まるで火事場の焼き出されと一般で』『どう致しまして、わざと今この御境涯、誰に貴方、出来ますもので御坐いますか、つね々父も、さやうに申して居ります、苦學艱難も其ま、引續いて遣れば出来るが中途で一旦身を立て、家をなした後また舊の苦學艱難に立戻るは、なみな尋常人の及ばないコツた、きけば三年といふが其三年の曉に門を開いて再び世の中に出る時は見物だ、おもひやられると、蔭ながら實に感心いたして居ります、ですから妾が、かや

うに伺ひますことも、父は、よく存じて、また妾も、いちく父に申した上で、まるるやうに致して居りますくらゐ』『ハ、アなるほどいや其邊の事も、倉橋に申し聞かせよう、定めし満足に感謝するコツて御坐いませう、なアに貴嬢、少しも御遠慮なさらないで、御氣分さへ向けば何日でも入らッしやい、また倉橋からも、をり々伺ふやうに勸めて置きますから』『どうか是非、お願ひ申します、かうして今は大切な御勉強最中で御寸暇というては御坐いますまいが、在官中は外の方よりも取分け、お心易う入らッしやったのですから、相變らず、まア御運動かたぐ、貴方も御同伴に』『ありがたう御坐います、お世話になる時だけ散々お世話になつて、今更ら急に御無沙汰するやうな男ではないンですが、むしろ其處に倉橋の倉橋たる所以、しかし、そんな事に關せず是非お伺ひ致すやうに申し聞かせよう、ところで拙者も、ついて參つて御差支は御坐いませんですかね、此奴元來無作法千萬な厄介物で、

をりく、場所も辨へず禮を失する事が御坐いますから、前以て其邊の御海容を願つて置きま  
す、萬事あの倉橋を御覽の眼からア殆ど貴嬢、お呆れなさいますよ、倉橋は常に拙者を評し  
て、安價時計の器械だの麥藁細工の箔だの乃至また出来損ひの南瓜野郎など、ハ、ハ、ハ、ハ、  
『ホ、ハ、ハ、あの倉橋さんが、そんな事を仰しやいますか、よくよくアお氣の合うた間柄  
で御坐いますねエ』『なアに氣は殆ど反對で謹直と放逸、緻密と散漫、黽勉と懈怠、沈黙と饒  
舌、まるで黒白の性行ですが、どういふもんか互に何を言つても言はれても腹の立つた事が  
御坐いません、世話せられても恩に著すといふ淨瑠璃文句の戀中と一般、我ながら不思議で  
す、つまり申さば腐れ縁ですな、この腐れ縁に繋がるもの我等二人の外に猶まだ三人御坐い  
ますよ、以上五人が今より十年の昔、隅田川の邊り汐入村といふところ、夏は蚊に  
責められ冬は布子一點寒曝し加之も喰ふものが無くつて年中の空腹を抱へながら苦學難行し

て来た連中ですから、實際その情に於ては骨肉よりも親しいです、就中この倉橋は其當時す  
で一味の謹勉家を以て稱せられ、萬事に周到緻密、さらに失策のない男ですから、先づ後  
見役といふ工合に控へて居りましたな』『御苦勞は御苦勞でも、さぞ御愉快で御坐いましたら  
うね、さういふ方々が五人も在らしつては』『我黨あの當時を回顧して常に苦快と言ひます、  
喜憂こもく、苦樂相半すといふのが世間普通の語で、我々のは徹頭徹尾の苦これ快と無理に  
叫んで押し通した時代ですから、甚だしき時は貴嬢、五人のうちの二人が外へ出て後に残つた  
三人の夫の男が一晝夜の斷食、二日目の朝、苦しませに新聞紙を敷いて其上へ米櫃を倒ま  
に伏せ、手の痛いほど三人が底を叩いて得たるところ一合たらず六七勺、全く一握みの粉米  
です、それで貴嬢、ともかく三人が一晝夜の空腹を肥さうといふんですから堪りませんよ  
中にも上田力といふ奴なざア五尺八寸二十貫目の大兵で、少し控へ目に喰はしたところが



一日に一升飯の難物が居るんです、しかしこの上田といふ奴が我黨隨一の趣味を備へた男で質朴剛毅のうちに自然の滑稽を含んだ鹽梅、なか／＼奇男兒です、ところで此奇男兒が其六七勺の粉米を兩手に恭しく捧けて三升炊の釜の底に入れたといふより寧ろ一粒づゝ並べたのですね、そして水を見そ二升五六合、溢るゝばかり汲み込んで、時しも秋の末、落葉を掻き集めて来て、急かす慌てず悠々寛々、とろり／＼と二時間半ほど炊きましたね、さア皆來い、いよく飯が出来たといひますから、餓鬼の如く取巻いて釜の蓋を開けると貴嬢、たゞ見る一面の薄白い濁り湯で、いやしくも米の姿が見たくも皆無です、すると上田が杓子を取って宛ら白癡が川へ落した錢を拾ふが如く、おもむろに靜に小心翼翼、そろつと掬ひ上げたのを見ると米粒が空豆ほどに膨れて今や將に溶解せむとする體です、どうせ溺れて死ねば膨れるもんだ正に是れ米の土左衛門、さア死骸を見届けた上は腹に葬れといふので、一掴みの

鹽を打込んで喰った時、いや吸うた時には貴嬢、多年の貧苦に馴れた流石の我々も聊か物の哀れを催しましたな、倉橋の如きは始終黙然として眼中たゞ涙あるのみ、其時その倉橋の涙が菩薩心夜叉手といふ名に化して、殆ど半月に亙る長篇の論文を朝夕新聞に寄せたのです、以來まづ暫時は彼が文筆の料に依つて、また米の土左衛門にも出喰はしませんでしたが、いやはや思ひ出すと懷舊の情に堪へませんよ、ハ、ハ、ハ、『おや、まア何といふ事で御坐います、お談話を承つたばかりでも涙が、なるほど、さういふ御苦勞を遊ばした方は格別、人に過ぎて世間に飛び抜けて、お志節の堅固なは全く其理由で御坐いますねエ、しかし大變に、お邪魔を致しました、お歸りになりましたら、どうか宜しく、是非お遊びに來ていたゞくやう父の使者に妾が伺ひましたと、くれ／＼も御傳言を願ひます』『まア貴嬢、よろしいぢやア御坐いませんか、今にも歸つて來るか知れませんよ』『いえ、また伺ひますから、今日は

此ま、御免を蒙ります』『ですか、そりやア甚だ、いや失禮ばかり、おのれ一人で饒舌り續けて、ハ、ハ、ハ、いづれ其うち倉橋から伺はせます、なアに貴嬢、動かなきやア首ツ玉に繩をかけて引き摺り出します』『ホ、ハ、ハ、さやうな荒い事を遊ばさず、どうか御手柔かに、もし何處の電話でも御通知下さいませれば、すぐ馬車を差上げますから』『や、最後の一發、ドンと胸に徹へて痛み入りました、ハ、ハ、ハ、』

なほも慇懃に送り出せば玄關に待ち受けし馬丁そのまゝ、走せ出せしが、引き違へて入り來りしは上田力、山の如き兩肩を怒らして達磨に似たる大兵肥滿、のツそりと停みながら眉を顰めて頻りに此方を見る體、黒田おもはず笑を含んで指さしつゝ、『あれ、あれが先刻お話し申した男で、わづか五勺の米を二升七八合にまで炊き膨らした奇男兒です、ハ、ハ、ハ、』いはれて綾子おもはず振り返れば、上田いよく目を丸くして不審の顔色、會釋しながら出で行

く色香いよく訝しげに見送りつゝ、『おい黒田、何だ彼女は、また乃公の顔を見て妙な事を言つたな、五勺の米が二升とか三升とか』『ハ、ハ、ハ、失敬々々、今あの女に例の土左衛門汁を吸つた昔時談話を仕たばかりのところへ君が來たからさ、彼女は倉橋が在官中の世話になつた大臣の娘で、ちよい／＼近ごろ當家へ來るがね、生憎今日は主人公不在で僕が代理を勤めたのさ、なかく美だらう、も少し君が早く來ると頗る面白かつたに、惜しい事をした、しかしまア通るが宜い、久しぶりだ、ハ、ハ、ハ、』『何だか理由は分らないが、相變らずの調子で、困つたもんだな君は、定めし蒼蠅く饒舌りぬいたこつたらう、べら／＼と、後で倉橋の迷惑になるやうな事を言やア仕なかつたかね、相手が年ごろの女だけに氣を付けんと不可ンぜ君、どこまでも食客は食客らしくハ、ハ、ハ、』『さう食客々々、いふない、いくら僕だつて氣が退けて竟には君、いちぢけてしまふからね』『いや少々、いちぢけた方が宜からう、段々と

憎氣が取れてくるから、ハ、ハ、ハ、ハ、』  
 互に笑ひながら書齋に打通りて、今しも立ち去りし袖の移り香なほ残る坐蒲團を、手に取つて翻しつゝ、坐せし上田の顔色、黒田おもはず苦笑ひして、わざと綾子が飲みし茶碗そのまゝに番茶を汲んで差出せば、『おい洗つて来いよ、こりや、今の女の茶碗だらう』『ハ、ハ、ハ、ハ、宜いちやアないか、あれほどの美人が丹花の肩端に觸れたる露か雫か茶の餘瀝か、兎に角お流れ頂戴、人に依つては感謝して呑むぜ』『馬鹿な、つまらない馬鹿口を聞かずに洗つて来い、なに面倒だ、面倒なら貴様の飲んだ其茶碗に注いでくれ』『こりやア恐縮だ、あゝ君なるかな上田なるかな、窈窕嬋娟たる美人の肩端に觸れしを汚れたりとして蓬髮垢顔の僕が齒齧に舐めたるを清潔とす、いや洗つて来る、今すぐ洗つて茶も入れ替へて来るから』『ハ、ハ、ハ、ハ、いかにも現金な男だ、此方が恐れ入つたよ』

あらたに入れ替へし土瓶と茶碗を盆に上せて恭しく右に捧げ、左に澤庵の古漬を山の如く盛りし鉢のまゝ携へて、しかも小笠原流の摺り足に出で来りぬ、『どうだ君、様子が宜からう、いつも斯ういふ風にしてると僕でも人に愛せられるんだがね、とかく天真爛漫すぎていけないよ』『天真爛漫すぎてなら宜いが、天真横著すぎて困るさ、その風で小笠原流と来ちやア殆ど茶番狂言だ、ハ、ハ、ハ、ハ、』『ハ、ハ、ハ、ハ、』時に君、今日は何か倉橋に用でもあつてかね』『いや別に用もないが、暫く訪はないからさ、また君が食客の様子どういふもンかと思つてよ、僕の家に住つた時と違つて嚴格な倉橋のこつたから少々、さすがの君も我まゝの度が狭められたらう』『眞實だ、敢て君を與みし易しと思つた理由ぢやアないがね、夫婦とも揃つて寛大なところから倉橋の倉橋たる所以の前へ出たんだもの、實ア少々、凹む時もあるよ、しかし我黨に小人は居らんね、いち／＼例の言行で容赦なく僕を眼前に責め付けるがね、また人の

知らない陰では言ふに言はれない情があるさ、しかも此ごろは以前と違つて、をりく不意に滑稽も出さず、どうかすると案外の洒落を發する事もあつてね、汐入村の昔よりやア君、たしかに二三分の圓轉滑脱を加へて來たやうだ、もしその一例を舉ぐれば今の美人に對する點に付いても、理あり情ありで、『今の美人と言やア、あれが新聞一件の女だらう、その當時僕は少しも知らなだが、四五日前、始めて川上夫婦から委細を聞いてね、驚いたよ、驚いたが、また倉橋が當時の覺悟と態度の慎重なるには感じたね、しかし其女が近來しばしば訪ひ來るといふ實際を目撃したのは今日が始めてだ、全體、どんな様子だね』『別段、どうといふ事實に現れたこともないがね、まづ女の方では、かの新聞に唄はれた口惜しまぎれの反動から湧いて出た同情の極、それに倉橋の人物が人物だから種々の感が加はつて、いつしか戀になつたのだらう、否、今日のところでは全くの戀に身を投じてる様子だね、しかも父の

大臣までが倉橋の出處進退を頗る立派として賞讃の餘り、しばしば愛嬢の此家に訪ひ來るを默許の體らしい』『む、さうか、なるほど、そこで倉橋が眞意、倉橋のこつたから軽々しく眞意も吐くまいが、まづその態度は、どういふ工合だね』『さアそこだ、それに就いて僕が過日、ちよいと何心なく倉橋の枕頭閑語といふ草稿を見たところが君、その中に某女に與ふと題せる一文、即ち彼美人に對する眞意だね、つまり我ために運び給ふ情は身に染みて嬉しいが、三年こゝに不出門の讀書生となつた我は今その戀に應ずる事が出來ない、と言つて我ために三年の色香を空しうさす事は猶更ら忍びないから、願はくは其戀を其ま、清く他へ運んでくれ、もし三年の後、それ我を待つといふでなく自然に運ぶべきところがなくて三年の後、なほ今の戀を無事に保たれた曉ならば、むしろ我の方より進んで迎へようといふ意味さ、しかし君、こりやア倉橋が意中の祕密で自分の草稿中にある一片の文章だから、かはいさうに